

波動実験艦武蔵　～遥
か遠き起源の惑星～

朱鳥洵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2205年。

宇宙を席卷したガトランティスの脅威は去った。

地球は行き過ぎた軍拡路線を撤廃し、新たな道を歩み始めている。

その頃、波動実験艦武蔵には新たな任務が与えられる。

ジレルを救った星巡る方舟、ガトランティスが用いた滅びの方舟を超える神秘の方舟、原初の方舟の探索である。

いま、古代文明を宇宙へと残したアケリアスの星へと人類は進もうとしているのである。

前人未踏の長期任務に挑むクルー達はそれぞれに思いを抱えていた……。

目次

第一章 壮途編

第1話 「新たな旅路へ」 | 1

第2話 「原初を探す旅」 | 11

第二章 断決編

第3話 「バラン星を飛び越えて」

22

第4話 「外野たちの小さな悩み」

36

第5話 「緑の星」 | 47

第6話 「なんでもないこの日々を」

68

第7話 「原初への門」 | 80

第8話 「輝く石に願いを込めて」

91

第9話 「紅き石の導き」 | 105

第10話 「招かれた地」 | 114

第四章 革新編

第11話 「自由への楔」 | 120

第12話 「勝利の条件」 | 130

第13話 「遠い記憶、乙女の心」

141

第14話 「サルガッソーの遭遇者」

151

第五章 師旅編

第三章 嚮導編

第15話 「救出作戦」 | 165

第16話 「選択」 | 180

第17話 「弔いの花」 | 192

第18話 「過去の痛み」 | 205

第六章 真誠編

第19話 「青い星、戦禍の中へ」

223

第20話 「戦争という現実」 | 233

第21話 「幻想からの脱出」 | 244

第22話 「神秘への道」 | 260

第七章 踏査編

第23話 「アケーリアスの遺産」

271

第24話 「青き星の子供たち」

280

第25話 「遙か遠き起源の惑星」

290

第26話 「帰還。そして新たな」

304

設定

設定公開 | 316

第一章 壮途編

第1話 「新たな旅路へ」

時に、西暦2205年。

ガトランティスの脅威は去り、地球は平和を取り戻しつつあった。

行き過ぎた軍拡路線を縮小した地球軍は、これまで後回しにされていた武蔵の改修作業を開始、探査船として、武蔵は生まれ変わろうとしている。

そして今日は、宇宙戦士訓練学校の卒業式が行われていた。

「おめでとー！ー！」

3人で囲むダイニングテーブルには、手作りの料理が所狭しと並べられている。

「えへへ……ありがとうございます、柑奈さん……」

パチパチと手を叩く彼女に恥ずかしそうに返す今日の主役。

「義弥さんも、何か言ってあげたらどうですか？」

彼女の隣で黙りこくっていた武蔵の戦術長、有賀義弥の脇腹を肘でつつくと彼は

「あつ、ああ」とたどたどしく返した。

「そうだな。卒業おめでとう、美佳」

「ん……ありがと、お兄」

「そういえば美佳ちゃん、今なら答えてくれるかな」

兄妹の会話を聞き終えた柑奈は身を乗り出すようにして美佳を見る。

「何をですか？」

「そんなきよとんとした顔しなくても……宇宙海軍を志望した理由、前聞いたときは『卒業する時までのヒミツです』って答えてくれなかったでしょう？」

「そうでしたっけ？ そう言ったなら今答えますね」

美佳の言葉に頷くと、2人は彼女を見つめた。

「……ガトランティスが地球に来てる時、私とても心細かったんです。唯一の家族のお兄は、フネにのって遠く行ってるし、家には私一人だし。でも、何が嫌だったかといえれば、お兄が帰ってこないかもしれないっていう不安と戦うことだった……。お兄がいなくなったら私は本当にひとりぼっち」

話すうちに、彼女の視線が落ちていく。

無理に話さなくても、柑奈がそう言おうとした時、美佳は「だから！」と立ち上がり、兄をまっすぐ指差した。

「だから、お兄と同じフネに乗っていればこんな思いしなくていいし、柑奈さんとも一緒

にいられるって思ったんです！」

自信満々に言い放つと、呆然とする2人を気にすることなく美佳は続けた。

「正直、地球を守るとか、宇宙の平和だとか言われたところでスケール大きすぎてピンとこないですよ。私、地球から出たことないし、地球どころか日本から出たこともないのに宇宙の平和語られたって絵空事でしかないってもんですよ」

「えー、美佳ちゃん？」

「大体何もかもお兄が『お前のために』って勝手に軍に入っちゃったのが悪いんだからね。一人残されるこっちの身にもなれって話！ 分かっているのお兄!?？」

「それは……ごめん」

ビシッと指差す妹に、義弥はただ謝るしかなかった。

「よろしい」

満足そうにニヤリと笑う美佳は腰に手を当て、さらに続けた。

「だから今度は私が勝手にしたの。お兄だつて勝手にしたんだし、別に文句ないでしょ？」

「ああ、俺は文句ないよ。それで、美佳の配属先はどこなんだ？」

彼の問いに「あーそうだった」とポケットの中をまさぐる。

「じゃーんー！」

2人の顔の前に軍の命令書を突きつけると、それを2人が読む前に自らその内容をドヤ顔で語り始めた。

「配属は船務科、そして第二リーダー手兼任の準第一艦橋要員として選ばれましたー！」

「そうなんだ……って、リーダー手兼任!?？」

「そうですよ柑奈さん、お兄や柑奈さんと同じ第一艦橋勤務ですー！」

驚きで口が開いたままの柑奈の横では義弥が食事をつまみながら、妹に話しかけた。

「へマだけはするなよ」

「うっ……一応、学年主席なんだからねー！」

「なら、なおさらだな」

彼の言葉にさつきまでの威勢はどこへやら、彼女は小さくなって席に着いた。

「まあ、そんなに脅さなくてもいいじゃないですか。今はガトランティスと戦ってるわけじゃないんですし、武蔵の任務で戦闘に巻き込まれることなんてあまりないと思いますから」

「分かってる。今のは美佳への注意喚起だよ」

「なに、お兄はそんなに私が信用ならないの？」

「ああ、新人クルーは何をしでかすかわからないからな」

「ぐっ……否定はできないけどなんかそのヘラヘラした顔がイラッとくる……！」

「どうどう美佳ちゃん、落ち着いて」

拳を震わせて口の端をひきつらせる美佳を柑奈が諭し、当の義弥は我関せずといった様子で「ん、これ美味しいな」などと料理の感想を述べる。

こうして、春の夜は更けていく。

食事を終え、片付けを妹に任せ義弥は夜風に当たるため少し外に出ていた。

自らの乗艦する艦に家族が乗る。

その事実は彼に十分すぎるほどの重圧を与えていた。

艦の防衛を担う戦術長としての責任が、ここに至ってようやく彼の肩に重しを乗せた。

「ここにいたんですね」

声に振り向くと、柑奈が彼に向かって歩いてきていた。

「この季節、夜は風が気持ちいいです」

「そうだな。気分転換にはいい」

視界の向こうには任務から帰還したと思しき駆逐艦数隻の衝突防止灯の光が見える。

時間断層がフル稼働していた時に比べれば軍艦の往来はその十分の程度まで減少し、波動砲に頼るアンドロメダ級、ドレッドノート級、護衛艦などに代わって波動砲をもたない駆逐艦の建造が増えていた。

それでも兵器としての波動砲は有用であり、国防衛のためとはいえ、いまだ主戦力の艦艇が波動砲を搭載していることに對する反対は飛び交っている。

「次は長くなるみたいですね」

うんと伸びをして、柑奈は遠くを見つめた。

「2年だったか。確かに長い……それを思うと、美佳が同じ艦に乗っているのはありがたいとすら思うよ」

「家族はやっぱりに近くにいるのがいいですから」

「ああ。それに、美佳は柑奈にも懐いてるからな。いてくれると助かる」

「っ……ありがとうございます……」

柑奈の顔が少し赤くなつた事を義弥は知らない。

ただ次の瞬間に吹いた風が、月明かりに照らされた彼女の髪をなびかせてその横顔をあらわにした時、不意になんとも言えぬ感情を抱いて目をそらしたただけだ。

「……気づいてないんだ、お兄」

2人の間に入る事なく呟いた美佳は、深いため息とともに風呂場へと向かった。

「いい加減気づけての、バカ兄」

ひととき苛立つた様子でそんな言葉を吐きながら。

地球／ドック

男は、改装を加えられている自らが指揮する艦を見つめながら、手すりに寄りかかる。「また、お前に乗る事になるとはな」

あの探査任務を思い出し、近藤はしみじみと言葉を発した。

波動砲薬室のハッチから、痛々しいまでに破損した突出ボルトがクレーンで持ち上げられている。

「――」

記録では読んでいた。拡散波動砲テスト時、予期せぬ負荷でエネルギーが逆流して暴発したと。

エンジンへの回路を遮断し沈没は避けられたが、波動砲口は大破し死者も複数出たと。

再出撃に際し、武蔵への波動砲再装備の案もあったが、これは技師長、戦術長、情報長の強い反対により棄却され、波動砲そのものが撤去される事となった。

ゆっくり降ろされる突出ボルトに代わり上げられてくるのは、薬室内を埋めるような大型の探査システム。

ようやく、探査船らしい装備がつけられた。そう思うと、無意識に吐息が漏れる。

「艦長？」

声の方を向くと、私服姿で首から証明証をぶら下げた女性が立っていた。

見覚えのないその姿に怪訝な顔をしながらよく観察する。

数秒の後、彼女の正体がわかった。

「……ああ、船務長か」

「えっ、まさか分からなかったんですか？」

「乗組員は艦内服姿で覚えてしまっていたからな。あまりに見違えたもんで驚いた」

「それは褒め言葉として受け取っておきますね」

はにかみながら、艦長とは少し距離を置いて彼女もまた武蔵を見つめた。

「そういえば、有賀くんの妹さんは今日卒業式でしたね」

「勤務先は武蔵だろう。わたしの希望もあったが、手を回したのは君だと聞いたよ。第

二レーダー手兼任とは」

「イスカンダルへの旅路で、ヤマトは士官候補生をレーダー手として起用していました。

学校主席の彼女なら十分職務を果たせると思っっています」

「そうか。それにしても、ヤマトへの希望が多い中彼女だけが武蔵を希望するとは、中々

どうして」

「それはきつと有賀くんが理由です。妹さんなりに、お兄さんのことを考えているんで

すよ」

——私も、あの子のために。

丹生もまたそんなことを思ったが、口にはださなかった。

ただ優しく微笑むその顔が、何より雄弁にそれを語っていた。

有賀家

「——くしゅんっ」

湯気が満ちる浴室で、唐突にくしやみがでた。

「んー……ちよつと寒かったかな？ お湯の温度……？」

お湯から手を出して温度を確かめてみたが、特に冷たいというわけでも室温が低いわけでもない。

首を傾げながら肩を沈めると、彼女は深いため息をついた。

「お兄と同じ艦に乗れたのは嬉しい……だけど、レーダー手兼任かあ……」

レーダー手は艦の周りの敵や障害物の位置をモニタリングする役目というのは分かっている。

それだけに、報告を一つ間違えると艦の生死に関わるのだ。

「ちやんとできるのかな……」

ついに口まで湯船へと入れて、水面にぶくぶくと泡を立てる。

不意に顔を上げた彼女は、お湯を叩きつけるように顔に当てて湯船の中で小さく拳を

握った。

「悩んでも仕方ないよね。できる限りやるだけだもん！」

誰もいない中立ち上がりながら宣言したその時、脱衣所の方から。

「美佳ちゃん、湯加減大丈夫？」

「へっ？ あつ、ああ……はい、大丈夫です、柑奈さん……」

「そっか、なら良かった」

静かに湯船に戻った彼女は、お湯のせいか恥ずかしさからか少し顔を赤くしていた。

——いつからいたんだろう……もしかしたら聞かれてたかも？

そんなことを思いながら、彼女は身体を温めていた。

その頃、リビングに3台並べて置かれた端末にはほぼ同時に同じ送り先からのメッ

セージが表示された。

それは出撃の時を知らせる一報。

武蔵は、再び旅立つ時を迎えていた——。

—— 第1話 「新たな旅路へ」 ——

第2話 「原初を探す旅」

出立の日。

ドックの中でハッチを開け、乗組員の乗艦を待つ武蔵を見て、彼女は息を呑んだ。

「これが、飛ぶんだ……」

全長300メートルを超える巨艦、その威容に飲み込まれそうになる。

兄は一足先に武蔵に乗り込んでいる。柑奈も同様、それぞれ戦術長と技師長の任務があるのだ。

「しっかりしなきゃ」

パンつと頬を叩き、気を引き締める。そして深呼吸と共に、胸に手を当てて頭を整理した。

「……………。よしっ」

意を決して一步踏み出した美佳は、タラップに足をかけた。

武蔵／士官部屋群廊下

彼は少しばかり怒りの混じった足取りで廊下を進む。

しばらくして何も言わずに扉を開けると、見慣れた背中に開口一番鋭く突きつける。

「どういうつもりだ」

「んえ？ ああ、有賀くん。何の話？」

荷物を解く手を止めて振り向いた彼女は、武蔵の船務長である丹生である。キョトンとした顔で首をかしげる彼女に、有賀は口の端をひきつらせた。

「だから、妹をリーダー手にした理由だ。君が手引きしたと聞いたぞ」

「あー、そういうこと。そう、妹さんは私の選出よ。それがどうかしたの？」

「どういうつもりだって聞いているんだ」

「どうもこうも、優秀な人材をリーダー手として私が選出して艦長に許可を取った。ただそれだけのことじゃない？ 士官候補生のリーダー手の先例はヤマトでもあるし、別に不思議なことじゃないわ」

「いや、それとは——」

なおも食い下がろうとする彼より先に、丹生は鞆に目をやりながら続けた。

「それとも、有賀くんは自分の後ろに妹がいるのは嫌なの？」

「それは……そういう問題じゃない……」

「彼女の家族関係を軍が調べないはずはない。その上で、彼女の武蔵乗艦は決められたの。なら私は、今度の旅で二交代制から三交代に変わるこの時に船務長として責務を果たせる交代要員を選ぶだけ。文句ないでしょう？」

「美佳が選ばれた事で、彼女に対してクルーがどう考えるかは考慮したのか」

それは、珍しく叩きつけるような正論を述べる彼女へ、彼が絞り出した反論だった。その問いを聞いた丹生は、睨むように彼を見つめた。

「もし彼女を兄の七光りで選ばれたとか言つてひがむ声が出たら私が全部受ける。選んだ責任は私にあつて、選ばれた側の責ではないわ。長つていうのはそういうもの、分かつてるでしょ、*“戦術長”*」

「……ああ、分かつたよ」

その答えに一転して笑顔を見せる丹生を尻目に、彼は部屋を出た。

頭をかきむしつて歩き出そうとすると、目の前に友人の姿を見つけて動きが止まる。

通路の向こうにいた彼も有賀に気づき、駆け寄つてきた。

「久しぶりだな義弥」

「泰平こそ、元気そうだな」

武蔵の航海長、三原泰平は彼に並ぶと肩を叩き歩き出した。

「むしゃくしゃしてたみたいだな」

「なんでだ？」

「髪。いつもと違うぞ」

言われてはじめて有賀は手ぐしで髪を整えはじめた。

それを見て小さく笑った三原は、思い出したように口を開く。

「それより、今度の任務をどう思う？」

「……悪い、内容はあまり確認してないんだ。俺たちは航海中に敵と遭遇した時以外、基本的にただ乗っただけだからな」

「それもそうだけど、士官なんだから一応確認くらいしとけよ……」

ため息をついた彼は、「まあいいさ」と語りはじめた。

「今度はマゼランまで行って情報収集だとき。軍拡はやめても覇権は広げたいのかね」

「さあな。軍拡はその規模が小さくなっただけでまだ続いているし、案外あり得る話かも
しれない。……ただ、それにしてもマゼランか」

遠いな、と有賀は天井を見上げる。

地球と大マゼラン雲、サレザー恒星系を結ぶルートはヤマトが旅したルートを基準として次元断層などの危険地域を避けた地球ガミラス通商路というものが存在する。

そのコースを辿るのならサレザーまでは最速で数ヶ月。しかし今回は大マゼランまでのコースは同じであつてもそこからサレザーへ向かうわけではない。

ガミラスの手である程度まで開拓の進んだ宙域の外側を行くと思われるこの任務は未知の敵との遭遇の可能性もある危険な航海になると予想できた。

「まあ、きつと大丈夫さ」

隣を歩く彼に笑いかけ、有賀は駆け足で艦橋へと向かった。

ドック／武蔵

巨大なエンジンノズルを見上げ、彼女はニヤリと笑う。

「そう、やはりヤマトにそっくりね、これ」

「これには戦闘経験のあるクルーが乗っていますから、安全面では心配ないかと」

「そんなことは今更心配ないわ。だってここは日本。日本の宇宙戦艦は優秀なもの」

まるで我が事のように語る彼女に辟易した様子で、男は「なぜそう思うんです？」と問いかける。

「キリシマ、ヤマト、アンドロメダ。これだけ言えばわかるわよね?? 過去の大戦で、日

本が作り、日本人の艦長が指揮した宇宙戦艦は多大な戦果をあげて生き残る。アンドロメダは沈んでしまったけれど、アレは強化された波動砲に耐えきれなかっただけ」

「はあ……」

彼の顔は更に不機嫌そうになるばかりだったが、彼女は構わず続けた。

「今この地球で宇宙艦に一番安全に乗れる国はこの日本よ」

「でもこの国には銀河もありましたよね？」

「そう、でもあのフネはダメよ。武蔵に比べて設備も自衛用の武装も少ないから」

そう言って、彼女は駆け足で乗り込み口へと向かった。

「ほら、あなたも急いで！」

はしやく無邪気な子供のように笑顔で呼びかけるその姿に妙に微笑ましさを感じる
彼だった。

武蔵／第一艦橋

見知った顔と共に、2年前と同じくそれぞれの部署で発進準備を整える。

それを指揮する声とモニター音が響く艦橋の静けさを断つように扉が開いた。

「へえ、艦橋の中の配置までヤマトと同じなのね！」

聞きなれない女性の声に全員が振り返る。

そこには、軍服ではない衣服を身につけた女性と男性、そして武蔵の艦長である近藤
が立っていた。

男性の方は「うるさくてすみません」と頭を下げているが、肝心の女性の方はそんな
事お構いなしに歩き回っている。

興味深そうに見回すと、ある席を見つけて駆け寄った。

「ねえ、その青い服の彼女！」

「はい、なんでしよう……？」

「名前はなんていうの？」

「佐伯柑奈です。この艦の技師長をしています」

「若いのにすごいわね」

「あなたも私と変わらないくらい年齢なのは……?」

「ところで、探査装置とか観測器系のメインって技師長のモニターでやってるの?」

柑奈はこういうグイグイくる感じの人は苦手らしく反応に困っている。

少し固まる彼女の代わりに答えたのは、通信越しに顔を見せていた情報長だった。

『惑星の環境は私のところ、第二艦橋と気象長、文明や遺跡については第二艦橋、それら全てを集約してデータベースにするのが艦橋ドームです』

「あら、割と分業制なのね」

『星のデータは膨大ですから、専門的な部分を人間がモニタリングして情報を纏めるのは機械がやるのが効率的です』

「ふうん、なるほどねえ」

『納得していただけたのなら、なるべく早めに彼女のもとから離れてくれると嬉しいんです、す、け、どっ!』

語尾に若干の怒気を孕ませた情報長に「あらごめんなさい」と一言残すと、彼女は艦長のもとへ戻っていった。

「ありがと、水月」

『柑奈はもつとはつきり言わなきやダメだよ、色々』

情報長の濱内水月は柑奈の親友であり、互いに助け合っている。

「うっ……分かつてるけど……」

それ故に水月の鋭い一言が柑奈に突き刺さることは稀ではない。

「みんな聞いてくれ」

これまで黙っていた艦長が口を開く。

全員が振り返ったのを確認すると、通信長の一ノ瀬海斗に目を配り、言葉を艦内に伝えるべく通信を開く。

「今回我々に課せられた任務は、マゼランを超えて神話の星、アケーリアスを発見、観測する事である」

「アケーリアスって、あの、古代遺跡の」

「そうだ」

有賀の言葉に答えた艦長は一息置いて続けた。

「ヤマトがイスカンダルからの帰路遭遇したという、ジレルを救った星巡る方舟。そして2年前、地球に迫ったガトランティスの滅びの方舟。それ以外にも、ヤマトやガミラスの航海の途中でいくつものアケーリアス遺跡に遭遇した」

ワーブネットワークや、ヤマトがデスラーから逃れるため突入した円筒状惑星、シユ

トラバーゼに残されたモノまでアケーリアスの遺跡は多岐にわたる。

それはすなわち、現在の地球かそれ以上の技術を持った文明がいたことを意味する。「そこで、我々はズオーダーとジレルの人たちの言葉を元に存在すると思われる『種まき方舟』、便宜上、惑星アケーリアスと呼称するが、アケーリアスの探索による当該惑星の存在の有無を調査し、存在しているのなら発見して地球へと帰還する。任務に当たるのは本艦のみ、困難な任務になる」

目を閉じて呼吸を整えると、柔らかな笑みと共に近藤は最後の言葉を紡ぐ。

「オレはこの艦を、この艦のクルーを信じている。ヤマトの姉妹艦たる武蔵は、ヤマトの魂を受け継ぐフネだ。我々は、この任務を確実に遂行する」

『了解』

艦橋で敬礼するクルーを見まわし、近藤は艦長席へ向かった。

「今回の旅はアケーリアス遺跡の探索、調査が重要な役割を示す。よって、アドバイザーとして宇宙考古学者のカレン・スタイラーさんと助手の須藤康行さんに同行していただく。カレンさんは第一艦橋に、須藤さんは第二艦橋にて航海の助言をお願いしたい」

「了解、艦長。あ、そうそう」

形の崩した敬礼で返したカレンと呼ばれた女性は、彼女を見るクルー達を見まわし、自らの赤い瞳を指差した。

「あたしは祖先がマーズノイド、生まれの国籍はアメリカよ。でも今は日本人。日本の宇宙戦艦に乗れて嬉しいわ。みんな、よろしくね」

満面の笑みで言い終わると、サブコンピュータ横の空席へと腰を下ろした。

須藤という男性は深くお辞儀をすると、エレベーターへと入り下へと向かった。

それを見届けた艦長は席について航海長と機関長に目を配った。

「波動エンジン、フライホイール始動。補助エンジン点火」

「了解、フライホイール始動」

「慣性制御良好、ガントリールロック解除。武蔵、浮上します」

艦体下部のスラスタが開くと、ロックから解放された巨艦はゆっくり空へと浮上していく。

補助エンジンの推力で空を進む武蔵は、尾を引きながら両舷から安定翼を展開し、海上を波を立てながら加速していく。

「波動エンジン接続」

機関長の指示で艦内に機関音が強く響く。

メインエンジンのノズルから火を噴き、慣性で体が引かれるほどの加速を行い、艦首が上へと向かう。

炎で巻き上げられた海水が高く昇る。

瞬く間に地球を外から見られる高度まで登った武蔵は、安定翼を閉じて月を超え、火星を間近に見る頃となった。

「——懐かしいなあ」

火星を見つめ、カレンは呟く。

「あなたは、火星を見たことが？」

有賀が問うと、彼女は小さく首を振った。

「記憶では、見たことはない。けどなんでもかな……故郷を見ると、たとえこれまで見たことがなくても懐かしいと思ってしまう。あなたもあるでしょう？」

「……ええ、たまには」

有賀の言葉が終わると同時にエンジン音が増していく。

艦尾の炎が赤から青に変わると、武蔵は火星に別れを告げてワームホールへと突入した。

これから彼らが向かうのは、人類の根源を目指す旅。

種まく方舟は今も、その場所で彼らを待っているのだ——。

——第2話 「原初を探す旅」——

第二章 断決編

第3話 「バラン星を飛び越えて」

——地球を発つて2ヶ月。

1日一回のワープを順調にこなし、武蔵は往来のガミラス、地球艦隊とたびたびすれ違ひながら、バラン星へと向かうワープゲートを目前としていた。

「あと一回のワープでワープゲートか」

「ああ。流石にここまででは地球とガミラス双方の艦隊が行き来してるから安全だな」

有賀の呟きに答えた泰平は、あと一時間と迫ったワープのため機材を調整していた。

機関長は直接フライホイールの調子を見るため席を外しており、艦長は一ノ瀬と共に突然の通信のため通信室へと向かっている。

「ここまで月一度しか戦闘訓練をしていませんが、いざ実戦となった時これで大丈夫なんでしょうか？」

来島の声に「ああ」と答えた有賀は、彼女の方を振り返りながら続けた。

「訓練での成績は上々、何も心配ないさ」

彼の言葉が終わると同時に艦橋の扉が開き、「戦術長」と呼びかける声があった。

「宗方隊長、どうかしましたか」

立ち上がって答えると、宗方は頬をかきながら「大したことじゃない」と前置きして本題を切り出す。

「俺の乗機なんだがな？　一応今こいつにはゼロ、ファルコン、タイガーって乗ってるだろ」

「ああはい、三機種乗ってますが、それが？」

武蔵は今回の単艦での長期任務のため、元はアルマイルにいた航空隊から、アルマイル大破後武蔵に移乗した人員を正式に武蔵航空隊として19人乗せている。

それに伴い、元々配備されていた後部第一格納庫のコスモゼロ2機に加え、小隊リーダー機としてコスモタイガーII単座型が7機、コスモファルコンが12機搭載された。

現在航空隊長の宗方勝弘は隊長機であるゼロに搭乗しているのだが、直前に行われた演習ではコスモタイガーIIに搭乗していた。

「ゼロとタイガーに乗ってわかったんだが、ありやあオレの性に合わん」

「……はい？」

「長年ファルコンに乗ってたからか知らんが、たとえ旧式になってもファルコンの方が扱いやすくてな。だからよ、戦術長。オレの機体、ファルコンに変えてくれないか？」

これは困った、と有賀は頭をかく。

「艦長に許可は？」

「ああ、ここに来る途中通信室の前で会ったから直談判したら、戦術長の許可が下りればそれでいいですよ」

「本当にそれでいいんですか……」

「地球を離れたこいつの法は艦長だからな」

あなたがそれを言いますか、と有賀は深いため息をついた。

「航空隊のメンバーで誰とかわるかはもう決まったんですか」

「それは問題ない」

「分かりました。それでは僕から言うことはありません。塗装や仕様は整備長に言っていただければ。僕と艦長の許可は得ていると」

「了解。ありがとう」

敬礼をした隊長は駆け足でエレベーターへ戻り、艦橋を後にした。

「はあ……後で識別変えなきゃな……」

そう呟いて席へと戻った有賀に、柑奈はエレベーターからモニターへと視線を戻しながら話しかけた。

「結構自由ですよ、うちの艦長」

「そうだな……まあ今回は艦載機の話だったから俺に……」

「なんなら、副長より義弥さんの方が色々任せられてませんか？」

「いやそれはない。多分副長は俺たちの知らないところで色々——」

「前会議で副長と話した時、『有賀くんがすっかりしてるから副長としての任務が少なくて助かるよ』とか言ってたけど」

「ちよつと艦長のところ行ってくる」

横槍を入れた泰平の言葉に立ち上がったが、来島と柑奈が「いやいやちよつと待ってください」と引き止めたため、有賀はしぶしぶ席に戻った。

「納得いかない」

「それだけ信用されてるって事だよ。良かったじゃないか」

「艦長は次期責任者に戦術長を推してるみたいですよ」

それまで黙っていた気象長の棚橋小百合が会話に入ってきた。

「えっ？ いやなんで俺なんか……」

「逆に有賀くん以外ありえないと思うよ」

前回の任務で最後の戦闘となったラーゴラスとの戦いを思い出しながら、丹生はにっこりと笑う。

「どうだか」

彼の声と同時に艦橋の扉が開き、一ノ瀬と艦長が戻った。

「みんな聞いてくれ。当初本艦はバラン星の脇を抜けてマゼラン方面へと向かうつもりだったが、急遽バラン星へと停泊する事になった」

「停泊ですか」

泰平の言葉に「そうだ」と返し、近藤艦長は続けた。

「本艦の任務の探索範囲に関わる話だ。バラン星で、深宇宙探索空母であるアカギと合流する」

「待ってください、アカギは確か銀河系での任務だったはずでは」

「そうだったのだが、銀河系での調査任務はラボラトリーアクエリアス一隻で十分との結論が出た事で、アカギは本艦同様に惑星アケリアスの探査に回る事となった。その範囲の調整のため、バラン星でアカギと落ち合わなくてはならん」

有賀への説明を終えると、艦長は泰平と目を合わせた。

「本艦は予定通りワープを行い、バラン星を目指す。全艦、ワープ準備！」

バラン星

黒と赤に彩られた惑星。

イスカandalへと急ぐヤマトの波動砲によって中枢が破壊され、一時は異形の星と化

したが、地球とガミラスの技術で再建、元の姿に近い姿を取り戻した。

どこからかガミラスが輸送したワープネットワークシステムのコアを用いて再建されたバランは、以前よりも広い範囲からのワープを受け入れられる星となったのである。

今や大気でできた惑星内に地球、ガミラスともに数十隻の艦艇を係留できる巨大ドックを持つ中間基地と化したバラン星は、通商路を行く艦艇にとってなくてはならないものとなった。

バラン星付近を防衛する地球の駆逐艦隊の背後にそびえる巨大構造物がワープゲート。

いくつもの凶形が組み合わさったような形をしたその中心が円形ににわかに輝き始める。

それを確認した駆逐艦が進路を変え、艦首をバランへと向けるのとはほぼ同時に円の中心から水柱を立てながら、それは姿を現した。

「ワープゲート通過完了。システムに異常ありません」

ヤマトに似た艦——武蔵は、にわかに速度を上げてワープゲートから距離をとる。

消えかけた光が再び灯った時、武蔵とはまた違う艦艇が水柱の中から出現した。

純白の船体の両舷に増設された長大な飛行甲板を持つそれは、艦橋後部に増設された

もう一つの飛行甲板によってその系譜を示す。

それがアンドロメダ級の一つであることは疑いようもなく、青く塗装された艦首と白い船体、そして黒い甲板が他のアンドロメダ級とは異なる様相を示していた。

「ワープゲートから新たな艦影を確認。識別確認……AAA—35、深宇宙探査空母アカギです」

武蔵と並ぶアカギ。

ヤマト級を超える全長を持つアンドロメダ級において、アカギは通常空母型よりもさらに大きな船体を持つ。

「あの艦、大きいな……」

窓から見えるアカギは、データで見るとよりもさらに大きく、また美しかった。

瞬間、バランスからの入電と共に前方から2隻の駆逐艦が近づいてきた。

「武蔵、およびアカギへ通達。駆逐艦の誘導に従い入港、接舷されたし」

一ノ瀬の読み上げと共に眼前の駆逐艦も回頭、2隻はほとんど同時に光信号を発する。

『我に続け』

それを受けた泰平は駆逐艦の背後へと舵を向け調整し、一路 balan へと向かった。

赤い雲を抜けると地球の様式にガミラスの様式が混ざったようなドックが間近に迫

り、大きな隣り合わせの区画の誘導ビーコンが点灯している。

誘導をビーコンに任せた駆逐艦は踵を返して後方へとすれ違い、武蔵は着陸と同時に両舷をガントリーロックで固定された。

「武蔵、艦体固定完了しました」

泰平の言葉に頷いた艦長は、立ち上がると同時に目を配る。

「戦術長、技師長、ついてきてくれ」

「はい」

艦長と共にエレベーターに乗り込んだ2人は、そのまま艦を降りた。

balan 星ノドック通路

武蔵とアカギが見守る通路へ出ると、アカギから出てきた三名がこちらへ敬礼しているのが見えた。

アカギの艦長は冴島健介、43歳にして地球の探査任務の一翼を担うアカギの艦長へと抜擢されたエリートである。

現在使用されている主要な探査用宇宙艦は武蔵、アカギを除くと銀河及びラボラトリーアクエリアスとなり、地球はこれ以上の探査艦の建造は行わないという。

とりわけアカギはアンドロメダ級を基本設計としつつもそれとは大きく異なる艦容

を持つ艦であり、そのアカギの乗組員には優秀な人材ばかりが選出されている。

「お会いできるのを楽しみにしていました。近藤艦長」

「こちらこそ、冴島艦長」

爽やかにはにかむ冴島に近藤が返すと、冴島の隣に立つ2人も一步前へ出た。

「あなたが武蔵の有賀戦術長ですね！」

「えっ、そう、ですが」

有賀の姿を見るや前のめりになって話しかける彼に気圧される。

「あなたの指揮した戦闘の詳細は見させていただきました。それ以来、僕はあなたに憧れていますー！」

「はあ……はあっ!?？」

「お会いできて光栄です！」

彼に流されるまま握手を交わす有賀だったが、その引きつった顔は直りそうもない。

「こちら金浦戦術長、困ってるでしょう」

隣の彼女に肘でつつかれた金浦は「す、すみません」と頭を下げ、有賀へ敬礼を示す。

「アカギの戦術長、金浦拓馬です」

「武蔵の戦術長を勤めている有賀義弥です」

「良かったですね義弥さん」

横から入った突然の一言への返答に困っているうち、金浦の隣の女性が軽く頭を下げる。

「うちの金浦がご迷惑を……わたしはアカギの技師長、蔵中瑞穂です」

「武蔵の技師長をやっています、佐伯柑奈です。いいんですよ蔵中さん、義弥さんは恥ずかしがってるだけで迷惑だとは思ってませんから」

「おい」

ぴつたりと重なった金浦と有賀の声にクスツと笑う女性2人。

「では、こちらへ」

そんな部下の様子を見た冴島の一言で、6人は中に用意された会議室へと入っていた。

「サルガツソー、ですか?」

有賀が聞き返すと、冴島は頷いて図に示されたある宙域を指した。

「武蔵とアカギがそれぞれの宙域を探索した際、双方の探索範囲に入るのがこのサルガツソーです。ガミラスからの情報によれば、地球時間でここ数ヶ月この宙域で艦隊がいくつも消息を絶っています」

「そこに次元断層がある可能性は?」

「我々も佐伯さんと同じくそれを疑いましたが、消息を断つ直前に艦隊が送った画像はその可能性を消すものでした」

蔵中がパネルを操作すると、画面に画像が表示される。

そこには通常空間に漂う数多の艦の残骸と、行方不明になっていたとみられるガミラス艦……大破したデストリア級が映っていた。

デストリア級の目は微かに戦闘状態を表す橙に点灯しており、破口はビーム砲の着弾を示している。

「この直後、戦闘音と共に艦隊は消えたと言います」

「戦闘音？」

「応戦しろ、という音声が最後までいたです」

——ということとは、ガミラスは一方的に攻撃され、撃破されたということ。

考え込む有賀を横目に、近藤は身を乗り出した。

「ガミラスのサルガツソーに対する対応はなんでしよう」

「本土から、反射衛星砲搭載型アンドロメダ級改造艦を旗艦とする総勢17隻の艦隊をサルガツソーへと派遣するとのことでした」

「サルガツソーごと消し去るという解釈でよろしいので」

「それでいいと思います、近藤艦長」

「ですが、あれだけ広い宙域を消しとばすなら拡散波動砲の方がいいのではないですか？」

有賀の疑問は至極当然であった。

拡散波動砲の威力はガミラスも知るところであり、またガトランティス戦時は時間断層でのライセンス生産によって複数の波動砲搭載艦を完成させていた。

反射衛星砲は威力こそ高いが、狙撃に適した兵器であるため大量破壊は望めない。

その問いに対し、金浦は「いえ」と反論する。

「イスカンドルの手前、ガミラスは波動砲を表立って運用できないんです。イスカンドルは波動砲には絶対反対の姿勢ですし、イスカンドルを信仰するガミラス人も少なくな

い。波動砲一つであそこの平穏が脅かされるのは避けたいのでしよう」

「つまりは、反射衛星砲搭載艦が今ガミラスにできる最大の破壊措置、ということか」

金浦が頷くと、画面がもとの宙域を示していた。

「近藤艦長。武蔵とアカギは、極力この宙域を避けて行動すべきです。もしここから救

難信号が出されていた場合は——」

「……生存者がいる可能性は無視できません。その際の行動は、貴艦との協議で決定し

ましよう」

「——わかりました」

身を乗り出していた冴島は席につき、「それでよろしいのですね」と確認した。彼としては、武蔵単艦、ないしは武蔵とアカギの共同作戦において艦が損傷、喪失するような事態は避けたいのだろう。

しかし近藤は、隣に座る有賀の思いを代弁するように。「何事も、人命には代えられませんから」

武蔵／第一艦橋

3時間に及ぶ話し合いの末それぞれの担当宙域が確定し、艦長、戦術長、技師長が艦橋へと戻ってくる。

「遅かったな、戦術長」

「ああ、悪い」

短く交わしながら席につく。

それを見届けた近藤は、まっすぐ前を見据えた。

「機関始動、発進用意」

「機関、始動します」

艦内にエンジン音が響き渡る。

「ガントリーロック解除。艦隊固定なし」

両舷の固定具が外れた艦体を整え、航海長はゆっくりと艦を後退させつつ上昇機動をかける。

武蔵の隣ではアカギも同様の機動をかけていた。

「武蔵、発進します」

エンジンの炎がかすかにバランの大気を巻き上げると、艦は瞬く間に惑星の外へ出た。

『貴艦の健闘と、航海の無事を祈る』

隣につくアカギと同様の光信号を送り合い、武蔵は更に加速をかけた。

「フェーズ進行。ワープゲートに突入します」

武蔵が水しぶきをあげながら、虚空の彼方へ消えていく。

ここからが、新たな旅の始まり。

——原初の星は、勇士を待ちわびている——。

——第3話 「バラン星を飛び越えて」——

第4話 「外野たちの小さな悩み」

バランを発って数週間。

武蔵はサレザー恒星系に向かうコースから外れ、未踏の大地へと足を踏み出した。

そんな武蔵のリーダー手席に座る少女は、ただ前に座る青年の背中を見つめていた。

——このフネに乗ってから、一度も話しかけてくれないな……お兄……。

仕方のない事だと割り切っていたつもりだったが、実際はそうもいかなかった。

親しい家族、兄の姿を以前より遠くに感じてしまう。

「水月、交代の時間だよ」

「んー、そんな時間かー」

艦橋に入った柑奈が水月に話しかける。

視界に見える物憂げな少女の顔は、柑奈にはとても痛々しく見えた。

「柑奈、これつけといて」

「えっ？ ああ、うん」

小さなイヤホンのような機械を手渡した水月は、ひらひらと手を振りながらエレベー

ター前にいた泰平と来島を道連れに艦橋を降りていった。

「……なにこれ」

その形から、恐らく耳につけるものだろうというのだけは分かった。

右耳につけると、『あー、あー、テストス』という声が聞こえてきた。

——それも、大音量で。

思わず顔をしかめる柑奈だが、幸い音漏れはしていなかったようで、艦橋には静かな空気が流れていた。

慌ててメッセージを立ち上げた柑奈は、水月の端末のアドレスへ向けて『聞こえてるかどうか』と送信する。

『マイクテスト、マイ……ん？ メール……良かったー聞こえてたー！ ごめんごめん、今音量下げるね』

『えっ、その音量って聞き手側から調整できないんですか？』

音量が下がる向こうで口を開いた来島の言葉に一人頷く柑奈。

心の中で「よくぞ言ってくれました理沙ちゃん！」と思っている事だろう。

『まあ今はテスト機だからね。実用版では音量調整できるようにしておくよ』

『テスト機だからこそ、そういうの必要なんじゃない？……』

『だーいじよぶ、なんとかなるからさ』

心配そうな来島に対しヘラヘラと返す水月。顔は見えないが、恐らくヘラヘラして

いるのだろうかという図は頭に浮かぶ。

『柑奈、耳につけた機材を指で触って声出してみて?』

「……………」

その指示に疑問を感じながら耳の機材に手を当てて、小さく「あー」と声を出す。

『よし聞こえた。ありがと、柑奈』

「うん。これで、話してもいいのね」

『オツケーオツケー。小声でも聞き取れるから静かな艦橋でもコソコソ話せるね』

「……………水月、まさかサボる目的で作ったんじゃないよね」

『まさか、ちゃんど情報伝達に役立ちますよー』

「どうだか」

「呆れられちゃった」

「……………話し方の問題、ではないですかね……………」

さも意外なように言う水月に、来島はため息交じりで指摘した。

「みんなここにいたのね」

その声に視線をあげると、彼女達の元に駆け寄る丹生が見えた。

「あ、船務長」

「三原くんもいたの?」

彼女の姿に声を出した泰平に、丹生は驚いた表情を見せた。

「まさか気づかれてないとは」

「あはは、いやごめんね」

軽く謝罪の言葉を述べる彼女をそれ以上追及せず、泰平は「で、本題だけど」と切り出した。

「俺たちは、あの兄妹が艦内で全く話していないことに痺れを切らした、ということではないな?」

「はい、それで間違いありません」

頷く来島の肩を叩いて、丹生は口を開く。

「理沙ちゃんがそう思ってるなんて意外だったわ」

「……上官が『らしくない』と、気持ちよく戦えませんか。それに……」

「それに?」

「せっかく近くにいる家族です。いつ会えなくなるか分からないなら、話せるうちにたくさん言葉を交わすべき、です」

「……うん、そうだね」

何を思ったのか視線を落とした彼女の頭を撫でる丹生。

来島は少し大人しく撫でられていたが、すぐにはと気づいた様子で距離をとった。「船務長、わたしもう22歳ですから、いつまでも子供扱いしないでもらえますか」

丹生を指差してキツめにそう言い放つ来島だったが、その頬は少し赤かった。

それを見た水月、丹生、泰平と音声だけを聞いていた柑奈は「まだ子供だなあ」と思いつつ、頬を緩めた。

「な、なんですか皆さん、ニヤニヤして……気持ち悪い……」

「理沙ちゃんはおかしいなあと思ってさ」

「はあ？ 急に何を言つて——いきなり抱きつかないでくれますか!?」 離し、離れてくつ……だ、さ、いー」

「暴れない暴れない。暴れても離してあげないからね」

「よし本題に戻るよー」

「こ、このままですか……!?」

水月の一言で話は切り上げられたが、後に残ったのは不機嫌そうな顔をした来島と、そんな彼女を後ろから抱きしめて笑顔を浮かべる丹生であった。

「ねえ柑奈、戦術長はどうして妹さんに話しかけないと思う？」

通信機越しに会話を聞く柑奈に意見を求めると、迷いながらの返答が帰ってきた。

『話しかけられないと思ってるのかも。肉親だからって』

「どういふこと？」

『家族が乗ってるって意識すると、指揮に影響が出るかもしれない。義弥さんならそう思っても不思議じゃない』

「アイツ、その辺は真面目だからな……」

深いため息とともに泰平が言う。

「そういえば地球を出る前に私のところ来た時、妹さんをレーダー手に配置した事に怒ってたみたいだけど……」

丹生が来島の頭に顎を乗せながら呟くと、柑奈は『多分怒ってたのはそのせいじゃないです』と通信する。

『私の予測ですけど、多分義弥さんは……危険な任務にこそ付いてきてほしく無かったんだと思います。だから、それを止める権限があった船務長にしか言えなかった』

「家ではどうだったんですか、技師長」

彼女の言葉を聞いていた来島が聞くと、柑奈は少し上ずった声で。

『な、なんで……っ？』

「なんでも何も周知の事実かと」

『そっかあ……』

何故か落胆した声を出した柑奈はしかし、すぐに声色を戻した。

『家では普通でしたけど、どことなく軍入りを諦めさせたがってたような気はします。美佳ちゃんには逆効果だったみたいですが』

「有賀くんも迷ってたのかな……」

きゅつと来島の肩を抱く。

「船務長？」

微妙な力の入りに気づいた来島が反応すると、丹生は少し力を緩めながら首を横に振った。

「なんでもない。けどまあ、そうだね。たった一人の家族だし、危ない場所には連れてきたくないよね……」

はぁ……と深く息を吐き出す。

「……あたし、間違ったのかなぁ……」

彼女をこの艦に乗せた張本人としての責任が重くのしかかる。

妹を想う兄の気持ちは丹生にも分かる。

彼女にも遊星爆弾症候群を患っていた従姉妹がいる。もし彼女が軍に入りたくないなどと言えば、当然引き止め、諦めさせようとするだろう。

心のどこかで、自分とは違うものだと考えていたのかもしれない。

「あたしのせいか……」

「そうでしようか」

ぼつりと呟いた言葉に来島が答える。

「それってつまり、戦術長ともあろう人が妹1人守る自信もないって事じゃないですか」
「理沙ちゃん？」

「あなたの肩には妹1人じゃなくてクルー460人の命が乗ってるんだって事を叩き込むべきです」

「いや、今回の話はそれは——」

「関係なくないです、航海長。肉親だから特別扱いしちやいけないとか言ってますけど、話しかけないという選択はむしろ特別扱いしてるってことじゃないんですか？ 家族なんだって分かっているんなら、並んで歩いてくれないとこっちが気が気じゃないんですよ」

珍しく憤慨した様子の子の来島。

泰平は水月、丹生と目を合わせると、ふふつと笑いはじめた。

「な、なんですか？」

それに身構える彼女に「いや」と短く答えると、呼吸を整えて続けた。

「なんとなくだけど、言いたいことは分かった。そこで、俺に提案があるんだ」

自信に溢れた顔で宣言すると、彼はある場所へと向かって歩き始めるのだった。

艦橋

「なんか微妙に心配なんだけど……」

泰平に「佐伯さんが今回の要だから」と言われた柑奈は、耳の機材を外しながら小さく息を吐き出した。

「何浮かない顔してるの？」

「うえっ!!？」

背後からの声に振り向くと、赤い瞳がこちらを見ていた。

「か、カレンさん……」

ほっと胸をなで下ろす。

古代遺跡の調査アドバイザーとして同行している彼女は、正規クルーのようなシフトがあるわけでも所定の居場所があるわけでもない。

そのため平時は、助手共々こうして艦内を自由に歩き回っているのだ。

「ダメよ、あなたは笑顔の方が似合うんだから」

そう言いながら柑奈の頬を触り、口角を無理やりあげようと力を入れた。

「……いいはいれふ……」

「あら、痛かった？」

「くくくと頷くと、カレンはあっさり手を離した。

「痛い……」

「あなたがあんなに暗い顔してるのが悪いのよ。途中で会った航海長くらい笑顔の方が良いと思うけど」

「航海長？ どこで会ったんですか？」

「艦長室の方に走って行く時にすれ違ったわよ？」

「……艦長室？」

艦長室

近藤は、顎に手を当てて何かを考えている。

その理由は、彼の隣に立つ航海長に他ならないのだが。

「惑星ビースリーで補給、か」

「はい。主計科からの報告にもありましたよね、補給が必要と」

「ああ。だが、何故調査隊がこの3人なんだ？」

端末を指差しながら問うと、泰平は本題を切り出した。

「戦術長のためです」

「有賀か」

「はい。同じ艦に妹が乗っていますが、その彼女と出航以来会話をしていないのです」
「……………ふむ」

「本人にはいい迷惑かもしれませんが、砲雷長をはじめ彼の部下や一部クルーには彼が妹とうまくいってない事を心配する声がありまして……………」

「そうか……………」

「それに、この人選は様々な状況に対応できると、船務長から」

「わかった。補給状況も合わせて考えてみよう」

「はい」

敬礼して艦長室を後にする泰平を見送った近藤は、少し頬を緩めた。

泰平や丹生が彼の事を心配しているのは分かっていたが、そこに来島が絡むとは近藤も予想外であった。

「普段はそんなことおくびにも出さないのにな」

小さく呟きながら近藤は偵察案に承認印を付け、モニターに映し出された外を見つめた。

艦は星の海原に行く。

何が起こるかわからないこの海を、彷徨うように。

—— 第4話 「外野たちの小さな悩み」 ——

第5話 「緑の星」

眼前に広がるは、緑の大地。

恒星の光に照らされたその星は、記録にあるビーメラ4の外観とよく似ていた。

星の名は、惑星ビースリー。

地球と似た環境であると目される星であり、そのビースリーに武蔵は補給のため訪れた。

ガミラスのデータベースに存在するこの星であるが、ガミラスはこの星の存在を知っているだけで探索した事はなく、データのほとんどが空欄であった。

「最終チェック、シーガル発艦準備完了」

『了解しました。では定刻通り、十分後にエアロックを解放します』

「了解」

コクピットの中で有賀はシーガルのコンソールを操作しつつ通信を終えた。

コスモシーガルはヤマトに搭載されたものと同じものを搭載している。

第三格納庫の拡充に伴い搭載機数は増えているが、艦に探索装置を持つ武蔵がシーガルに頼る事は少ない。

「どうして今回はわたし達が偵察しに行くんですか？」

後部座席で柑奈からインカムを受け取りながら、美佳はそんな問いをぶつける。

「えーっと確か、大気層が思ったより厚くて外部からスキャンするとノイズが大きいため、だったと思うよ。……義弥さんもつけてください」

彼女に答え、操縦席の義弥にもインカムを手渡す。

このインカムは以前、艦内で柑奈がつけさせられたテスト機の実用機である。

柑奈が取り付けるインカムには通常回線のほか秘匿回線として、第一艦橋の水月の通信が入る設定になっている。

「……………」

インカムが入っていたケースの隙間から、白い角が飛び出しているのが見えた。

取り出して開くと、見慣れた字で書かれた文章が顔を出す。

『ヨロシク頼んだよ、兄妹のキューピッドさん』

その一文の下には、弓矢を番えた天使の姿が描いてあった。

「そろそろ出撃時間だ」

コクピットで機内の気密を確認した有賀は管制室に親指を立てて準備完了を知らせる。

ゆっくりと開いていくシャッターから、クレーンで吊り下げられたシーガルの機体が

露出する。

「こちらシーガル、発艦許可を」

『艦橋よりシーガル。発艦許可』

「ラジャー。テイクオフ」

固定が外され、慣性で下へと流れる機体を整えると、エンジンをふかしてシーガルは星へと飛び去った。

艦橋

「あの3人だけで大丈夫なんですかね」

戦術長席に座る来島が口を開くと、水月は楽天的な笑顔を浮かべながら。

「だーいじょーぶ。柑奈と、家族を信じてればさ。それに、インカムでどこからでも通信は届く。何かあればすぐ助けられる」

「そのインカムなんだけど」

レーダーから水月へと視線を移した丹生は、長い髪を耳にかけながら問いを放つ。

「ヘルメットに通信機能があるのに必要？」

「アレには性能的に限界があるので……この星みたいに外部から詳しく観測できない大気濃度だとノイズが多く入りすぎるんです。インカムはそれより安定して通信ができるので、例えばシーガルが喪失していても大丈夫です」

「シーガルが使えなかったら、俺たちが行く時に義弥がいる場所が分かるってことか」
星を見つめる泰平の言葉に頷くと、水月はモニターと向き直った。

水月の言葉通り、この星に入るとすぐにシーガルの通信機がノイズを吐き始めた。
雑音しか聞こえない機体とは対照的に、耳につけたインカムからはクリアな音が聞こえている。

「こちらシーガルより艦橋。機体の通信機が使用不可となったため、今後報告は全てインカムから行う」

『分かりました。大気組成などはどうなっていますか？』

「地球との近似値98%、かなり高い数値だな」

『了解。気象長より、念のため船外服は持参し、変調があれば着用すること、との指示です』

「そうか……了解。通信終了」

一ノ瀬の返答を待たずに話を終えた有賀は、機体を傾けてナビゲートの通り着陸地点へと向かう。

雲を抜け、森林の頭上をしばらく飛ぶとひらけた土地が見えた。

空中でホバリングしたシーガルはゆっくりとランディングギアをめり込ませた。

「どこを見ても草でしたね……」

「海がほとんど見えなかったけど、この植物ってどうやって養分を取ってるんだろう」

サンプル採取用のリュックを背負った美佳と、調査機材を背負った柑奈がキョロキョロと辺りを見回している。

義弥が武装を整えて機体を離れると、柑奈が落ちた葉を回収して機材に通しているところだった。

「何してるんですか？」

「遺伝子調査だよ。地球にいる植物と比較して一番近いものを割り出すの」

興味ありげに覗き込む美佳に笑いかけ、柑奈は操作を続ける。

「熱帯雨林みたいな感じですよね……地面もなんかブヨブヨしてるし」

「うん……雲が厚いから、光合成をちゃんとしてるのは気になるけど」

小さく跳ねてみる美佳とは対照的に、静かに木肌を観察する柑奈。

しばらく待つと、機材が結果を表示した。

「一番近い組成は……マングローブ？」

「水の上に生えるアレですか？」

「そうみたいだけど、系統は全く別物みたい。何これ、海藻類からの派生……？」

画面を覗き見ても専門外である兄妹には一切理解できないが、どうやらこの植物は海

藻類が派生してマングローブのような見た目をしているらしいということは、彼女の眩きから断片的に分かる。

「ひとまず歩いて色々調べてみよう。マングローブだとしたら、この平らな地面には疑問が出る」

機材から武蔵へとデータを送った柑奈は、それを背中に背負い直すと義弥に続いた。

背後に駐機したシーガルの周囲には、心なしか水が増えていようような気がした――。

それからおよそ1時間ほど歩きながら10分ごとに武蔵との定期通信を行い、惑星の状況を伝えていった。

6回目の定期通信を終えた彼らは、あるモノを発見して足を止めた。

「……………これって……………」

地面から水が滲み出る。

とどこどころ不安定な部分のあったこの星であれば不思議ではないのだが、問題なのはその形状と、それが交互に連続している事である。

「なんか、恐竜の足跡みたい……………」

「歩行パターンも地球の二足歩行の大型生物と似てる」

2人の言葉に、義弥はそれまで背中のアタッチメントにつけていた大型銃を構えた。

「お兄?」

「ここからは離れた方がいいかもしれない」

彼が睨む方向から、微かに木の根が軋む音が聞こえる。

耳をすますと、風の音と共に確かな――。

「走れ！」

義弥の一言で走り出すと、木の幹を身体で碎いて大型の生物が咆哮した。

その体軀は、数億年地球を闊歩していた恐竜と酷似しているものの、ところどころ魚と同じ組成を持ち尾と足にはヒレを持つ。首にはサメのようなエラがあり、その生物が複数の呼吸系統を持つ事を示していた。

「トカゲなのか魚なのかハッキリしてよ！」

走りながらそんな事を嘆く美佳の後ろで、義弥は振り返りながら銃で牽制する。

「これでハッキリした、この星には生態系がある！」

「柑奈さん、今はそんなこと言ってる場合じゃ――」

「義弥さん、そいつは草食と肉食どっちだと思えますか!?!?」

「は? ああ、肉食だろうな。地球にいたティラノサウルスあたりに良く似てるよ」

「なら、草食生物のテリトリーがあるはずですよ！」

「でもどこにあるのかは分からないじゃないで――きやあつ!?!?」

「美佳!?!?」

不安定な地面に足を取られて転ぶ美佳をかばうために足を止めると、木々をなぎ倒してもう一頭的大型生物が現れた。

「義弥さん、これ……」

「くっ、挟まれたか！ もう一頭はどっちか分かるか？」

「こつちも肉食……しかも私たちを追つてたのと同じみたいです」

「一杯食わされたか……狩りの仕方地球の生物と同じなんてな」

両脇に目を配るが、機材とサンプルを持った2人が走るには地面が悪い。

逃がすためには、この獣道一本を走らせるしかない。

「——ごめんなさいっ！」

座り込み、身体を小刻みに震わせながら美佳が声を出す。

「私のせいで……こんな……」

「いや、あのまま走つてたら前から来たもう一頭に潰されてたところだ。おかげで助かったな」

「でも——」

「柑奈。美佳を頼む。2人とも目を閉じる！」

背中から手のひら大の玉を持った義弥は、上へと放り投げた。

それは炸裂するや否や眩い閃光を放ち、大型生物の視界を奪う。

突然のことに混乱する二頭の足元を、柑奈は美佳の手を引いて走り抜ける。

義弥は2人が走った方向にいる生物に肉薄すると、顎の下からエネルギー銃を構えて放ち、頭上からその脳漿をぶちまけた。

生物が倒れ込んだ地面から大量の水しぶきが立つ。

——ここまで地面が弱いなら、シーガルは今頃……。

刹那、もう一頭が突如咆哮と共に復帰し突進を始めた。

「ふう……よし、来い」

呼吸を整えた有賀は、銃を構え直して足を踏み出す。

「私のせいです……」

「……」

力なく座りこむ美佳に、かける言葉は持ち合わせていない。

義弥の閃光弾のおかげで逃げさせた2人は、倒れた木の幹が折り重なり洞窟のようになつた穴の中に身を潜めていた。

「美佳ちゃんは悪くないよ。義弥さんの言う通り、あのままだったら私達もう」

「だけど……お兄と柑奈さんを危険な目に合わせたのは私です」

視線を落とす彼女の肩に手を置こうとするが、やはり言葉は出てこなかった。

『——柑奈!?!?』

「水月?」

インカムから聞こえた声に驚きつつ答えると、彼女は安堵の声をもらす。

『よかった、やつと繋がった……』

「なんで水月からの秘匿回線なの?」

『だって位置情報を見たら戦術長から2人だけ離れてるし、美佳ちゃんも戦術長も繋がらないんだから柑奈に繋げるしかないでしょ!』

「……怒ってる?」

『そ、そんな事はないけど……それより、そっちはどうなってるのさ』

「要約して報告するね。この星の原生生物の襲撃を受けて、義弥さんは囷に、私達2人は逃げて隠れてるところ」

『はあ!?? 原生生物って……』

「恐竜と魚を足して割ったみたいなやつ。体高は15メートルくらい。一体倒したのは確認したけど、もう一体は分からない。もしかしたらもっといっぱいいるかも……」

その報告に艦橋がざわついているのが聞こえる。

無理もない。そこまで巨大な生物が存在しているなど誰が予想できるものか。

「すみません、私のせいです。だから……」

美佳は言いながら腰の銃を引き抜き、安全装置を外した。

「美佳ちゃん……?」

「私が行かないと……自分の責任は、自分で取ります」

「待って!」

立ち上がったって走り出そうとする彼女の腕を掴むと、その手を引いて身体を引き戻そうとする。

「離してください!」

「今のままじゃ行かせられないよ!」

抵抗する彼女の手を引くと、柑奈はそのまま美佳の肩を掴んだ。

「落ち着いて美佳ちゃん。気持ちはわかるけど、今は無理せずに行かなくてもいいよ。考えなきゃ」

「柑奈さん……」

見つめ返す美佳に笑顔を向けると、彼女の身体を抱きしめる。

「えっ——」

「美佳ちゃんは私にとっても、かわいい妹みたいなものなんだから……信じて、お兄さんを。私達の艦の戦術長を」

「——。……はい」

惑星上空

眼下に森林を見ながら、武蔵は惑星内部へと侵入した。

制動をかけると同時に艦底のハッチを開けると、コスモファルコンとコスモタイガー1をそれぞれ放ち武蔵は経過を見守る。

「慣れた機体はいい……待ってろよ、戦術長」

ファルコンを駆る宗方は、僚機に離脱指示を出して機体限界まで加速をかけた。

「今は航空隊に任せるしかない」

艦橋の窓からは、重く垂れ込めた雲と一面を覆う緑の葉が見える。

艦長席の近藤がどんな表情をしているのかは、帽子で隠れて見ることはできない。

だが、窓の外を見つめる水月達とその気持ちが違うことはないだろう。

森林地帯

エネルギーはもう残っていない。

実弾も残りは少なく、腰の銃だけが残された唯一の武器だ。

一体、どのくらいの数を屠ったのだろう。

彼の周りの屍を数えることはせず、彼は一際大きなヒレを持つ個体と相対していた。

「ボスはお前か？」

その問いへの答えなのか、ヤツはただ高らかに咆哮した。

——ああ、そうか。

彼は今初めて理解した。

自然に住まう者たちのしきたり、絶対のルール。

即ち——

「そりやそうだ、強いヤツが唯一の王だろうよ」

既に足場は巨体によつて踏み固められ、今は浅瀬に立っているようである。

柔らかな地面に踏ん張つて戦うよりは、よほどいい環境だろう。

獲物を狩る捕食者の瞳が彼を捉えると、王はただちつぽけな人間へとその足を踏み出した。

残り少ない実弾銃を脚へと放つが、王は血を撒き散らしながらその足を止めようとはしない。

「ちつ、しづといな……」

弾の尽きた銃を投げ捨てると、腰から抜いた銃の安全装置を外しつつ、左手にナイフを構え、そして——。

「当たれ！」

ナイフ投げの要領で敵へと投げつけた。

それは敵の左目に突き刺さり、敵はよろめいて倒れ込んだ。

「……運が悪かったな」

倒れた王へと近づいた有賀は、呼吸のたびに膨らみ縮む部位に狙いを定めた。

「じゃあ、安らかに」

こめかみを貫いた銃弾は、敵の脳をも破壊して永遠の眠りをもたらしした。

銃を下ろし安堵の息をもらす有賀。

しかし――

「お兄、伏せて！」

響き渡る銃声。

視界に入ったのは、血を吹き出して倒れこむ中型の爬虫類。

「大丈夫!?」

「その声……」

駆け寄る美佳の姿を見て立ち上がる。

「よかった……」

肩で息をする彼女の頭を撫で、久々に優しい笑顔を見せた。

「美佳、なんで戻ってきたんだ？」

「そりゃ……お兄が心配だからに決まってるじゃん！」

「俺はお前の方が……」

「うっさい！ 妹に助けられるのがイヤなら無理すんなバカ！」

目尻に涙を浮かべて言い放った彼女は袖でそれを拭くと、義弥の胸に優しく拳を当てた。

「次は本気、だから……」

「……ああ。わかった」

柔らかな髪を撫でる。

「こういう事をしたのはいつぶりだろうか。最初に武蔵に乗った時だったかもしれない。帰ってきた時だったかも。」

「やつと……私と口きいてくれたね」

「えっ？」

「乗る日の朝から、ずっと話してくれてなかったじゃん」

「そう、だったか」

「ちよつと寂しかった」

「……ごめん」

「そういえば、無意識に避けていたのかもしれない。」

守ることに自信が持てなくなるから？

他のクルーに気を使わせたくないから？

——いや、違うな。

様々な危険が伴うこの旅に、彼女がいる事を認めたくなかったから。

「ごめんな、美佳」

「ううん……大丈夫」

笑いかけてくるその顔に安堵する。

——と。

「そういえば美佳、柑奈はどうした？」

「柑奈さんなら私と一緒に……」

振り返る美佳だったが、そこに来ているはずの柑奈の姿はなかった。

「……あれっ？」

「おい、お前な……」

「し、仕方ないじゃん……お兄助けるんだーって頭いっぱいだったんだから……」

「一緒にいるヤツのことは考えて動けよ」

「いや、それお兄が言えたことじゃないでしょう!?」

「俺はちゃんと考えた上で動いてるから。お前と一緒にすんな」

「あーあー聞こえないーい！」

「あのなあ——」

瞬間、彼らがいるところに突風が吹いた。

振り返ると、エンジン音と共に降下してくる一機の戦闘機がいた。

それは地面ギリギリでホバリングすると、キャノピーを開けて後部座席にいた一人を下ろした。

「仲直りしたと思つたらすぐケンカするんだから……」

再び上空へ飛び去るコスモファルコンを見送り、彼女は呆れたような、安心したような表情を浮かべていた。

「柑奈さん、なんでファルコンから？」

「美佳ちゃんに追いつけなくて困つたら、航空隊長が来てくれてね。荷物とか全部任せちゃった。そ、れ、よ、り、も」

笑顔を浮かべて歩み寄ると、柑奈は2人の肩を叩いた。

「任務中にケンカするってどういう事かなあ？」

「はいっ、すみませんでした！」

「……兄妹って本当に声合うんだね……」

驚きの声を上げる柑奈の背後には、02とナンバリングされたシーガルが降下してき

ていた。

「お迎えみたいだね」

「お迎え？ 着陸地点に戻れば俺たちが乗ってきたシーガルが——」

「まあまあ、ひとまず乗って乗って」

柑奈に背中を押されながら、ホバリングしたままのシーガルに乗り込む。

三人が乗ったのを確認したパイロットはシーガルの扉をロックして高度を上げ始める。

「着陸地点の様子を知りたいでしょ？」

彼女の言葉に2人が頷くと、柑奈は窓の外を指差した。

「あそこが、私達が降りた場所」

「あそこって、池みたいになってますけど……？」

「よく見て。シーガルの尾翼がまだ見えるはずだから」

「……あつ、ホントだ」

それはゆっくり、ただ確かに沈んでいた。

シーガルの尾翼はまだかろうじて浮いていたが、アレが沈むのも時間の問題である。

更に観察すると水面にはシーガルの残骸が浮かび、周囲には無数の足跡が残されてい

た。

「シーガルは、俺たちを襲った生物に襲われたのか」

「私達はあの生物の生息地域に降りてしまった。あれは、自分たちを守ろうとして私達を襲ってきたと思う」

恐らく無意識に返した柑奈は、次いで義弥たちに端末の画面を見せた。

「しばらく歩いて手に入れたデータだけど、この星には大地がないという事が分かった」

「でも柑奈さん、私たちが確かに草の上を歩いてましたよ？」

「そう。私達は草の上を歩いていただけで、大地を歩いてはいなかった」

首をかしげる美佳。

そんな彼女に、柑奈はこの星の構造を一から話し始めた。

「この星の大地は海の中にあつて、海上には出ていない。海底で生まれ死んだ海藻たちが折り重なつていくことで、不安定ながら大地としての役割を果たしている。生き物の死骸には栄養分がたくさんあつて、それをより効率よく手に入れるために、海藻はより太い根を伸ばし始めた」

「それがマングローブに似ていた理由か」

「その通りです、義弥さん。その海藻の地面とマングローブの根には、藻から派生した植

物が生え始めた。これが、私達が歩いていた大地」

「なんか妙にぶよぶよしてたり、硬さが違ったり、機体や死骸が沈んでいったのもそのせいなんですか？」

「そういうこと。星の表面で海の面積が大きいこの星は、魚たちの楽園だった。あの恐竜たちは魚の形質を持っていたから、多分狩りは海の中が主。けれど、そこから逃れるために少ないけれど草食生物がいる形跡もあったから」

「地上でも狩りができるように、恐竜みたいな体つきに……」

そんなことを話すうちに、シーガルは武蔵の第三格納庫へと帰還した。

きつとこの星は、この後も生命が生まれては途絶え、進化を続けていくのだろう。

そんな、遙かな未来に想いを馳せる。

「何してるの？」

立ち止まっていた義弥に美佳が駆け寄る。

「ああいや、なんでもない。それより……」

「ん？」

小首を傾げる彼女の髪を撫でると、彼はいつぶりの言葉を投稿かける。

「……ありがとう。ごめん」

その言葉に目を見開いた美佳は、すぐに笑顔を見せて義弥の身体を抱きしめた。

「本当だよ……お兄のばか……」

その声色から、彼女の表情は計り知れた。

きつと目尻に涙を浮かべながら、不器用に笑ってみせようとしているのだろう。

笑顔がうまくいかないから、彼女はこうして顔を見せまいとしているのだ。

その様子を陰から見守っていた柑奈は、安堵の笑みを浮かべて静かに立ち去った。

緑の星を後にする武蔵は、本来の進路に戻るため舵を切る。

推定座標への旅路を急ぐ武蔵は自然豊かなこの惑星に別れを告げて、宇宙の中へと消

えていった――。

――第5話 「緑の星」――

第6話 「なんでもないこの日々を」

惑星ビースリーを出て3日。

1日2回目、12時間ごとのワープこなし宇宙を征く武蔵は、6回目のワープを開けた。

「ワープ終了。リーダー異常なし」

「艦内点検、異常なし」

報告を終えた美佳と柑奈は、ほぼ同時に息を吐いて肩の力を抜いた。

「なんか、似てきたな……」

背中越しに2人の声が聞こえた義弥は、つぶやきながら立ち上がる。

「来島、あとは頼む」

「分かりました、戦術長」

パネルに映された時間を確認した義弥は彼女に席を譲ると、艦橋を後にした。

「あの2人が似ることが不服なんですかね、戦術長は」

そんなことを言いながら、テンキーに乗員コードを打ち込む。

武蔵では平時、交代時間が来ると交代するクルーの名前と共に時間表示が赤色に変わ

るようになっていた。

交代したクルーは、予め割り当てられている乗員コードを打ち込むことで交代した事が確認されるシステムであった。

「さあな。もしかしたら嬉しいのかもしれないぞ」

「えっ？ ……いえ、それは無いです。見ましたか、あの顔」

「ははっ、よく見てるなあ」

ここまで来てようやく泰平に茶化されていることに気づいた来島は、むすつとした顔をしながら彼に背中を向けた。

その後ろでは、解析手とレーダー手が交代の時間を迎えていた。

「交代だよ、柑奈」

「次、水月だったんだ」

「うん……さては、また時間見てなかったな？」

「あはは……うん、実はね」

「まったく……」

ため息と共に柑奈と席を代わる水月。

立ち上がった柑奈が振り返ると、ちょうど丹生と美佳が交代したところであった。

彼女と目が合った柑奈は、一緒にエレベーターに乗り込んで扉を閉めた。

「……なんかあの二人、あの星での一件から更に仲良くなりましたよね」

「うん。有賀くんとも話し始めたみたいだし、いい傾向だと思うよ」

水月に笑いかける丹生。

そんな彼女に、水月は思い出したように問いかけた。

「そういえば、あの子のことなんて呼んでますか？」

「えっ、なんで？」

「いやだって、同じ名前ですし」

『……あー』

それまで忘れていたというように、その時艦橋にいた面子が声を揃えた。

何がそんなに疑問なのかと問うように、丹生は首を傾げながらその答えを口にした。

「普通に、美佳ちゃん、だけど？」

一方、2人並んで通路を歩く柑奈と美佳はというと。

「お兄はさつきと出て行つちやうんだから……」

「まあ仕方ないよ。美佳ちゃんはこれからどうするの？」

「うーん……お腹すいたなあって思いますけど……」

自分のお腹をさすりながら言った直後、彼女は動きを止めた。

「……あつ、やつぱ……」

「ん？」

「艦内シフト終わったなら、ルームメイトとご飯食べる約束してたんだ……それじゃあ柑奈さん、今はこれで！」

早口で理由を説明した美佳は、廊下を駆けて行った。

「転ばないように気をつけてねー？」

一応そんな注意を試してみたが、果たして彼女には聞こえているのだろうか。

「さて……私はどうしようっかな……」

一度立ち止まった柑奈は、それでもやはり当初の目的を果たすことにしたのであった。

電気もついたままの部屋で、艦内服でベッドに横たわる彼の耳に届いたのは、2度目に押されたブザーの音だった。

「なんだ……？」

眠気まなこで立ち上がり存在を明かすと、向こう側にいる人物が『あつ』と少し驚いた声を出した。

『柑奈です。入ってもいいですか？』

「ああ、構わないよ」

扉を開けると、彼を見上げた柑奈がくすつと笑った。

「寝てましたね、義弥さん」

「どうしてわかった？」

「ふふつ、それはですね」

少しはにかみ、部屋に入った彼女は義弥の髪を撫でる。

「寝癖が立っているからですよ？」

「そんなにだったか……」

「そんなにでした」

優しい笑顔で髪型を直す。

寝ぼけていた義弥の意識は次第に戻り、恥ずかしさが増していたが、柑奈の幸せそうな顔を見ると止める気にもならなかった。

「はい、終わりました」

「あつ、ああ、ありがとう」

「いえいえ」

得意げに胸を張る柑奈は直後、「あつ、そうだ」と、さも今思いついたように指を立てる。

「義弥さん、もうごはん食べましたか？」

「いや、すぐ戻ってきたからまだだけど」

「良かった……じゃあ、一緒に食べに行きませんか？」

「……ああ、そうしようか」

彼の答えに、少し不安そうな眼差しが変わっていく。

「そうと決まれば早く行くか」

そう言いながら、義弥は柑奈の手を引いて歩き出した。

「次のワープで、ガミラスのデータベースにある領域を抜けるわけですな」

モニターに映る色とりどりの宇宙を眺め、谷村はグラスに入れた酒をかぎした。

「ここから先は未知の航海だ。既に次のワープアウト座標に近い恒星系には、波動エンジンにダメージを与えかねない強い太陽フレアが観測されている」

「大丈夫ですよ。うちのクルーは優秀ですから」

それは副長として、彼らを側で見ていたが故の自信なのか。

そんな彼の言葉に口角をあげた近藤は、彼が掲げたグラスに自らのグラスを軽く当てた。

「前回の旅を踏まえて、クルーたちはより成長しました。若いヤツらを信じた方がいい

結果になる事もあるってもんですよ。若いのが躓いた時に支えてやるのが老いぼれの役目」

「老いぼれとはやめてもらいたいな。君はまだまだ現役だ。せめて年長者くらいだろう」

2人で目を見合わせ、そして同時に笑い合う。

武蔵のクルーは皆若く、彼らとは親子ほどの年の差がある。

酒を酌み交わすような者はあまりいないのが現実だ。

「……艦長は、戦術長の事をどうお考えで」

「有賀か」

お互いにグラスを置くと、近藤はモニターに映し出される宇宙空間を眺めながらゆっくりと口を開く――。

その日の食堂はがらんとして、いつもの喧騒はなりを潜めていた。

「今日は静かですね」

「珍しいな」

ぼつりぼつりとまばらな人影を横目に料理を乗せると、2人は同時に席に着いた。

「義弥さん、いつもは1人で食べてるんですか？」

「え？ ああ、そうだな……いつもは1人だけど」

「そうですか……」

そこから会話が続く事もなく、柑奈は頼杖について彼を見つめた。

「……何かおかしいか？」

「いえ、そういう訳じゃないんですけど」

「……そういうえば、一つ聞こうと思ってたことがあるんだけど」

「はい」

彼は皿にスプーンを置くと、少し身を乗り出した。

「ビースリーでこっちに美佳をよこしたのはなぜだ？」

「……それですか。私が行かせた訳じゃありません。ちゃんと止めましたよ、私は」

「じゃあなんで——」

「どうしてもお兄を助けたいって、艦長に直談判したんです。そしたら航空隊長が、『何かあったら俺たちがどうにかしてやる』って後押しを……」

「……そういう事だったのか」

「もつとも、義弥さんが一人で囿になった時には艦橋ではなんとしても義弥さんを助け出す以外の選択肢はなかったみたいですよ」

その言葉に、これまでになく大きなため息をついて返す。

「美佳ちゃんが義弥さんを助けに走ったのは、厳密に言えば独断専行です。けれど、みんなその気持ちは分かりますから……艦長も副長も美佳ちゃんを罰することはしなかつたんですよ」

「……そうか……」

「……聞いてますか？」

「ああ、大丈夫だ。つまりあれは、美佳の独断じゃなくて艦の総意だった、そう言いたいんだろ」

「そういう事です。なので、以後あんなことはしないでください」

彼を指差しながら、柑奈は鋭い視線を向けた。

鋭い、だがしかし睨むような目ではなく、どこか暖かさを持った眼差しである。

「ホイホイあんな事されたら美佳ちゃんの心臓がもちませんよ！ ……私のもですけど……」

「ん、何か言ったか？」

「い、いえ、何も……とにかく、美佳ちゃんや艦のみんなにこれ以上心配かけないようにしてくださいね」

「肝に命じておくとよ」

柑奈の言葉を聞き流すように返すと、向かいに座る彼女の視線が突き刺さった。

徐々にその表情に怒りが露わになっていく事に気づいた時には、その場で立ち上がった彼女の説教を受けていたのであった。

「耳にタコつて本当にできるのか……？」

そんなことをつぶやきながら、1人廊下を歩く。

柑奈の説教はその後20分に及び、やつとの事でなんとか許しを得た。

なぜあそこまで怒られなければならないのかはイマイチ理解していなかったが、彼女の威勢に完全に圧されてしまっていた。

「俺の任務は護衛だったんだから、あれが最適解のはずだろ……」

わずかな理不尽を感じながら歩いていったせい、前から走ってきた2人に気づく事なく肩が触れる

「ああ、すまない」

「すみませんでし……た……あれっ、お兄？」

聞き慣れた声に視線を上げると、敬礼をする医務科の少女と並ぶ妹の姿が見えた。

ひとまず少女に敬礼を返し、美佳に向き直る。

「なにしてんの、こんな所で」

「それはこっちのセリフだぞ美佳」

その問いに答えようとした美佳の肩を少女が叩く。

「なに？」

「なにじゃなくて、戦術長にタメ口はないでしょう……」

「大丈夫大丈夫、だってお兄だし？」

「理由になつてないけど……」

的を得ない受け答えに辟易する少女に「気にしなくていい」と声をかけた。

「艦長も、妹が俺にこの口調なのは了承済みだ」

「はあ……妹……あれ、お2人家族だったんですね？」

大げさに驚く彼女の姿に顔を見合わせた2人は、同時に「あー」と声を出した。

これまで彼らは、彼らの近くにいた柑奈や2人が家族である事を知っている士官がいる空間にいた。

つまるところ、今ここにいる看護師見習いである彼女は、彼らが家族である事など知るよしもないのだ。

「あはは、ごめんごめん、びつくりさせちゃった」

彼女の反応に合点がいった美佳は彼女の肩を叩くと、兄の方へと向き直った。

「紹介してなかったけど、こちら私のルームメイトの神橋奈波」

「ああ。妹が世話になっている。美佳はあまり彼女に負担をかけないようにな」

2人に笑顔を向けた有賀は、そのまま自室へと歩き出した。

「負担なんかかけてないってば！」

歩き去る彼の背に指をさして反論するが、そのまま無視されてしまった。

「なんなの、あの言い草。ほんつとム力つく……」

「ま、まあまあ……」

美佳をなだめながら自室へと歩く奈波が其の後、寝るまで愚痴を聞かされたのは言うまでもない。

今日もいつも通りの平穏な時が流れていく。

ひとときの安らぎ、一瞬でも任務を忘れられるこの時間は、誰にとっても大切なものであろう——。

——第6話「なんでもないこの日々を」——

第三章 嚮導編

第7話 「原初への門」

いくつもの図形が合わさり、内包されたような形の門。

その形状はまさしく――

「間違いないわ。バラン星にあるワープゲートと同型のものよ」

艦橋窓からそれを見たカレンが断言する。

「制御衛星は見つけられたか」

「はい。今から起動のための出力信号を発信します」

丹生の返答からしばらくすると、信号を受信したゲートが仄かに青く輝き始めた。

「ゲートの起動を確認しました」

それをモニタリングしていた柑奈が言うと、席に座るカレンが口を開く。

「アレがアケーリアス文明のものなのは間違いない。けれど、どうしてこんなところに

……」

彼女はそんなことをつぶやきながら立ち上がり、艦橋を歩き始めた。

「カレンさん？」

不思議そうに彼女を目で追う柑奈の呼びかけには答えずに艦長の前まで来たカレンは、艦長を真つ直ぐ見つめた。

「調査するべきです」

「……調査……ですか」

思わず聞き返す近藤に頷くと、彼女は窓の外に見えるゲートを指差した。

「だってあなたも、コレがどこに向かっているのか気になるでしょう？」

艦長の返答を待たずに振り返ったカレンは、有賀の横まで歩きながら更に言葉が続ける。

「アレがなんでここにあるのか、果たしてどこに向かっているのか……気になるでしょう!?!?」

「それでもすぐに、とは行きませんよ」

彼女の言葉を遮ったのは有賀であった。

「この艦にはあなたや俺たちだけじゃなく、400人以上のクルーがいる。艦長以外の誰かの一存で行動は決められない」

「むう……確かにその通りね。少し興奮しすぎたわ」

有賀の言葉に威勢を失ったカレンはおとなしく席に座ると、「でも」と落ち着いた口調で続ける。

「ここを通つてみるのは一つの案としてアリだと思つわ。あなたたちがどう考えるかは分からないけど」

「あなたの予測を聞きたい。これがどこに続いているのか」

艦長からの思わぬ問いかけに黙り込んだカレンだったが、すぐに考えを巡らせた。

「航海士ではないから細かな座標とかは分からないけれど、バラン星の構造からみて、どこかのハブステーションに繋がっているのは確かじゃないかしら」

彼女の言葉を聞いた艦長は、顎に手を当てて思考を巡らせた。

——今日の前にあるのは既知の装置であるが、ここは未知の領域。万全を期すならばヤマトに倣い偵察機を出すべきではある。

しかし、ただでさえ少ない搭載機とパイロットを失うリスクが無いわけではない。

——艦を危険に晒すよりは、もしものことを考えても偵察機を出す方が安全策なのは確かだ。

顔を上げた近藤は、自らを見つめる青年を見ながら口を開いた。

「有賀、頼みがある」

武蔵／第1格納庫

「んじゃ、ちよつくら行つてきますわ」

ランディングギアが折れたたまたまれたファルコンの下に輸送用ジャッキが滑り込む。

後方に引き込まれた機体は、宇宙へとその口を開く射出口にセットされた。

『コスモファルコン1番機、発艦許可』

「了解、発艦する」

無重力へと放り出された機体を制御し、艦体を舐めるように上昇すると、コクピットに通信が入った。

『こちら、戦術長の有賀だ』

「よう戦術長。なんだ？」

『中はどうなっているかわからない。航空隊長がいなければ本艦には大きなダメージとなる。ミッションの遂行よりも、自分の帰還を最優先に行動してほしい』

「分かっているって。帰んのが俺の任務だからな」

通信を切ると、機体はエンジン出力を上げて水柱を上げた。

武蔵／中央作戦室

「――以上が、航空隊長からの報告です」

出撃後、30分と経たずに帰還したファルコンに記された情報と肉眼で観測された現象を告げると、水月がそれを簡潔にまとめた。

「つまり、ワープゲートとして運用できるし出現先も安全だけど、なぜか計器が使えるってことですか？」

「そういう事になる。隊長が帰還を急いだ理由はそれだ。あともう一つ」

有賀が手元のパネルを操作すると、ある恒星が映し出された。

「これは出現先にあつた恒星のデータだ。ファルコンに搭載した簡易観測機の解析だと、ゲート方面に断続的な太陽フレアが観測されている」

「って事は、しばらく使われてなかったゲートに加えてフレアがそこにぶつかってシステムがクラッシュしかかっているとかな？」

カレンの言葉に有賀は「そうとは断定できない」としながらも、考慮すべきという見解を示した。

「これは面白い事案だわ！ このワープゲートは、アケーリアス文明が初期に作ったものかもしれない……きっとバランスとは全く違う制御コマンドが働いているのよ」

一人興奮した様子でつぶやくカレン。

そんな彼女を尻目に、来島は冷静に切り返す。

「ここを通るのは危険かと。タイミングが悪ければ、ゲートを抜けた途端に太陽フレアに晒されてなんらかのダメージを受けるかもしれないですよ」

「波動エンジンが太陽フレアによって機能を停止した事例は今のところないからなあ」

「楽観は危険です機関長。何が起こるか分からない空間では」

「——それでも、行かなければ得られないものもある」

彼女の言葉を遮った近藤は視線をあげると、わずかに口角を上げた。

「本艦は予定通り、ワープゲートを通過する。通過中は第二種戦闘配備を維持し、ゲート内モニタリングを厳とせよ」

主幹エレベーター

「なんでいつもこうなるんですかね、私」

隅で頭を抱え、来島はつぶやく。

「私だって、好きであんなこと言ってる訳じゃないんです……」

「みんな分かってるよ」

顔をあげると、彼女に向き合った有賀が肩に手を置いていた。

「戦術長……」

「みんな分かっている。来島が言ったことも事実だし、その意見は貴重だ」

「自分に素直な人は……羨ましいです」

「君はいつも艦の安全を、旅の確実さを求めている。それが間違っているととは思わない。今は素直に生きられなくてもいい。君なりの生きかたをすればいい」

ブザーが第一艦橋への到着を知らせる。

扉が開くと同時に席へと走り去る有賀の背中を見ながら、来島は小さく息を吐いた。「私も、あなたみたいに生きてみたいです」

ゆつくりと席へ向かう彼女の顔は、いつもより少しだけ明るかった。

波動エンジンを灯した武蔵は、巨大な水柱を立てて異空間へと消えた。

嵐のように不安定な回廊を進む武蔵であったが、事前の報告であった通りそこはバラン星のものとは大きく違っていた。

「レーダーに感はありませんが、システムは正常に働いています」

「艦外のセンサーは通常空間を示しています……なんなの、これ」

丹生と柑奈の報告を聞いた直後、艦体が大きく揺れる。

「なんだ……突然、乱気流みたいに……っ！」

艦体の姿勢制御ノズルをこまめに噴射させて姿勢を保つが、窓から見える風景は平穏ではなかった。

青い空間は次第に様相を変え、雲と雷が増えていく。

刹那、艦橋にアラートが鳴り響いた。

「艦長！ ゲート出口に異常発生、このままでは消失します！」

泰平の報告に、近藤は眉をひそめる。

「出口が消失したら、本艦はこの空間に閉じ込められます……!」

情報をもとに柑奈が見解を述べると同時に、有賀が声を出した。

「泰平、出口に向かってワープするんだ!」

「この空間でワープなんてしたらどうなるか——」

「ワープじゃなきゃ、武蔵はあそこまでたどり着けない。しのごの言ってる場合か!」

ちらりと機関長を一瞥すると、彼は艦長に頷いて返した。

逡巡の後、近藤は航海長を呼んだ。

「戦術長に従え! エンジン内圧上げ、ワープアウト座標を!」

「は、はい! 座標固定……機関長!」

「エンジン、内圧上げ。ワープ速度へ上昇」

一瞬炎が止まると次の瞬間、武蔵は青く尾を引きながら加速を始めた。

「カウントスタート。ワープまで、5秒前!」

丹生の言葉が艦橋に響く。

武蔵は気流に煽られ大きく左右に揺れながらも一気に加速し、そして——。

——氷を纏い、水の中から艦が現れる。

しばらくただ宇宙を漂っていた艦は、補助エンジンを灯してようやく再起動した。

「つた……みんな、大丈夫か？」

有賀の言葉に続々と意識を取り戻すクルー達は、すぐにモニターを確認する。

「本艦は通常空間を航行しています」

「艦体各部、異常なし」

「……いや、波動エンジンが動いていない……現在本艦は補助エンジンで航行中です」

棚橋と柑奈の報告に続いた谷村は、艦長とアイコンタクトを取るとエレベーターに走った。

「現在位置は？」

「目標地点には到着しています。恒星のサイズから見て、ハビタブルゾーン内なのは間違いありません」

棚橋の返答と同時に、泰平の席に座標が送信された。

「棚橋さん、これは？」

「すぐ近くにある惑星の座標よ。エンジンの状態を見るために停泊しないとしないか
ら」

彼女の言葉は正しかった。

破損したエンジンの修復のためには、腰を据えた修理が必要となる可能性があるの

だ。

艦首を回し惑星に進路をとると、その星の様子が目に飛び込んできた。赤黒いその星の姿に息を呑む。

「なんだ、この星……」

「惑星の調査を開始します」

言葉が出ない有賀とは対照的に、柑奈は冷静にパネルを操作する。

「水月、惑星探査装置を起動させるよ」

『オツケー。始めよっか』

その言葉とともに、武蔵の艦首が徐々に光を帯びていく。

封印栓から漏れる緑の光が強くなると、ゆっくりと光が静まっていった。

「解析終了。これは岩石でできた星のようです。表層から一層下にコスモナイトの存在も探知できました」

『修理するには絶好のポイントだと思えます』

艦長を見る柑奈と通信ごしに水月が告げる。

補助エンジンで航行も可能とはいえ、やはりそれには限度がある。主機を修理しない限り、長期航行は危険であった。

「惑星に進路、降下し修理に入る」

「了解。進路そのまま、降下コースに乗せます」

泰平の復唱と共に微かに加速した武蔵は、惑星に向けて進む。

直後、一ノ瀬は眉をひそめた。

「艦長。惑星から、微弱な電波を感じました」

「救難信号か？」

「いえ、それとは異なる波形ですが……位置を示すビーコンのようです」

彼の声に耳を傾けていた有賀は、窓から見える巨大な星を睨む。

「一体、何が……」

彼らはまだ知らない。

この星が、大いなる旅路への本当の始まりになる事を。

ここからが、武蔵を待つ本当の試練なのである——。

—— 第7話 「原初への門」 ——

第8話 「輝く石に願いを込めて」

大マゼラン雲の入り口から、その中心部へと約2千光年。

ある古い恒星を主星とする星系があった。

「太陽フレアじゃない?」

その星系の3番惑星に漂着した武蔵の艦内では、波動エンジンが機能を停止した原因究明が進められていた。

第一艦橋で聞き返した有賀に頷いた棚橋は、パネルに映し出された恒星を指差して答えた。

「あの主星は古く、寿命が切れて白色矮星になるまであと少し。この時期になると、赤色矮星は外側のガスを放出しはじめるの。そしてこの星の表層ガスには、機関に悪影響を及ぼす可能性のあるプラズマが大量に含まれている……」

「それが断続的に放たれる事で、ワープゲートが……」

棚橋から言葉を継いだ柑奈に頷くと、彼女は続けた。

「このプラズマはしばらくすれば無害化するレベルに霧散する。けど今回は運悪くワープ明けでエンジンを全開稼働したまま突入した」

「なるほど。他の機材にほとんど影響がなかったのは、ワープのために最低限しか電力が回っていないからですか……」

うんうん、と納得した顔の柑奈を冷ややかな目で見ながら、有賀は「で」と話を戻した。

「それがなんで太陽フレアだと観測結果で出たんだ？」

「この星の現象は太陽フレアのそれとよく似ていた事、そして前回の放出から時間が経っていた事から観測装置が誤認したのでしょう」

「誤認ですか……」

大丈夫なのか、その装備。

そんなことを思っていると、「なんですかその顔は」と、水月が会話に入ってきた。

「あたしの作った観測装備に何かご不満でもあるんですか、戦術長？」

あくまで笑顔を浮かべて有賀を見下ろす彼女であったが、その目は笑ってなどいなかった。

「いや、別に」

「なら良いんですけど」

「それより水月、用件は何？」

彼女を覗き込んだ柑奈の問いにうなずくと、水月は本題を口にした。

「この星で観測されたビーコンの詳しい座標が分かったから、その報告にね。艦長は今いないみたいだけど……」

「確か、機関長とカレンさんと話してくるって、航海長と一緒に出て行ったよ」

「エンジンの復旧は分かるけど、カレンさんと航海長はなんで……」

「さあ？ もうすぐ戻ってくると思うけど」

そんな話をしていると艦橋の扉が開き、艦長らが入ってきた。

艦長はまとまって話をしている有賀達の所へと歩み寄ると、笑顔で有賀と柑奈の肩を叩いた。

「……艦長？」

「第三格納庫へ行つて欲しい。調査任務だ」

二酸化炭素が充満し、視界の悪い地上に一機の探査機が舞い降りた。

見上げれば母艦の衝突防止灯が雲の中で光つて見える。

「外気温は平均して摂氏40度前後、一時的に60度にまで上がっています」

環境をモニタリングする水月の言葉を聞きながら、探査機を陸上走行形態に変えて走り出した。

イズモ計画において使用される予定であったこの機体はヤマトにも搭載され、星巡る

方舟の探索に利用された。

「ビーコン発信位置まで後2キロ」

「近からず遠からずだな」

柑奈の報告にそう返した有賀は、少しだけ機体を加速させる。

「ビーコン自体が微弱で、観測点が正確に測れなかったのが難点だね」

「うん。でも誤差2キロなら上出来っていう感じじゃないかな。そうでしょ、柑奈」

水月と柑奈の会話を背中で聞きながら、カレンは有賀の肩を叩く。

「もう少し速く走れないのかしら」

「マグマに突っ込んでもいいのなら加速しますけど?」

「……ごめんなさい、そのままでもいいわ」

大気圏外でも活動が可能な機体とはいえ、この星の表層を流れるマグマに突入すれば無事では済まない。

有賀は機体を走らせながら、武蔵から随時送られてくるマップを頼りにマグマの流れる地点を避けるコースを取るように調整していたのである。

ゆつくりと走行を続けておよそ1時間で、ビーコンの発信点と思われるポイントへと到達した。

近くに止めた探査機から船外服で出た彼らは、ある場所の前で立ち止まる。

「……神殿、なのか」

崩れかかっているものの、それが一目で神殿の役割を持つものと分かった。

不可思議な紋様を纏う建物の正面へと歩いていくと、巨大な扉が彼らを待ち構える。

「間違いないわ、これはアケールリアスの様式をとっている……」

神殿の扉を撫でたカレンは、その途中で眉をひそめて手を止めた。

「これは……文字……？」

今度は撫でるのではなく、なぞるように。

目を閉じて、指に感じる僅かなくほみを感じながら、彼女はその意味をつぶやく。

「……この門の……開く、時……希望……ならば、力、示す……」

目を開けた彼女は次いで、扉の表面を注意深く観察し始めた。

そして、彼女は突如振り返って真上を指差しながら有賀へと声を上げた。

「これを撃って！」

「何を？？」

「この彫刻の頭！」

彼女が指していたのは、その爪で扉を止めている龍であった。

その額には真紅に輝く寶石を湛え、鋭い眼光でこちらを睨みつけている。

有賀は戸惑いながらも腰から銃を抜き、額の宝石へとその照準を定めた。

耳をつんざく銃声と共に放たれた弾は、重く漂う煙を切り裂いて宝石の中心を貫いた。

刹那、龍の目が光り輝くと彫刻は音を立てて崩れてく。

けたたましい音と共にただの石クズと化した龍を足元に見ていたカレンは、微かに感じた振動に気づいて有賀の元に走り出した。

「カレンさん？」

「この振動、感じるでしょう？」

彼女の言葉に、彼らも始めてそれを感じ取った。

「何これ、地震？」

次第に大きくなる揺れは、探査機を通じて武蔵でも観測されていた。

『柑奈さん、今そちらで何が起こっているのか分かりますか？』

通信機から聞こえてきたのは美佳の声。

「美佳ちゃん？」

『はい、臨時の作戦オペレーターとして……じゃなくて！ 今柑奈さん達がいる地点で

局所的な揺れが起こっていますが、何か——』

刹那、通信機の音すらもかき消すほどの音と共に扉が開きはじめていった。

武蔵／第一艦橋

「きやあつ!?？」

咄嗟にヘッドセットを外して耳から遠ざける。

「美佳ちゃん、大丈夫?」

今は技術科の席でモニタリングを兼ねている美佳に駆け寄る丹生は、そこから漏れ出す音に気づいた。

「うう……」

「ちよつと貸してね」

涙目で呻き声をあげる彼女からヘッドセットを受け取ると、その波長をモニターへと映す。

「第一艦橋から第二艦橋解析室へ。この波長から建物の内部構造をできるだけ特定してください。できたら艦橋と調査隊へ転送を」

指示の最中で漏れ出す音が小さくなっていく事に気づくと、丹生は片耳に当ててそれを確認して美佳へと戻す。

「ううう……すみません……」

「いいのいいの、こんなの初めてだし」

ウインクで返す彼女に頭を下げると、美佳は再びヘッドセットをつけた。

「皆さん無事ですか？」

『こちらは全員無事。大丈夫だよ、美佳ちゃん』

「よかった……今そちらはどうなっていますか？」

地上／調査隊

美佳からの問いに答えるべく神殿を観察するが、大きな揺れの割には扉が開いている以外の変化は無かった。

『扉が開いてるだけ、ですか？』

「そう。後は変化なし。こちらからは観測できない場所での異変とかは？」

『……いえ、今のところありません』

その返答に首をかしげると、柑奈が手に持つ端末に図面が映し出された。

『あつ、柑奈さん。たった今本艦から図面が届いたと思います』

「確認したよ。これは？」

『神殿内部の構造解析図です。さっきの揺れの音の反響率などから割り出されたもので、船務長と解析室の方々のおかげです』

「そつか。じゃあこれを元に入っていけばいいんだね」

『はい、そういう事です』

彼女を見る3人を見回すと、4人はほとんど同時に歩き出した。

門をくぐると長い階段があり、漆黒と共に遙か下へと続いている。

一方踏み出すと共に灯る明かりは、まるで彼らを最奥へと導いているようだった。

「あの揺れがあつたにしては、中が崩落しているとかいう様子はないな」

先陣を切つて歩く有賀が呟くと、カレンが彼の背中を見ながら口を開く。

「この門が開くことを望むのならば、力を寄せ」

「なんですか、それ？」

「あの門に書いてあつたのよ。意識ではあるけど。そして力を寄せというのに、事前に何も出てこなかった」

「だから撃たせたんですか、龍の頭を」

「アレは勘よ、柑奈。それに、彼があそこを撃ち抜かなければ多分門は開いていない」

カレンの視線は暖かく、有賀を見守っているようだった。

「彼はきつと運がいい。柑奈、あなたも」

「えっ？」

柑奈の肩に手を回してぐいつと引つ張ると、ヘルメット越しに彼女にだけ聞こえるトーンでカレンは呟く。

「はやく彼に伝えておかないと、誰かに取られるかもしれないわよ？」

「はいいつ？？」

柑奈の頓狂な声が響いた直後、闇の中から微かな光が見えた。

「階段はここで終わりみたいですね」

全員が階段から降り立つと、突然背後の灯りが消えて辺りはぼんやりとした明かりに包まれた。

見上げると地底深くから地上へと小さな穴が突き抜け、そこから恒星の光がこの空間を照らしているのが分かった。

そして中心で照らされていたのは、紅い宝石のような結晶体。

「あの結晶からビーコンが放たれています」

端末を確認しながら報告した水月は足早に結晶の元へと歩を進める。

細い3本の腕に立てられているその結晶の下には石板があり、古代アケリアスの文字が書かれていた。

「これは……『導きの石』……？」

カレンが読み上げると、有賀は石を見つめながら首をかしげる。

「こんなもんがどこに導くってんだ？」

紅い石に手を伸ばした刹那、それは強い光を放った。

その光はやがて一つに収束すると、まっすぐにある一点を指し示す。

「この光は……」

「私たちを導く光……」

光の先を見上げる有賀と柑奈を尻目にその方角を算出した水月は眉をひそめた。

「こちら上陸班から武蔵へ。この方角に直線で進んだ先に何かあるのか調べてくれますか?」

『分かりました。少し待つてください水月さん』

美佳の返答を聞いた水月は次に柑奈の肩を叩く。

「柑奈、これ持つて行くべきかな」

「うん……でも持つて行くなら多分この土台ごとじゃないと」

「やっぱそうだよね……」

彼女達が見つめるその遺跡は、重量にして数十キロはくだらないものだった。

これを艦内に持ち込むのは至難の技。

——が。

「多分、石板と石だけ持つていけばいいだけだと思うわ」

カレンはそう言いながら石を持ち上げると、「ねっ?」と笑いかけた。

「これ、元々外部の人間に持つて行かせるためのものだからデバイスを小さくしてあるの」

「それは石板から？」

「ええ。でもまだ全文は分からないの。これに従えば何かしら手がかりが掴めると思うのだけど……」

直後、彼らのヘルメットに美佳の声が響いた。

『さつき水月さんに頼まれた結果が出ました。直線上は大マゼラン雲外縁です』

「分かった。こちらで戦術長、これより武蔵へと帰還します」

『了解しました。気をつけてね、お兄』

彼女の言葉で通信を切ると、有賀は石板を外して振り返る。

「これも必要なんだよな」

「ええ。それじゃ戻りましょうか」

石板を外すと同時に点灯していた灯りを頼りに彼らは歩き出した。

武蔵／観測ドーム

半球状のドームの中央に急遽作られたケースに入れられた紅い宝石の輝きに照らされながら、有賀達は詳細を艦長へと報告していた。

「なるほどな。つまり、この光を追えば手がかりが見つかる可能性が高いと」

「はい。転針して、この光に従っていくべきかと」

有賀の言葉に頷いた近藤は、振り返り石板に向かう水月を見ると「君の見解は？」と問う。

「石板の解説には時間を要しますから、ひとまずは光を追って行くのが適切かと思いません」

「分かった。全艦に通達。転針し、この光の方角へと進む」

指示を出したのち、艦長は壁際にある通信機を起動した。

「機関長、エンジンはどうだ」

『プラズマで一時的に機能不全を起こしていただけで、今はいつでも回せますよ』

「ありがとう。では発進用意を頼む」

通信機を切った艦長は有賀と共に主幹エレベーターに乗り込んだ。

紅き石が入れられたケースから光が漏れる事はなく、観測ドームは様々な機材の光で照らされている。

エンジンに火を入れて雲の中から抜け出した武蔵は、恒星の光で鈍く輝く数多の衛星を望みながら加速した。

光をも超えてワームホールに消えた艦の征く先には、果たして何かがあるのか。

彼らの旅路はまだ道半ば。

この先に何が待ち受けているのかは、まだ誰も知らない――。

— 第8話 「輝く石に願いを込めて」 —

第9話 「紅き石の導き」

かの星を脱した武蔵は謎の赤い石にしたがって航路を変更し、サレザーから銀河方面へとおよそ3,000光年の距離にいた。

広大な宇宙を臨む観測ドームの中央にそびえる一際高い階層でコンソールを触る水月は、壁際で石板を見つめながら手元の端末をいじるカレンへと言葉を投げる。

「カレンさん、進捗はどんな感じですか？」

「全然ダメね。そっちは？」

「こっちもです。分かったのは、この石が人工物だっという事くらいで」

「そう……」

うんと伸びをするカレンにつられて水月も背中を伸ばした。

彼女達がいる階層はその狭さから常設された椅子が無いため、彼女達は立ち仕事を余儀なくされている。

水月がコンソールの横にあるボタンを押すと、反対側のコンソール下部がせり上がってきた。

作業に使える常設の椅子がない代わりに、ここには休憩に用いる展開式の長椅子があ

る。

カレンと2人腰掛けると、ほとんど同時にため息が漏れた。

「そういえばカレンさんって、なんで宇宙考古学者になろうと思ったんですか？」

「んー、父が考古学者だったから、かしら。父は地球の地層とかを調べる考古学者だった。だから、もつと大きな事をしていって思ってる」

「そうなんですか……」

「途中で色んな人に会ったけど、ミスターレドラウズはちよつと変わった人だったわね」
「レドラウズ……あつ、シュトラパーゼで行方不明になった」

ハツとした顔で言うと、カレンは「あら、そうだったの？」と首を傾げた。

「私の情報ではミスターレドラウズは第11番惑星で死亡していると聞いているわ」

「……そっか、蘇生体としてヤマトに乗ってたから人としては11番惑星で……」

「因果応報かしら。彼結構、強引に調査に行ったりしていたし。同業者からは恨まれていたのよ、彼」

その事実にも黙り込むと、不意に扉が開いた。

「教授」

「珍しいわね。どうしたの、須藤」

そこに立っていたのは、カレンの助手として共に乗艦していた須藤康之であった。

艦内ではカレンと別行動をとっていたが、度々こうして顔を合わせている。

「石板の担当部分について結果が出ましたので」

「オーケー、そっち行くわ」

そう言つて立ち上がったカレンは、水月にヒラヒラと手を振りながら扉をくぐつた。

同じく手を振りながらそれを見送つた水月は、立ち上がつてドームのガラスに映る自分の姿を見つめる。

「ふわあ……」

「疲れてるんだね」

「えっ?」

声の方へと向き直ると、マグカップを持った柑奈が立っていた。

「柑奈……いつの間に」

「水月が黄昏てたから、話しかけにくくて」

「さつきから見てたつてことじゃん……」

「疲れてるなら休んだ方がいいよ」

そう言つて差し出されたマグカップを受け取り、口をつける。

「ん……ココア?」

「うん。疲れた時は甘いものかなあつて」

「柑奈が好きなだけじゃないの？」

「違うよ、失礼だなあ……」

「あはは……ごめんごめん」

むすつとした顔をする彼女に笑顔で答えると、水月は微かな光を発する紅い石を見つめた。

「この石の事が分かるまで、しばらく休めそうにないかな」

「ダメだよ、ちゃんと寝ないと」

「うん……ありがと」

マグカップを口に当てて一息ついた水月は、じっと石を見つめる柑奈の横顔を見ながら口を開く。

「そういえば柑奈」

「んー？」

「戦術長とは進展あった？」

「くふつ、えつ……えつ……えつ!!?」

「まだなんだ」

「まだ何も言つて……まあ、そうだけど……」

「早く言っちゃえば?」

「いや……それにはほら、タイミングとか色々あるじゃん……」

「そんなもんかなあ……最近には柑奈も戦術長も忙しいんだし、言える時に言っちゃったほうがいいよ」

「分かっているけどさ……」

身体の前で手を合わせてもじもじする柑奈を横目に、水月はこの時間を噛みしめるように喉を潤していた。

下士官2人部屋

重苦しい扉が開いた。

廊下の光が入ってにわかには明るくなった部屋に入るや否や、ベッドに腰掛けた人物の深いため息が聞こえた。

「なに、なんかあったの?」

二段ベッドの上段から降りて彼女の隣に座った美佳は、疲れ切った顔の奈波を覗き込んだ。

「うん……最近、医務室に来る人の数増えて……」

「えっ? 訓練で怪我したとか?」

「ううん、身体の怪我じゃなくて。心がね」

「……そっか……ずっと艦の中だもんね……」

「精神的に疲れたつていう人がいっぱい来て、最近はおつぱら相談聞いたりカウンセリングがほとんどだよ」

それを聞いた美佳は「よしっ」と立ち上がると、部屋を出て廊下を走り出した。

「……美佳ちゃん、どうしたんだろ……」

呆気にとられたまま彼女の背中を見る奈波であったが、直前までの疲労があり彼女を追いかける事はしなかった。

ベッドに横たわった彼女は、引き込まれるように眠りにつくのだった。

艦長室

「失礼しますっ!」

扉をあけて敬礼する彼女を見る人影が2人。

「……あれ、お兄?」

「美佳、どうしたんだ?」

「お兄こそ」

そう言った直後、兄の立場を思い出した美佳は「あつ、報告か」と手を叩く。

「それで……何か用かな」

「はい」

艦長の言葉に姿勢を正した彼女はゆっくりと話し始めた。

「先ほど、医務科の神橋奈波から聞いたのですが、最近精神を病み医務室を訪れるクルーが増えているとのことでした。そこで、娯楽の提供を具申したく」

「なるほど。考える事は同じみたいだな、戦術長？」

「——ほえ？」

艦長の言葉に背筋を崩して兄を見上げると、彼は後頭部をかきながら口を開いた。

「ああ、実は俺も同じ事を艦長に言ってたところだ」

「そうだったんだ……」

「ただあまりいい案が出なくて困ってた所なんだ。何かないか、美佳」

「うーん……ヤマトだとラジオとかお祭りとかやってたらしいけど……」

兄の振りに頭を捻らせる。

娯楽を提供するべき、と言いに来たものの、その実内容は何も考えていなかった。

それは兄も同じであるらしく、彼もまた彼女と同じように悩んでいたのである。

彼女が考えを巡らせていると、音声と共に通信が入った。

『艦長』

聞こえたのは棚橋の声。

「どうした？」

『本艦進路上に地球と似た環境の星がある可能性があります。異星文明との接触の可能性もありますが……』

「わかった。航路に変更はない、調査を兼ねてその惑星へと向かう。異星文明と接触した場合は、あくまで友好的にだ」

『了解』

通信を切った近藤は立ち上がると、帽子をかぶり直した。

「クルーのためにも娯楽施設は急務かもしれない。船務科にかけあっておこう」

「ありがとうございます」

2人は敬礼をすると、頷く近藤を尻目に艦長室を後にした。

彼らの背中を見届けた近藤は、ニヤリと笑って扉に手をかけた。

観測ドーム／第3階層

かすかな――。

それは、本当に微かなものだった。

「今、何か……」

水月は、先に戻った親友から渡されたマグカップを置くと、解析コンソールへと向か

う。

紅い石が指し示す光の軌道を宇宙儀に照らし合わせ、僅かに揺れ動く光の行く先を調べた。

「……………これは……………」

コンマ数ミリの揺らぎは、遙か数千光年先で大きな揺らぎとなり、そしてある星の周期と完全に一致していた。

「航海長、気象長へ、こちらら観測ドーム情報長です。共有しておきたい事があります——」

——第9話 「紅き石の導き」——

第10話 「招かれた地」

氷を纏い星系内へと現出した艦に接近してくるものがあつた。

「本艦右舷2時の方角に感あり。距離3万、数1。左舷10時の方向からも同様に接近してくる艦影」

丹生の声と共に、肉眼でもその艦容は確認できた。

「昔の護衛艦みたいな形してるな」

惑星が一つの国家に括られたこの時代、宇宙艦艇が主流である現在において洋上艦は既に過去のものであつた。

かつて自国防衛のため地球で運用されていた護衛艦という艦種は、駆動する事のないモニユメントとして数隻現存するだけであり、彼らには歴史を学ぶ中で出てくる兵器の一つでしかない。

有賀の批評はその通りであり、接近してくる艦はまさにそれと分かるレーダーを持たず、目に見える武装は艦首の単装砲一門、ムラサメ型を思わせる大型の艦橋を持つ洋上艦然とした姿をしていた。

「地球、ガミラスのデータベースに同様の艦はありませんが、ガミラスには惑星に関する

データがあります」

柑奈の言葉の直後、一ノ瀬の元に彼らからのメッセージが届いた。

「言語解析、第2艦橋に回します」

「不明艦、距離1万まで接近」

「第1種戦闘配備用意。撃ちはしない」

にわかに慌ただしくなる艦橋であつたが、言語解析の結果はすぐに柑奈の元へと来た事で、皆彼女に注目した。

「解析結果。ガミラスの植民星だつた惑星ジルバと一致しました。電文、『客人の来訪を歓迎する。我が星へ来るのならば、我らに続け』」

その報告に皆が肩の力を抜く。

「どうやら敵ではなさそうだ。本艦は現状を維持しつつ、ジルバの艦の案内に従う。返信、『お出迎え感謝する。本艦は貴艦らに全面的に従う』」

近藤の指示で一ノ瀬が返信を打電すると、武蔵へと接近していた艦のうち1隻は反転、もう1隻は武蔵後方へと回つた。

2艦の誘導に従い航行を続けると、地球によく似た青い星が見え始めた。

パンゲアのように一つにまとまった大陸と、その周りに浮かぶ大小の島々、青い海が広がるこの星には、地球にあつたような防衛装置は見えない。

護衛艦の1隻が武蔵後方から外れると、間もなく揺れと共に大気圏へと突入する。

「なんか、地球に帰ってきたみたいだ」

「ああ、そうだな」

有賀と泰平がそんな会話をしているうちに、武蔵は安定翼とマストに白い尾を引きながら雲を抜けた。

よく晴れた空、地球と同じような大気成分、そしてキラキラと輝きを放つ水面。

陸地に建つ建物の様式と、都市を囲うように作られた巨大な壁、洋上を進む艦影だけが地球と異なっている。

「都市に……壁？」

天高くそびえ立つ塔を中心に形作られた都市だが、城壁のような壁だけがこの平和に異様なほど堅牢さと冷酷さを感じさせた。

誘導してきた艦からのビーコンに従い、陸地から沖合3キロの地点に着水した武蔵は、艦の制動とともに錨を降ろす。

艦体にぶつかる波とその飛沫が見えると、有賀は席から艦内に通達を出した。

「戦術長より達する。現時刻をもって戦闘配備を解除。繰り返し——」

レーダー音が艦に接近する小型の反応を探知し、近藤、有賀、谷村、そして柑奈が立ち上がる。

左舷のハッチを開き海面へタラップを降ろした所にクルーザーが接舷した。

ガミラス式をコピーして作られた翻訳装置を首につけた4人がタラップを降りていくと、クルーザーから降りた青年が紳士的に頭を下げた。

「ようこそいらつしやいました、我が星、ジルバへ」

「あなたは？」

「わたしは客人へのご挨拶を仕りました。ここでのお話もなんですから、街へと参りましょうか」

クルーザーを指し示す青年。

顔を見合わせる4人だったが、艦長の笑顔でクルーザーへと乗り込んだ。

武蔵／艦橋

「接舷したクルーザー、艦長達を乗せて艦を離れる」

「さて、もし何かあつたら指揮は誰がとるんだ？」

両手を頭の後ろで組み、背もたれに身体を預けた泰平が横目で問いかけた。

「現時点で高官である航海長か船務長じゃないですか？」

来島が前を見ながら返すと、背後から「いや」と異を唱える声が出てきた。

「やっぱり戦闘指揮をとる理沙ちゃんだと思うよ」

「えつ、私ですか？」

「船務長と同意見だ。ま、今すぐ襲撃されるって事は多分ないだろうけどな」

軽く笑う彼は、にわかには武蔵の周りの艦の数が増加していることには気づかなかつた。

ジルバ／都市部

青年に連れられて街中を歩く4人は、それぞれに不審な陰を認識しつつ平和な時を刻む街を進む。

「そろそろあなたの名を聞いてもよろしいので」

「名にこだわられるのですね」

ここに至るまで幾度も繰り返された近藤からの問いに、彼はようやく答えた。

「意思の疎通には必要な事だと思えます」

「こちらにも事情という物があるのです。皆さんもお気付きのはずですが」

すると彼は突然大通りから伸びる小道に入り、両脇に目をやると歩く速度を上げる。

それを追う彼らの背後では小道の左右に開いていた八百屋と果物屋が道を塞ぎ、その裏手に小さく建てられたプレハブのような小屋で彼は手招きしていた。

「まさかマークされているとは……」

扉を閉めて呟く彼の横顔には先程までの冷静さは感じられない。

「やはりあの人影はあなたを追っていたのですね」

「ええ……恐らくは」

イスのない小屋に正座をした彼は、有賀達を見る事なく頭を下げる。

「皆さんを巻き込むつもりは無かったのです。申し訳ありません」

「いきなり何の話だ？」

有賀の言葉に顔を上げた彼は、淡々と事の顛末を語り始めた。

「わたしはこの国で外交官として勤めている者です。あなた方は、上空から、そして今街を歩いてどう思われましたか？」

「どう……って……変わった街だけど、平和だなとしか」

「ええ、たしかにこの星は平和ですが……この星の民のすべてがこの平和を享受できていない」

有賀たちを真っ直ぐに見つめた彼は、力強い眼差しを湛えて、その決意を口にした。

「わたしは……かりそめの平和に叛旗を翻すものです」

—— 第10話 「招かれた地」 ——

第四章 革新編

第11話 「自由への楔」

「わたしは、仮初めの平和に叛旗を翻す者です」

——なんだよ、それ。

艦橋の窓から夕暮れの空に飛び立つコスモゼロを眺めつつ、有賀は肘置きの手を握りしめた。

「都市を囲む城壁の向こう側に広がる物を見ても、この都市が美しいと言えますか」艦に戻るや否や、近藤はコスモゼロに望遠カメラの装備と出撃用意を指示した。

彼の言葉の真相を確かめるため、異文明の理解のために。夕暮れの街、壁際の家には電気の光が漏れ始めている。

壁を超えたゼロのカメラには、黒い大地しか映っていないかった。

「なんだ、何も無いじゃないか」

ほっと胸をなで下ろす有賀だったが、柑奈の視線は厳しい。

「カメラをサーモグラフィに切り替えてください」

何かを捉えた柑奈の指示からしばらくして、画像が地表の温度を見せた。

「ホットスポット……ですかね？」

地表の温度は夕暮れとは思えないほどに暖かく、そして——同じように形作られていた。

「やつぱり……」

立ち上がった柑奈は画像を拡大してその形状を切り抜いた。

「このサーモグラフィの赤い部分、それは全て人間です。生きている、人間です」

ワイプに映されたコスモゼロからのライブ映像は暗視モードに切り替わり、少しずつではあるが動く人影やいくつか作られたテントの存在が確認できた。

陽は落ち、闇と静寂に支配されたこの星の外気温は5度を下回る。

蠅のたかる死体の山に行つては肉を切つていく人たち、痩せこけた子ども、赤子を抱いて寒さに震える母親。

城壁に近づけば女子供問わず射殺され、時折与えられるわずかな食糧と引き換えに私たちは労働を強いられる。

そして、まるでゴミのように放り出される父親の遺体が帰ってくる——。

「こんなのつて……」

来島の声は震え、映像をただ見つめる近藤の表情は険しかった。

「とても……美しいなんて思えやしない……」

歯をくいしばる有賀は拳を握りしめる。

「これが、この星の実情……美しい街の、裏側……」

「美しかったただけだ。無辜の人々の犠牲の上に成り立つ街。選民思想が目に見えるじゃないか」

柑奈に答えた有賀の言葉に頷いた近藤は、横目で一ノ瀬を見た。

「一ノ瀬、彼を呼び出してくれ。コードはさつき渡した通りだ。コスモゼロを呼び戻せ」

星空に光るエンジンと機体の光が、海に浮かぶ巨大な艦へと戻っていく。

けたたましく鳴る通信機に手を伸ばすと、彼はにやりと笑いながら声を発した。

「見ていただけましたね。この星の闇、黒い大地の真実を」

『確かに見ました。しかし、これを見せてどうしようというのですか』

「それはあなたの方次第。……次の朝焼けと同時に、我々は行動を開始します。それでは、あなたの方の決断を」

『待て、それは——』

彼らなら、恐らく。

背後にそびえる艦影に身体を溶かし、彼は闇へと消えた。
賽は、既に投げられている。

武蔵／艦橋

刻一刻と迫る時間。

白んでいく静寂の中で、丹生の声と共に艦内はにわか慌ただしくなる。

「総員、第1戦闘配備。機関長、緊急発進用意をお願いします」

「機関正常、回転数上げ。いつでも出せるよ、航海長」

「ありがとうございます。有賀は大丈夫だな」

「当然だ。来島、主砲のエネルギーは」

「大丈夫です。気象長、日の出まであとどのくらいですか？」

「日の出は艦内時間で約30分後。一ノ瀬くん、何か通達はあった？」

「いえ、未だ何も。技師長の方はどうですか？」

「こつちも何もない……静かな朝……。艦内、艦外共に異常ありません。いつでもでき

ます、艦長」

「わかった。だが、ひとまず動きを見ないことには我々も動けん。現時点で我々は、本艦の自衛のため以外の戦闘は行わない。いいな、有賀」

「了解です。あなたはここにいていいんですか、カレンさん」

「好きでいるのだから、気にしないでちょうだい？」

笑顔で答える彼女から目をそらすと、ゆっくりとジルバの太陽が顔を出し始めていた。

輝く水面、美しい青空。しかしその奥に見える広大な陸地には――。

警報音が止んだ艦橋に、レーダーが何かを探知した音が響き渡る。

「本艦8時から11時の方向で爆発反応……」

丹生の声に窓の外を見ると、城壁の内部の建物から煙が立ち上っていた。

数は5本。マップに照らし合わせると、どれも軍施設であり民間人への被害は極限まで抑えられていることが分かる。

「本艦周囲の艦艇、主砲を本艦へと向けました」

光学映像で観測を行っていた柑奈の報告を受けた艦長はしかし、動じる事なく艦の外を見つめていた。

市街地ではビーム砲らしき光線が空を裂き、雲を消しとばして大地から黒煙が立ち上る。

煙の中から現れた全長300メートルを超える戦艦がその姿をあらわした。

デウスーラと似た背後をしたその艦には他の艦には少ない目に見える砲塔が多数搭

載され、長大な主翼からはタンクと思しき装備を懸架している。

旗艦の隣に浮上した100メートルほどの艦艇4隻は2隻を後方、2隻を前方に展開して、迎撃のため出てきた艦を市街地から遠ざける動きをし始めた。

反乱軍と正規軍の戦力差は圧倒的であったが、武蔵は静かに推移を見守り続けた。

正規軍は、戦闘能力が未知数である武蔵が洋上で静観しているためか洋上から進軍してくる形跡はなく、全て武蔵周辺海域で止まっている。

「徐々にですが、正規軍の戦力が削られ始めました。本艦付近の海域、距離2000メートル付近にジルバの正規軍艦艇が集まり始めています。総数は現在15」

丹生の報告の直後、爆煙をあげて着水した艦艇が白波を立てながら沈んでいく様が見とれた。

武蔵艦橋の前をゆっくり進軍する小型艦艇は、武蔵の後方から回り込む友軍と共に海域で止まる艦艇の撃破にかかる。

その刹那。

「都市部中央の塔中腹に8ポイントの熱反応……これは……なに」

扇状に放たれた8本の中光の矢は、山形の軌道を描いて大地に突き刺さる。

それは即ち――。

――虐殺。

巻き起こる爆発の下で、一体どれくらいの人がいなくなったのだろう。

8つのキノコ雲が土を抉り取る。

「……っ、艦長！」

席から立ち上がった有賀は「……意見具申」と一言入れた。

「戦闘行為であれば静観するという方針には賛成ですが、これは既にその域を超えています」

一呼吸置いた彼は、数多の想いを込めて。

「……行くべきです！ この艦の力は、失われるいわれのない人たちを守るために使う、その行為が間違いだとは思えません！」

まっすぐな、あまりに純粋な言葉に来島はうつむく。

この艦の安全を考えるのなら、この戦いは静観して逃れるのが最適解。自ら火に飛んでいくのは愚の骨頂。

しかし。

いつか、有賀に言われた言葉が頭をよぎる。

「——今は素直になれなくていいさ。君なりの生き方をすればいい」

彼の横顔を見た彼女は大きく息を吸い込むと、席を立ち艦長を見つめた。

「……艦長」

居住まいを正した来島は胸に手を当てて口を開く。

「私は、戦術長の意見を支持します。無為な戦いは避けるべきですが、私はこの戦いを無為なものとは思わない。見た責任も、知った責任もありますから」

近藤が考えるように俯いた直後、再びレーダーに警戒音が鳴り響く。

「塔に再び熱反応が8つ、発射まで25秒！」

「……迷っている暇はないか」

艦内に警報を鳴らした艦長は、立ち上がりクルーを見つめながら声をあげた。

「迎撃用意！ 現時刻をもって、本艦はこの戦闘へ介入する！」

「了解！ やるぞ、砲雷長」

「分かっています」

重々しく左へ旋回する武蔵の砲身。

回転数が上がり、唸りはじめる波動エンジン。

動きを止め、その砲身から放つ光の矢は魔の塔を貫いて稲妻と共に空を切る。

「緊急発進！」

空高く水柱を吹き上げた武蔵は、艦に纏う水を振り払い黒煙の立ち込める街へと舵をとる。

翼を広げたその艦を墮とさんと浮上し、追従してくるジルバ艦へミサイルを放った武

蔵は、艦体左舷のロケットアンカーを可変させる。

「全砲塔左舷へ。ロケットアンカー、射出」

艦体に焼きつくほどのエンジンの炎と共に地にに向けて飛び立つ鉄の塊は、地面を抉りながら空の艦を繋ぎ止める。

強い慣性に引つ張られて艦が敵に腹を向けた瞬間、姿勢制御ロケットを使って空中で無理やり静止させた。

「撃てええええええええ！」

9門の砲身から解き放たれた陽電子の束が武蔵へ迫る艦の装甲を溶かし、抉り、貫き、破壊していく。

海に、大地に、浮上せんとする僚艦に堕ちていく敵艦を見送る事もなく武蔵は錨を抜き、仇討ちしようとする敵艦から逃れるために加速していく。

その攻撃は民を守るといふことなど考えられず、ただ武蔵を撃ち墜とさんとするだけのもの。

艦体に直撃するエネルギー弾によって爆煙をあげたまま高度を落とす武蔵。

「左舷第2デツキに被弾！」

「ダメージコントロールは正常に作動しています。作戦行動に問題ありません」

「わかった。波動防壁は使わない。転舵反転、城壁へと向かう」

艦長の指示とともに姿勢制御ノズルを出して方向を整えた武蔵は、地上から50メートルほどの高度で補助エンジンの出力を上げた。

「泰平、高度を上げろ。このままじゃ城壁に……」

「いや、このままだ。このままの高度を維持しろ！」

武蔵の後方に回り込んだ敵艦からの砲撃に晒されつつも直進を続ける。

下方の敵に弾が当たらないことにしびれを切らした敵も次第に高度を下げていき、数は地面と接触して爆散。

運良く制御ができた敵が武蔵の艦橋を狙うも、武蔵は艦を横倒しにする事で直撃を免れる。

青い陽電子砲が敵艦の艦底部を貫くも、眼前には城壁が迫ってきていた。

静かな街に轟く号砲は、新たな世界の始まりを告げる狼煙。

この星につけられた傷は、自由への楔となるか。

多くの命消える中で、切り拓かれる未来は、果たして――。

——第11話 「自由への楔」——

第12話 「勝利の条件」

砕け散る。

地に降り注ぐ巨大な石。

先程まで壁として立ちはだかっていたモノは、土埃をあげながら崩れ去った。

けたたましいエンジン音を轟かせながら現れたその艦は、人々にどう見えているのだろうか。

地を抉り取った翼を浮かせて横倒しだった艦体を起こした武蔵は、ゆつくりと艦首をあげて青空を登っていく。

「波動防壁、避弾経始低下。艦体損傷なし。間に合いました……」

胸をなでおろす柑奈。

洋上では衝撃波を巻き起こして艦が沈んでいく。

「反乱軍の艦艇と正規軍艦が相討ち、反乱軍旗艦は正規軍の艦を砲撃しながら洋上へと逃れていきます」

「……いや、違うな」

海上に艦首を向ける途中、艦の様子を確認した有賀が言い放つ。

「逃れるためなら速度が遅すぎる」

振り返った有賀は、艦長に呼びかけた。

「かの艦が追っているのは恐らく逃走した国家元首です。追撃を」

「ダメだ。そこまで我々がやる訳にはいかない」

モニターに映された人々は、武蔵が粉碎した城壁の隙間から街へとなだれ込んでいた。

「これが、圧政の終わり……」

「革命の結末を見届ける事もないだろう。ここから先、この星の歴史に我々は邪魔なだけだ」

直後、海面から水柱が立ち上り、ついで海から宇宙へと登るミサイルが観測された。

「ミサイル、進路変更……目標は……本艦です！」

丹生の震えた声の直後、更にレーダーが反応を示す。

それは宇宙からの刺客、革命の報せを受けた軌道警備艦の降下を教えていた。

「上空の艦、総数7、距離2万」

「艦尾魚雷、迫るミサイルを迎撃。主砲発射準備！」

排煙と共に風をききつて飛び出す3本の魚雷がミサイルを爆炎に沈めると、艦橋の窓には恒星を背に迫る艦の姿が映る。

「どうしていきなり武蔵に……」

モニターを見ながら呟く棚橋に、カレンは横目を流しながら口を開いた。

「艦長はさつき、ここから先の歴史にこの艦は不要だと言ったわ。けれど、あの時飛び立った時点で、この艦はもう歴史の一部。そしてこの艦が来てすぐに革命が起これば私たちの入れ知恵だと思うのが定石。違つかしら」

「本当に我々が入れ知恵をしていたなら準備期間が短すぎる……それくらいは——」

「それは武蔵の能力を、私たち人間の力を知っているから出る答えよ。私たちはこの星にやってきた異星人。まだ見ぬ力があると見られてしかるべきだと思うわよ」

一ノ瀬の言葉を遮ったカレンは「でも」と付け足した。

「悪いことばかりじゃない。おかげで、私たちが守ろうとする物に火の粉が降りかかることはない」

微かに仰角をあげた武蔵から放たれた陽電子砲は空を切るが、迫る艦にはかすりもない。

7隻の艦隊は武蔵を囲むように進路を取り、それに合わせて武蔵も主砲を指向させる。

「……泰平」

横目で指示を出した有賀は、まっすぐ前を見つめる。

徐々に大きくなる警報音と共に近づくのは、周囲を囲む敵艦から放たれたミサイル。青空に飛び散る破片、爆炎から落ちてくるのは——艦。

艦首から墮ちゆく武蔵は、ゆっくりと回りながら海へと向かう。

海面の直前で艦底を下に向けた直後、白波の中にその艦は消え去った。

刹那、巨大な爆発が起こると水面には灰色と赤の欠片が浮かんでいた。

「——これは勝利ね」

眼前に広がる群青の世界の只中で、カレンは静かに口を開いた。

「どう見てもこれは苦肉の策だ。勝利なんかじゃ……」

「いいえ、私たち……ううん、あなたたちの勝ちよ、義弥」

嘆息する彼に笑いかけると、彼女は席を立つ。

「あなたたちクルーは、無辜の人々が殺されることを良しとしなかった。だから、飛んだ」

「確かにそうです。それで、あなたの言う勝利って……」

「この艦は人々を守るために囚になった。離脱する武蔵を敵が狙った時点で、彼らの狙いは武蔵にあり、人々にはなかった。今も、着水した敵は私たちを探している。どう？」

「この時点で武蔵は勝負に勝っているのよ」

得意げに話す彼女に反して、クルー達の顔は暗い。

仮に彼女の言う通りだったとして、海に堕ちた武蔵に、果たして何ができるのだろう。「大丈夫。私がこの艦を指名したのは、運がいいからだもの」

医務室

「重傷者はこつちだ、早く運べ！」

着水の衝撃で散らかった機材を整えながら、怒号と共に次々に運び込まれてくる怪我人をさばいていく。

「奈波！」

「美佳ちゃん……!?」

非常灯で薄暗い中を走ってきたのだろう。肩で息をして、顔に少し擦り傷を残した彼女は、微かに笑みを浮かべる。

「貸して。1人より2人だよ」

「いや、でも……美佳ちゃん、船務科……」

「こう見えても初期応急処置の実技は首席ですよー。まあ任せてよ、奈波に比べたら基礎的なことしかできないけど……無いよりはいいでしょ?」

「……うん。じゃあ、トリアージの優先度4の人達からお願い。血は出てるけど命には

関わらないから」

「オツケー、任せて！」

床に転がる人達を避けて駆け出す美佳の背中を見送り、彼女もまた踵を返す。

「大丈夫ですよ、すぐに処置しますからね……ちよつと痛いですよ」

優しく語りかける彼女の声は、今が戦闘中なのだと思わせようであった。

第一艦橋

「現在、船体傾斜25度。どうする、義弥」

泰平の問いに有賀は一つ息を吸うと、「決まってるだろ」と笑いかける。

「俺たちがもう勝負に勝っているなら……あとは戦いに勝つだけだ」

輝く水面、その上空では洋上から飛来するミサイルを迎撃する大型艦の姿があった。

その水面に、不意に白線が伸びる。

等間隔、扇状に6本まっすぐ伸びたそれは、艦から立ち上る2本の水柱によつて消える。

二つに割れ海に消える2隻と、第2波から間一髪逃れ浮上した護衛艦。

それを追うように海を割り、纏う水滴を振り払って現れた武蔵は、左右に向けた砲口を轟かせた。

安定翼を開き、まっすぐ宇宙に向かう武蔵。

「追つてくる敵は無視してこのまま宇宙に出る」

背後から迫るミサイルを艦尾の魚雷で撃ち落とすと、武蔵はすぐに安定翼を閉じた。飛来した弾丸に貫かれた装甲から火が噴き出る。

それでも艦は青い光を引いて、空に開いた穴に突入した。

啞然とする艦隊の乗組員たちは、地上に目を向けて嘆息した。

真実を知った国民達は王の打倒を喜び、強制労働させられていた男たちは家族と再会を果たす。

武蔵が破壊した城壁から内部に入った貧困層の民は、忘れかけていた普通の食事を与えられていた。

革命軍の勝利を確信した彼らは投降を宣言し、数時間に及ぶ戦闘は終わりを告げた。その後の未来を予測はできない。

しかし、悪政の歴史はこの星に残り続けるだろう。その歴史がある限り、過ちは起こるまい。

武蔵が出現したのは、星系のはずれ。

「ふう……」

「お疲れ様、美佳ちゃん」

壁にもたれて座り込んだ彼女の隣に座った奈波が笑顔を見せる。

「うん、ありがと」

目の前には人1人いない通路が広がっていた。

ワープアウトから約2時間、けが人の処置を終わらせた彼女達は、やっとの休息と
なった。

「水飲む？」

「あ、いるー……ありがとね、奈波」

「ううん。でもよかったね、命に関わる怪我がなくて」

「んっ……ん……はあ……そうだね。はあーお腹すいたー」

「ふふっ……じゃあ、報告終わったら何か食べに行こっか」

「いいねー」

直後、彼女達の耳に艦内放送の音が聞こえてきた。

『船務科、有賀美佳。至急第一艦橋へ』

「……ええーつと……なにかしたっけ……」

「勝手に持ち場離れてきた？」

「いや、それはないよ………多分」

「うーわー……」

「じゃあ、食堂で待つててね、すぐ終わらせるから！」

満面の笑みで駆けていく美佳。

先程は頼れる背中だった彼女の背中が、今は少しだけ頼りなく感じられた。

第一艦橋

「これで良かったんだよな」

静寂な星の海を眺めながら、有賀はしみじみと呟いた。

「自分の決断には自信を持って。間違っていないと信じなければ、悪い方にばかり頭が回る」

肩に触れる大きな手。

「艦長……」

「大丈夫だ。最適な判断だった」

はにかんで艦橋を後にした艦長に次いで、柑奈が彼のもとに歩み寄る。

「なんか、ちよつと優しかったですね。艦長」

「そうだな……」

窓の端には損傷を直すべく駆り出された甲板員の姿が見える。

「後1時間で通常艦内シフトに移行します」

丹生がアナウンスする声を受けて、泰平たちの肩の力も抜ける。

「有賀美佳、入ります」

エレベーターから出た美佳に「今行くね」と立ち上がった丹生を横目に、柑奈がふと首を傾げた。

「そういえば、カレンさんって……」

「ワープアウトからすぐにどっか行きましたよ。よく分からない人ですね」

嘆息交じりに返した来島の頭に手を置いた柑奈は、まるで妹でも見るような目をしていた。

「な、なんですか……」

「ううん。ちよつと柔らかくなつたなーって思つて」

「……私だつて、たまにはそう……あの、頭撫でるのやめてもらつていいですか」

「ん？」

「はあ……」

頭を抱える来島。

慌てて取り繕う柑奈の姿に思わず笑みがこぼれた。

革命の戦いを目の当たりにした有賀は、この平和なひと時を噛みしめる。

どうかいつまでもこの時が続けばいいのだと願ひ、艦は星の海を征く。
にわかには輝きを灯す紅い石の指し示す先に何があるのか。
今の彼らはまだそれを知らない――。

――第12話 「勝利の条件」――

第13話 「遠い記憶、乙女の心」

深夜零時。

新たに来る年に湧く艦内の中で、静けさに満ちた観測ドームに入った彼女は、流れていく星空に目を細める。

今この時は電灯を消し、宇宙を見る事ができるこのドームの中で唯一輝くのは、道を示し続ける紅い石。

「かーんな」

「水月……どうしたの？」

「あけましておめでどう」

彼女が差し出したモニターの画面では2206年に表示が変わり、「H a p p y
e w Y e a r !」の文字が浮かび上がった。

「うん、おめでどう」

「なんか浮かないねー」

「そうかなあ？」

首を傾げながら、柑奈はじつと紅い石を見つめる。

「ほら、またそうやって」

「この石みたいに、誰かが私を導いてくれないかなー……なんて」

「なんでサクツと告白しないの?」

「うえっ!?」

上ずった声をあげる柑奈の肩を掴むと、水月は続ける。

「いい? 正直言っただけ超じれたいの。2年もずーつと片思いで、気持ち知りたくか思わない!?」

「いやー……別に……」

「なんなのそれ……2年も……いや、4年くらい? 一緒にいて有賀さんから何もアクションしてこないってことは、じっとしてても進展しないんだよ!」

「だから、私は別に進展させようとは思ってないんだけど……」

「じゃあその間に誰かにとられてもいいの!?」

「誰かって、誰」

「……誰かは、誰かだよ」

しばしの静寂ののち、咳払いをした水月は「とにかく!」とより一層強く彼女の肩を掴む。

「柑奈がその辺りはつきりしないと、私たちが気が気じゃないの!」

「私……たち……？」

しまった。

そんな心の声のはつきりと聞こえるほど動揺した顔で固まる水月に首を傾げる。

瞬間、再び行動を始めた水月が恐ろしい早口でまくし立てる言い訳を聞き流しながら、柑奈は――。

「やっぱり……はつきりさせた方がいいのかな……」

「お兄、いる？」

その声に開いた扉の向こうでは、首を傾げる兄の姿。

「どうした？」

「久しぶりに非番重なったからさ、家族水入らずってことで」

「そうか」

妹を部屋に招き入れると、コーヒーを淹れて彼女に手渡す。

「ありがとう」

笑顔を見せて口をつける。

「……………うえ……………にが……………」

「はははっ、まだまだ子供だな」

「うるさいっ！ もう、なんでミルクも砂糖もないの……う？」

「美佳の為に用意はしないぞ」

ニツと笑ってコーヒーを口にする、美佳はふとため息をついて「それで」と切り出す。

「お兄、ちよつと聞きたいんだけど」

「なんだ？」

「いや……大した事じゃないんだけど……」

「なんだよ、それ」

彼女の隣に腰掛けると、美佳は肩に頭を乗せてまるで独り言のように呟いた。

「お兄は、柑奈さんの事どう思ってるのかなーってさ」

「……いい母親になりそうだなって」

「……ふーん、そう、母……親……は、ハハオヤ!?？」

距離をとって目を点にする美佳に「何をそんな反応してるんだ？」と冷たい目を向ける。

「柑奈はしつかりしてるし、優しいし」

「子供にもそうだろうなーとか？」

「そうそう。よく分かったな」

「いやお兄、何その超分かりやすい考え。えっ、まさか本気でそれしか思っていない？」
「そうだけど」

「……………ええ……………」

更に距離を取る美佳。

その目は軽蔑もあり、ただただ引いていた。

「おい、なんだその目」

「……………ううん、なんでもない」

しばらくして兄の部屋を後にした美佳は、頭を抱えて深いため息をついた。

「……………まだ、時間かかりそうだなあ……………」

兄の部屋の扉をしばらく見つめて、美佳は歩き出した。

——でも、ゼロじゃない。

そんな事を思いながら。

数日後

「見せたい場所って？」

非番の日、水月に呼び出された有賀と柑奈は、広大なレクリエーションルームに新しく作られた区画の前に立っていた。

スペースが有り余っていたレクリエーションルームのおよそ半分を仕切って作られたそこは、手書きの文字で「心落ち着かせる空間をお届けします！」と書かれた紙がセロハンテープで貼り付けられている。

「明日から他のクルーにも解放するんだけど、一足早く見せてあげようと思って」

「解読作業で忙しいのによく作れたな」

「基礎設計は柑奈だったり、技術科員も多いですから。私だけじゃないです。それに技術科だけじゃなくて色んなところが協力してくれたので、負担は少なかったですよ」

専用コードを打ち込み、扉が開く。

そこに広がっていたのは、一面の雪景色。

「……すごいな、これ……」

艦内とは思えないほどに鮮明な映像で映し出された、地球の冬。

冷静に考えてそれがホログラムである事は分かってても、人工降雪機で心地よく肌当たる雪の冷たさや、温度管理された上での冷感がとてもリアルに冬を感じさせた。

「設計以上にできたね、水月」

「そうでしょ？」

得意げに胸を張る水月は、周りの景色を見つめながら続ける。

「有賀さんや美佳ちゃんからの相談もあって、このリラクゼーションルームを作る事は

決まったので、あとは医務科の先生とかに相談しながらですね。そこは柑奈の仕事だったよね」

「うん。でも私はそこまでで別の仕事してたから、あとは水月達のおかげだよ」

2人、讚えるように笑い合う。

「じゃ、私はこれで。そこにベンチもあるしごゆっくりどうぞ」

いたずらっぽく言い部屋を後にした水月。

「環境設定冬なのに何がごゆっくりなの……？」

「らしいと言えばらしいけどな……」

とはいえ凍えるような寒さではなく、むしろ心地の良い気温に設定されているのもあり、2人はなんとなくベンチに腰掛けた。

端の方で縮こまり俯く柑奈を横目で見た有賀は、少しだけ近くに寄ってみる。

「柑奈、どうした？ 調子悪いのか？」

「あつ、い、いえ、なんでも」

——ダメだ。

数日前、柑奈は水月と美佳に言い寄られていた。

無理を言う事でもないのだが、彼がどう思っているのか気になってきた柑奈は直前まで気持ちを決めていた。

——……言えない……。

ここで気持ちの弱い自分が嫌になる。

「前、美佳に聞かれたことがあつてき」

「美佳ちゃんに？」

突然口を開いた有賀を向くと、彼は柑奈の方を見て続ける。

「柑奈のこと、どう思ってるかつて」

「……どう、答えたんですか……？」

「いい母親になれそうだな、とか」

「……！……！！？」

不意に顔が熱くなる。

恐らく彼にそういう気持ちは無いだろう。

それでも、彼女にとっては。

「いや、あの……それ、は……」

有賀の顔を見られないどころか言葉すら出てこない。

「………反則、です……」

小さく呟いたが、彼にはきつと聞こえていない。

「その後美佳に呆れられて、『それなら柑奈さんに心配かけさせないで』って」

「本当ですよ……あの時のこと、まだ根に持っていますから」

「うえ、本当か？」

「はい」

意を決して有賀の目を見つめた柑奈は、頬を赤らめて今できる最大限の笑顔を向ける。

「有賀さんは私にとって、誰よりも……何よりも大切な人なんですから」

「……!?？」

「私、待っています。じゃあ、お先に失礼しますね」

レクリエーションルームを出た柑奈は、扉が閉まると同時に深く息を吐いた。

「聞かなかったんだ、答え」

腕を組んで待ち構えていた水月を見ると、ふと視線を落とす。

「きつと、義弥さんは私のこと、なんとも思っていないから」

「それは違います」

声の方を向くと、美佳が少し安心した表情で立っていた。

「お兄、なんとも思っていない人をあんな風に言いませんよ。あんな、優しそうな顔もしませんから……」

一息置くと、彼女は満面の笑みを浮かべる。

「あとはお兄次第です。でももし、その時は……」

壁に映し出される映像が切り替わり、雪が青空に変わる。

爽やかな景色を背に手を後ろに組んだ美佳は、柑奈に顔を近づけた。

「よろしくお願いします、お姉ちゃん」

「……美佳ちゃんみたいな妹なら、大歓迎かな」

優しく髪を撫でる。

その手は暖かく、いつかの母の温もりを感じられるようだった。

——お母さん……うん、お兄が言った意味、分かったかもしれない。

いつかの、遠い母の記憶。あの日、地球に降った赤い流星が消し去った優しき日々。

そんな日に想いを馳せて、部屋に戻った彼女は静かに涙を流すのだ。

——第13話 「遠い記憶、乙女の心」——

第14話 「サルガツソーの遭遇者」

年始の騒がしさも鳴りを潜め、武蔵は予定の航路を進んでいた。

レクリエーションルームのホログラムは桜へと変わり、非番のクルー達の憩いの場となっている。

艦内時間で2時間後に迫ったワープのために集まった航海科のクルーもまた、慣れきったワープのためリラックスした雰囲気であった。

「次のワープ先って……」

「サルガツソーの近くですね。アカギのクルーが言っていた危険地帯です」

「……棚橋さん……何涼しい顔で言ってるんですか、危険地帯ですよ」

「案ずることはありませんよ、航海長。報告ではサルガツソーに入らなければ危害は加えられませんから」

——それ、言っちゃダメなやつ……。

内心そんな事を思いながら、泰平はコーヒーに口をつける。

「そういえば、サルガツソーを探查しようとしたガミラス艦がいたって聞いたけど……」

「あーそんな事聞いたかも……結局行方不明になったんだって」

柑奈に答えた水月は、モニターの光に満ちる観測ドームで赤い石の示す座標を調査していた。

「ワープの座標が変わったのって中性子星があるからだっけ」

「そうだよ。そこでどこに行くか分からなくなるよりはマシでしょ?」

「でもね……サルガツソーの範囲が5光秒くらいあるっていうのが……」

「まあ確かに、地球から金星くらいだし範囲は広いけど、近くを通るだけだし大丈夫だよ」

「でも柑奈、あそこ、ガミラス艦が消息を絶ってる宙域だよね」

「反射衛星砲搭載艦がそこを調査する為に大艦隊を引き連れて旅立ったのが半年前。ちようど武蔵より少し早いくらいのタイミングで調査が始まっている。何かあっても、私たちは1人じゃないよ」

優しく微笑む彼女から目をそらし、水月はパネルを操作する。

「……杞憂だといいいけど」

直後、艦内にワープの時間を知らせる放送が入った。

消灯を始めるドームを後にする柑奈の背中を尻目に、機器のシャットダウンをする。

『——間も無くワープの時刻となります。総員ワープに備えてください。繰り返しします』

真空に開いた穴から現れた武蔵の傍らには、無数に漂う小惑星と艦船の残骸。

漆黒の宇宙と白んだそこは、不気味なまでに静寂であつた。

「次のワープまで6時間……」

「通常航行でここを抜ける事はできないな。せいぜい何も無い事を祈るしか」

ちらりと後ろを見ると、ワープのアナウンスからずっとレーダーに張り付いていた美佳がじつと画面を見つめていた。

「美佳、そんなにしなくても大丈夫だ」

「えっあ、うん……大丈夫？」

「ああ。気を張りすぎると疲れるぞ」

そっかーと肩の力を抜く。

「そんなにしなくても、異常があれば知らせてくれるから大丈夫だよ美佳ちゃん」

「はい、分かりました柑奈さん」

笑顔で答えた美佳の姿を見て前に向き直つた有賀。

ふとした違和感に目を凝らすと、白い霧の中に何か光るものがあつた。

「艦長、今何か——」

直後に鳴り響いたのは……。

「……救難信号……ガミラスの標準コードです」

「艦種は？」

「分かりません。ですが所属は……この宙域を調査する為に派遣された部隊です」

反射衛星砲搭載艦。

ガトランティス戦役時に計画、建造されたガミラス仕様のアンドロメダ級、ランダルミーデを含む3隻には、ノイブルグレイとは異なり反射衛星砲が搭載されていた。

その基礎設計は本国へと持ち帰られ、これまでの性能をはるかに凌駕する性能を持つ旗艦として数隻が建造されている。

主装備が反射衛星砲なのは波動砲を悪しきものとするイスカandalへの配慮であり、ガミラスのイスカandal信仰の表れでもある。

「そんな部隊が救難信号を出してるって事は……」

「やられた……って事だろうな」

泰平に答えた有賀は視線を落とす。

救難信号をどう受け取るべきなのか、まだ決めあぐねていたのである。

生存者がいる可能性は、たとえ低くともあるだろう。だが、地球よりも長距離航行に慣れたガミラス艦隊が敵もない場所で救難信号など出すはずがない。

それは即ち、この広い空間に敵が潜んでいる可能性が高い事を示していた。

——アカギのクルーの警告通り、通達を入れて待機するべきか……。

本来ならそれが最も良い判断だ。しかし、生存者がいると仮定した場合それは異なる。

たとえ無謀でも、第11番惑星でのヤマトのようにいるとも知れない生存者のために身をなげうつべきなのか。

武蔵の攻撃オプシオンを頭に浮かべて首を振る。

戦艦たるヤマトに比して、探査船である武蔵の攻撃オプシオンは少ない。

単艦で突入するには、圧倒的に火力が足りない。

「数と位置さえ分かれば、まだ作戦が立てられるのに……」

「数と……位置……」

「でもお兄、レーダーだと何も映ってないし……」

「……そっか」

何かを思いついた様子の柑奈は立ち上がると、艦長に向き直る。

「意見具申。本艦の惑星探査装置を利用すれば、この宙域に潜んでいる可能性のある敵の位置や小惑星、残骸の座標も特定可能であるものと思います」

「惑星探査装置って……艦首のアレか？」

「そうです、義弥さん。その観測結果をコスモレーダーとリンクさせれば、常に艦首からの広範囲を索敵できる事になります」

「背後の敵はどうするんだ？ 突入すれば、少なからず背中を向ける敵も出るだろ」

「いえ、問題ありません」

振り向いた泰平の問いかけに答えたのは、柑奈ではなく来島であった。

「最初の座標が分かれば、ある程度ですが軌道の予測はつきます。その上で前が鮮明に分かっているなら、離脱も……」

「……よし」

立ち上がり領いた近藤は大きく息を吸い込み、号令を口にする。

「索敵用意！ 総員、第一種戦闘配備、艦首回頭！」

「総員、第一種戦闘配備！ 繰り返す、総員、第一種戦闘配備！」

「艦首回頭、ヨーソロー！」

「技術科員へ通達、艦首観測装置とコスモレーダーのデータリンク用意。探知領域を戦闘予定圏内に設定し、熱源探知を含む全チャンネルを起動して別命あるまで待機」

「戦術科へ、艦載機を含めた各兵装はいつでも使えるようにしておけ。以上」

にわかには慌ただしくなる艦橋から見える外では、制動をかける艦首スラスターの炎が見える。

ガコン、と大きな音が響くと同時にエンジンのフライホイールの音が止み、代わりに重たく何かが回りはじめた。

上がる回転数に従って、互いに逆回転するフライホイールの狭間から徐々に光が漏れ出す。

「美佳ちゃん、観測結果は全部レーダーに出るけど、もし無理なら——」

「いえ、やりませう。私の仕事ですから」

「落ち着いてやればできる。自分を信じろ、美佳」

「うん、わかった、お兄」

2人の会話に微笑んだ柑奈はモニターに向き直り、キーボードを操作した。

レーダーは自艦の座標が中心より下に移動、表示範囲が広大になった特設の超望遠モードへと変わり、通常レーダーの観測範囲が半円で小さく表されていた。

「すごい、こんな広範囲……」

「観測開始」

艦長の号令とほぼ同時に、波動砲封印栓の隙間から緑の光が漏れ始める。

直後、それは放射状に広がり宇宙を照らすいくつかの線となってゆつくりと回転した。

「熱源多数、現時点で総数30……まだ増えていきます」

光が二回転すると、それは目を閉じるように小さく薄くなっていく。

「索敵終了。結果は？」

「観測領域に熱源、総数72」

そんなに、と動揺する艦橋クルーに対し、「でも」と柑奈が注意を促す。

「観測された72の熱源全てが敵艦という訳ではありません。詳しくは第二艦橋とドームに回していますが、機関が生きている残骸、核ができてはじめている天体、衝突した天体が放った熱、そして助けを求めているガミラス艦の熱源も含まれていますから」

「本来は索敵装置じゃないものを使ったから、全部無差別に出たんだな」

静けさを取り戻した宇宙を見つめて有賀が呟くと、柑奈は小さく頷いた。

「調査結果を待つて今後の動向を定める。一ノ瀬、念のためアカギに連絡しておいてくれ。全員作戦室へ」

中央作戦室

画面に映し出された配置図には、青、赤、緑の図形が浮かんでいた。

青は漂う小惑星や熱を持たない浮遊物、緑はガミラス艦の波長と合致したものの、そして赤は。

「未知の波長の熱源……これが敵艦か」

「観測された70の熱源のうち、約50が未知の熱源でした。死んだ艦もいくつかあるでしょうけど……」

「だが、俺たちはこの熱源全てを敵艦のものと仮定して作戦を立てる必要がある」

有賀と柑奈の言葉の後、縮小された図と武蔵の現在地が示された。

「本艦が取れる選択肢は大きく二つ。救難信号を無視してこの場を離れるか、危険を承知でガミラス艦の調査、救出を行うか」

言葉と共に歩みだした来島の声と共に武蔵を示す光点から矢印が伸びる。

「アカギに到達したところ、武蔵は早急にその場を離脱せよとの事でした」

一ノ瀬が報告すると、美佳は静かに目を伏せた。

「なんか……つめたいですね……」

「つめたい？」

「そうです、砲雷長。なんか、人として……つめたいなって……ただの感情論ですけど」
はつと我に返った美佳は、手を振りながら早口で「ああいや、えつと」と続ける。

「えつと……安全を考えたらそりや行かない方がいいんですけど……ですけど、なんと
いうか……一瞬、そんな事を思っちゃった自分がいて……」

美佳の肩を叩く柑奈を横目に見た有賀は、緑の光点を見つめていた。

「この艦は、いつ消息を絶ったんだ」

「分かりません。けれど、エンジンが止まっているとして、救難信号を出せるだけの予備電力が確保できるのは……」

「もって、3ヶ月」

一ノ瀬に続いた声に振り向くと、入口には水月が立っていた。

「生命維持装置が生きているなら、これはもつと短くなる。最短なら1週間、救難信号だけならユキカゼのように長く残る可能性もあります」

「間がありすぎる……生存者がいるのか分からないぞ……」

「懸命な戦術長ならそう言うと思うって、ひとまずの作戦は立ててあります」

不敵な笑みを浮かべた水月は、手にしたタブレットからモニターへとそれを映し出した。

船外

カタパルトにセットされたその機体のコクピットは黒く潰され、内部のセンサーが不気味に光る。

「こんなもの、本当に使えるのか？」

「使えるんだろ。この場所でするかは知らないけど」

そんな会話とともに内火艇格納庫から出てきた2人のクルーの手で、巨大なブース

ターユニットが運ばれていく。

機体前方から尾翼に引っかかる直前まで下げられたブースターは、上部のジョイントにしつかりと接続された。

翼の下のウエポンベイにも同様のブースターがつけられ、その上に追加タンクがつけられると、担当クルーは機体から離れた。

「機体セットアップ完了。発艦信号を放ち、以降オートパイロットによつて自律飛行します」

淡々とした柑奈の言葉に近藤が頷く。

モニターに『Take Off』の文字が表示されると同時に本体のエンジンが点火、通常より遅い速度でカタパルトから飛び立った。

武蔵の左舷を抜けて小惑星帯へと消えた機体は、随時送られてくる座標や機体のレーダーに反応した小惑星を避けながら突き進む軌道はとても無人機のものだとは思えない。

波動実験艦銀河の搭載機ブラックバードを基にしたこの機体だが、無人機の自動操艦AIの研究はこの2年間更に進められ、アステロイドベルトより更に濃密な、艦が通れないほどの密度でも航行できるようになった。

「目標地点まで、あと5分」

「あんなデカイもの背負ってよく飛べるな」

機体データを見返した有賀がつぶやく。

人が乗っている場合、それが使い慣れた機体であるほどその形が変わると扱いが難しくなっていく。

AIの場合、自機の追加装備を含めた全長や武装を予め入力する事で最適な操縦を可能とする。

「あと2分、映像出ます」

艦橋のモニターに映し出されたのは、回転しながら避けていく大破したデストリア級。

実際に避けているのは機体の方であるが、映像ではそう見えた。

その奥には艦尾が粉碎されたクリピテラや的確にコクピットを撃ち抜かれたツヴァルケなどが浮いている。

最奥のかすかな光を元に進む機体が小惑星を避ける。

弱々しく光る衝突防止灯、使用するために展開されていたと思われる反射衛星砲は大破しているが、それは生きていた。

各部に空いた被弾痕を舐めるように飛びながらスキャンをかける。

リアルタイムで表示されていく結果を祈るように見つめるクルー達の想いは、機体が

腹部の破口からスキヤンを掛けた時に帰結する。

「艦中央部に生体反応、数5!」

「よし、即座にその場を離れ本艦に帰投させよ」

船体を離れ再加速をかけた機体が帰投コースに乗った刹那、カメラが光に包まれた。

「攻撃……!」

光からカメラが回復した直後に映像は途切れ、モニターには操縦AIが危険を察知して離脱の用意を始めたことが表示されて信号が途絶える。

武蔵との通信を続けていると、それを辿り居場所を知られる可能性もある。これはそれを防ぐための対抗策、プログラムされた防衛装置の一環である。

宇宙でただ一機となった機体はその場で機体を反転、全てのブースターを一斉に噴射して急加速をかけた。

有人ではなし得ないその加速度に敵の放つ攻撃は置いていかれ、その場の残骸や小惑星を砕く。

ゼロはそのまま小惑星の密度が濃い場所へと入り込んだ。

機体のスラスターを細かく噴射して姿勢を整え、ブースターの噴射と逆噴射で加速と減速を繰り返す。

艦載機とは思えない速度で小惑星帯から飛び出したゼロは、武蔵への帰投コースに戻

るべく機首を向けてブースターとメインノズルを解き放った。

光の線となったそれを追うものはなく、やがて慣性航行となった機体は間もなく武蔵に係留された。

ブースターが取り外された機体は格納庫へと滑り込む。

「生存者がいると分かった今、迷うことはない。本艦は、ガミラス艦に接舷し生存者の救出を行う。全艦戦闘用意、航空隊発艦！」

「航空隊全機発艦、作戦中は本艦の直掩にあたれ！」

艦長の号令に続く有賀に従って、艦底から次々と機体が飛び出していく。

久しぶりの実戦に昂ぶっている様子だが、その操縦は極めて冷静であった。

「無人機はリーダー装備に換装急いで。コスモリーダーとのデータリンク用意」

柑奈の命令で、第1格納庫は慌ただしさを増す。

なによりも、尊い命を救うために。

この宙域で散っていった異国の同胞のために、武蔵は突き進む。

それが、助けを待つ5人にとってどれだけの望みとなっているのか、彼らはまだ知らない。

——第14話 「サルガッソの遭遇者」——

第五章 師旅編

第15話 「救出作戦」

「武蔵、第一戦速。これより救出作戦を開始する」

波動エンジンを点火させた武蔵は、先陣をきつた航空隊に続いて小惑星帯へと突入した。波動防壁にぶつかると天体が放つ光の中を進む。

「やっぱり武蔵には狭かったか……」

「先に向かったシーガルの救出部隊は問題なく進んでいるか」

厳しい表情で操艦する泰平とは対照的に、有賀は冷静であった。

「シーガルは直掩のファルコン3機と共に順調に進んでいます。今のところ攻撃は無いようです」

「わかった。索敵用の無人機を出す。小惑星帯に隠れつつ、武蔵の後方に」

開く扉からせり出てきた無人機の装備は、先ほどのブースターから変えられていた。

機体上部に付けられた二つのレドーム、ウエポンベイにはそれぞれ機首のレーダーを発展させたものが4つ増設され、長期飛行のための追加燃料タンクが付けられた。

カタパルトを飛び出した機体は上方へと逃れ、武蔵との距離を保ちながら飛行を始め

る。

武蔵のレーダー表示範囲が拡大し、武蔵本来の索敵範囲の前方には扇状の探査装置の観測範囲が、後方には無人機の索敵範囲がそれぞれ表示される。

「シーガル隊、当該艦へと到達。救出活動を開始しました」

淡々と告げる美佳の声を背に、有賀は砲雷長へと目を配った。

ゆっくりと左右に指向する砲身にぶつかって軌道が変わる小惑星が窓を抜ける。

「間もなく密集地帯を抜けて、ガミラス艦の座礁ポイントへと到達します」

「観測範囲内の熱源に動きなし」

「……おかしい……」

あまりの静寂。敵の潜む宙域に進入しているとは思えないそこに、有賀は思わず眩く。

やがて肉眼で緑の艦体が見え始める頃、漂っていたデストリア級が突如爆炎へと消えた。

次いで、艦橋内に青い光が満ちる。

それは攻撃を弾く防壁の光。

「攻撃、全方位！」

「なるほど……武蔵の目的を絞ってここから動けないようにしよって魂胆か」

全方位からの攻撃はしかし、波動防壁の跳弾がガミラス艦に当たらない射角で放たれていた。

間髪入れずに着弾した攻撃も同様、武蔵だけを狙っている。

「本艦だけ……?」

「なら、ここから離脱すれば——」

「接舷する。救出活動中のシーガルを見捨てるわけにはいかない。航空隊へ、本艦の死角となる角度の敵を補足し戦力を削げ」

来島の声を聞きつつも通信を行う有賀は、泰平と向き合って頷く。

「砲雷長、砲塔は全て右舷へ。索敵、右舷からの砲撃の位置をマークして砲雷長に報告。技師長、無人機を本艦右舷に向かわせて索敵強化。シーガルから帰還の信号があれば直接第三格納庫へ報告、機関長と航海長は——」

「緊急発進用意、だろ?」

有賀へと笑いかける泰平に唾然とする彼だったが、その顔はすぐに笑顔に変わった。

「ああ、そうだ」

ゆつくりとガミラス艦に近づくと武蔵の上下を抜けていくファルコン達を見送る。

刹那、闇の中にくつつもの光が瞬く。

「右舷から攻撃来ます!」

美佳の声の直後、青い光と轟音が響いた。

「波動防壁、避弾経始圧低下」

「出力をドーム周辺に集中、砲雷長！」

柑奈と有賀の声を受けた彼女は冷静にパネルを操作し、砲口が火を放つ。

小惑星もろとも陽電子に貫かれた艦艇はその場で爆散し、空間に9つ火球を作り出した。

「シーガルから通達、ガミラス軍人5名の救出完了。これより帰投する」

通信を読み上げた一ノ瀬に頷いた近藤は、通信機を手にとつて呼びかける。

「医務班は第三格納庫で待機せよ」

「艦体、ダメージ増加……このままだと危険です！」

小刻みな揺れを感じて向き直ると、敵にさらしている右舷から大量の黒煙が立ち上っていた。

「ヤツら、こつちの防壁が切れた時を狙って攻撃の頻度を上げやがったのか……応戦！」

黒煙の中に混じる白煙から抜け出した8本のミサイルが途中で割れ、中から解放された大量のミサイルが点火した。

小惑星と残骸を焼き払うような爆発に包まれる宇宙。

ガミラス艦越しにその光を受けたファルコンは連続でミサイルを放ち、左右に分かれ

たコスモタイガーは弾幕を抜けて機銃で艦橋を撃ち抜く。

「なんだこの船、コンゴウ型みたいな形してるぞ」

『なんか丸っこくてかわいいですね、隊長』

「敵のフネだぞ。そんなこと言っていないで一つでも沈めろ」

コクピットでそんなことを言いながらも、着実に艦体に穴を開けて飛び去るコスモファルコン。

しかし航空隊長の宗方は、その不自然な形状に違和感を覚えていた。

「射角が変えられない？」

宗方からの報告を受けた艦橋では、有賀がパネルに映された艦の画像を見上げていた。
た。

『ああ、空襲をほとんど考慮していない。しかも敵は確実に武蔵を包囲できる位置でしか狙っていないんだ』

「そもそも対艦戦特化で、火力で押し切るスタンスってことか」

いまだに続く断続的な攻撃に応戦を続ける武蔵は、自身を壁にしてシーガルの収容作業を急ぐ。

『対空射撃が来ないわけじゃねえが、こりやザルだ。単装しかないんじゃない、ガミラス艦や

ガトランの速射砲相手に戦ってきた俺たちには当たらんな』

「そうか。間もなく本艦は離脱行動に移る。航空隊は現作戦を続行せよ」

『おうよ』

通信が切れると同時に右舷に新たな光が灯る。

「第三格納庫から通達、シーガル収容完了とのことです」

「よし、機関長！」

突如としてエンジンから炎を噴き出した武蔵はガミラス艦から離れると右へ方向を変え、左右へと砲撃を加える。

「前方、小惑星の陰からミサイル12！」

「対空戦闘用意！」

両舷のシールドが開き、艦内に畳み込まれるとそれぞれに連装パルスレーザー砲が顔を出す。

前方に放たれる対空砲火に加えて2番砲塔からは三式弾、艦首の魚雷管からもミサイルを落とすべく6発の魚雷が放たれる。

「……このミサイル、軌道がおかしい……蛇行しながら接近してきます」

「進路予測ができない……既に魚雷は回避されました！」

美佳と来島の言葉通り、眼前では小惑星に着弾した魚雷が爆発していた。

三式弾も虚しく空を切り、目に見えるミサイルの軌道はこれまでの物とは一線を描くものである事が分かった。

「ミサイル迎撃不可能域まで、あと10秒!」

「着弾地点が分からないんじゃないや回避のしようがないぞ……どうする戦術長」

「……ッ」

「着弾!」

響く爆音、揺れに耐えるために身体に力が入る。

「くっそ……攻撃地点をマーク、撃ち落とせ!」

武蔵の攻撃オプションがそれぞれ違う標的を狙う。

それが放たれた時、その内側に光が現れた。

「この波長、ワープアウト反応! 義弥さん、これは物質転移装置です!」

「ガミラスの……!?」

左舷に当たるのは異次元から現れたミサイル。

「あのミサイルは物質転移装置でワープして来たとは限らない。だが一度来ればデータは取れる」

不敵な笑みを浮かべた近藤は、柑奈の方を見つめてデータを送った。

「これを元にワープアウト座標を突きとめる」

次いで砲雷長、戦術長へとデータを送信し、2人の背中を見つめる。

「変な弾道の弾が12発も来ればおおよその予測はできる。あと重要なのはレーダー……」

その言葉に美佳は俯く。

「お前たちを信じてる。俺の信じるお前たちがいるこの艦は絶対に沈まない」

小惑星の陰から武蔵の周囲を囲むように飛び去る艦載機の引いた尾を見送り、微笑みながら顔を上げる。

「第一戦速、本艦の全力をもって包囲を突破する！」

散開する機体の背後から飛ぶ陽電子は武蔵に肉薄せんとする艦を溶かし、貫き、爆炎で包んだ。

「両舷からミサイル接近、数20」

「弾道計算、迎撃開始」

不規則な軌道をとりに始めた敵弾に対して放たれた武蔵のミサイルは、的確に敵のミサイルを射抜く。

「ミサイル全弾撃墜！ 続いて陽電子砲来ます！」

艦全体の姿勢制御スラスターを全開にしてバレルロールを仕掛けながら別角度に構えた砲身から砲撃を与える。

ロールと共に仕掛けられた軌道変化によって敵の砲撃は全て艦体をかすめるに至らず、位置を晒した敵艦は宇宙に消えた。

回転を止めた武蔵は直後に魚雷を撃ち込み、ワープアウトしたミサイルをその場でデブリとして道を切り開く。

直後に展開された観測装置から放つ緑の光を煙幕の代わりとして前方の視界を奪い、コスモタイガーが観測された熱源を焼き払った。

戦闘による閃光が艦橋を満たす中、一ノ瀬はモニターの中に出た通知が目に入った。

「……………これは……………」

「艦尾に被弾、ダメージコントロール作動」

「弾幕、手を緩めるな！」

喧騒の中黙り込んだ彼は、振り向き近藤の方へと向かう。

「艦長」

倒せど襲い来る弾幕、不規則な弾道に突如現れるミサイル、そして前方に集中された火力を用いての波状攻撃。

いくつもの艦を塵に変えても、その数は減っているようには感じられない。

「もつと減ってくれてもいいのに！」

「敵も必死なんだ。数の利なんて巻き返せる力がこの船にはある。後一步だ」

「嘆く来島に告げる有賀へと、近藤の視線が向く。

「戦術長。今ここで、この場所を維持したまま10分間敵を釘付けにできるか」

「()で、ですか……」

進む武蔵に降りかかる砲火、揺れる艦体。閃光が止んだ闇の中を見つめた有賀は、火線の数と敵艦の総数を頭で反芻して振り返った。

「本艦の戦力で現在位置を維持したままでは不可——」

「可能です」

断言した柑奈は有賀を見て笑顔を見せる。

「大丈夫ですよ。理沙ちゃんなら分かってると思うけど、攻撃オプションはまだ残ってる。10分程度なら問題ありません」

「私も同様の意見です。ダメージは受けていますが十分戦えます」

柑奈に続いた来島の言葉に嘆息した有賀は、頭をかきながら「それじゃあ断れないじゃんか……」とつぶやく。

「……本艦の損傷は間違いなく拡大します。どの程度になるのかは分かりませんが、それでもいいのなら」

「構わない。ただ、10分後にワープができるようにだけは気をつけてくれ」

「……了解」

また難しい事を、と内心強く思ったがそれを押し殺した有賀は、息を吐いて臉をあげる。

「反転、艦首魚雷管発射用意。主砲一番二番に三式弾装填。対空警戒を厳とする」

波動エンジンを止めた武蔵が姿勢制御ノズルを開けて反転すると、そこから放たれた魚雷は扇状に広がりいくつもの火球を作り出した。

にわかには回転数を上げるフライホイールの音をかき消すように撃ち出された三式弾は途中で炸裂し、迫っていたミサイルを撃墜。

「マグネトロンプロローブ発射、艦体防御に回せ！」

両舷から撃ち出されたミサイルに内包されたプロローブが周囲の小惑星に突き刺さり、赤い光を放つ。

徐々に近づいてくるその合間を縫って撃ち出された実弾は着実に敵艦の装甲を貫き、武蔵の周辺を回る小惑星が敵の火線を弾く。

イズモ計画の遺産、ヤマトで初めて使われ、月面再生任務を受けた銀河まで引き継がれたマグネトロンプロローブは武蔵にも搭載されていた。性能そのものはヤマトのものと大差ないが、操る人物の技量によってその動きには差が出る。

無人艦を指揮してきた武蔵が操る小惑星は、艦尾をアステロイドシップにしつつも艦体を3本のリングが立体防御を行うという挙動を見せていた。

武蔵の射線からリングが逸れる一瞬を逃さない正確な射撃とアステロイドリングの多重防護は一種の要塞のようであった。

「岩盤減少率15%、パターン切り替えます」

「……攻撃に対して岩盤の減少率が低すぎませんか……？」

攻撃を指示する手を止めることなく来島が呟く。

アンドロメダと対峙したヤマトが使用した際のログでは、一撃での減少率は5%以上を記録していた。ただの小惑星であったヤマトのアステロイドリングは脆く、短時間の時間稼ぎにしかならなかった。

不完全形成のカラクルム級の破片を使った最終決戦の際ですら完璧な防御にはならなかった。

しかし今回は違った。

弾幕の濃さに対して記録にある減少率が低すぎるのである。

「小惑星の構成……多分、この小惑星帯の星にコスモナイトが多く含まれてるからだと
思う」

「つて事は、ここはヤツらにとって資源を採掘するポイントでもあったわけだな」

その間にも減少する岩盤からは、輝く物質が見え隠れしていた。

柑奈に答えた有賀は、続いて美佳へと振り向く。

「作戦時間はあと何分だ」

「あと2分、岩盤減少率は46%です」

「54%残つてりや十分だ。航空隊を喚び戻せ」

泰平と目を合わせて頷くと、次の瞬間強い横向きの慣性と共に艦が振り返り、岩盤がエンジンの付近に集まり始める。

「岩盤を壁にして推進力を底上げする。ワープ速度に加速する時間をこれで短縮する」

「でも形成中に岩盤が減らされたら効果は薄くなります」

「大丈夫、理沙ちゃん。まだ試験段階だけど……試す価値はある」

有賀と目を合わせた柑奈は、親指を立てて笑顔を向けた。

「波動防護弾装填、後方に向けて撃て！」

両舷のミサイル発射管から白煙と共に撃たれた弾は方向を変えて後方へと向かい、炸裂する。

それは武蔵に迫っていた実弾、光線砲のことごとくを防ぎきってみせた。

「やった成功！」

ガッツポーズをした柑奈のモニターには、艦後方に展開した円形の青い盾が映し出されていた。

「すごい……」

「作ってて良かった……これは波動防壁の応用、土星沖での重力子スプレッドの使い方から着想を得てずつと作ってたの」

「波動防壁ですか？」

「そうだよ美佳ちゃん。あの弾頭には防壁を短い期間出せる程度の波動エネルギーと、防壁を出すシステムが積んである。もつとも、そのシステムが全く上手くいかなかったんだけど」

「試験で使えて実戦で使えない武器より、いざって時使える盾の方がありがたい」

振り返った有賀もまた、彼女に親指を立てる。

「作戦時間まであと1分……ん？」

笑顔でモニターを見返した美佳の表情が一転する。

「どうした？」

「お兄……前方に、何か、大きなエネルギーが……」

「爆縮反応ですね。この波長は……波動砲!?!」

「作戦通りだ。ワープする!」

点火されたエンジンの炎はすぐさま蒼く変わり、岩盤の表面を焼きながら加速する。

二本の光が合わさり、光の中から雨のようにそれは降り注ぐ。

「拡散波動砲、目標のターゲットを一掃した模様です」

「武蔵の反応、検知できません」

「まさか本当に……?」

にわかに慌ただしくなる艦橋は、眼前に現れた光によって静寂に戻った。

「やはり生きていたか」

微笑む冴島の目には、傷つきながらも光信号を放つ艦の姿があった。

その姿は以前より強く、たくましく映っているのだろう。

『武蔵よりアカギへ。援護感謝する、今後の方針を定めるため、作戦責任者の本艦への乗艦を求む』

——第15話 「救出作戦」——

第16話 「選択」

「バカなんですか、あなた方」

武蔵の応接室に集まったアカギのクルー、蔵中瑞穂は開口一番そう言い、有賀を睨む。

「戦術長は分かっていたはずですよ？ こんな無謀な作戦を——」

「武蔵単艦で十分遂行可能な作戦でした」

「あなたには聞いていないんですよ、砲雷長」

互いに睨み合う2人を制した艦長達はほぼ同時に嘆息する。

「うちの蔵中が申し訳ありません。彼女はどうかやら、あなた方の行動に納得できないようです」

「アカギから通達があつた時点で、それは承知していました。それでも我々は、あの場にした生存者を見過ごす事はできませんでした」

淡々と言葉を告げる近藤から目をそらす蔵中。

「それでもわたし……納得できません」

絞り出すような声に見つめた有賀は、感情を表に出さないように声を出す。

「無謀な作戦を決行したことですか」

「あれが作戦だなんて認めたくもない。5人を救うために、一体何人が傷を負ってどれだけの犠牲が出るのか分かっていての判断ですか。助けた後、その5人はどうする気だったんですか。後先考えない行動は勇猛ではなく無謀です」

「外部のあなたには言われたくありません。偵察機を出して生存を確認しておいて、それでいて見捨てるなんて人道面に反します。機械的な危機判断だけで人の命を左右するのは間違っています」

珍しく食い下がる来島の瞳はいつになく鋭く、何かを抱えているようであった。

「お言葉ですが、そういう直情的な考えで危機に陥ったのはヤマトの記録でも明らかです。そんな事をしていればいつか身を滅ぼします」

蔵中の指摘はもつともであり、以前は来島も同じ考えだった。

彼女自身、まだ心のどこかでそんな正論に納得しかかっている。

「それでも、人命救助が最優先です」

視線を上げ、強く言い放った彼女は立ち上がると、そのまま部屋を後にした。

有賀のアイコンタクトを受けた柑奈が彼女を追うように会議室を後にしようとする
と、扉の横で医務科の制服に身を包んだ少女が立っていた。

「あなた、何か報告？」

「あつ、すみません……だいたい前からいたんですけど、入るタイミングなくて……」

「そっか。今なら入っても大丈夫だよ」

「ありがとうございます。あ、砲雷長なら、あちらに」

お互いに笑顔で告げると、報告のための端末を胸に抱きしめて彼女は扉を開けた。

「失礼します」

「奈波？」

彼女にいち早く気づいた美佳が声を出すと、彼女は少し驚いた顔で美佳を見る。

が、すぐにやる事を思い出すと早歩きで艦長の元へ向かった。

「保護した5名についてですが、大きな傷もなく順調に回復しています」

「そうか、ありがとうございます」

「それと……」

艦長から返された端末を受け取った彼女は蔵中の方を見ると、柔らかい笑みと共に口を開く。

「今回の戦闘では軽傷6名、死者はいませんでした。では、失礼します」

閉められた扉に背中をもたれた奈波は、大きく息を吐き出す。

「……心臓が飛び出るかと思ったあ……」

そんな独り言を呟きながら、彼女はゆっくりと医務室へと歩き出した。

一方、会議室の中ではしばしの沈黙の後、冴島がそれを断ち切る。

「これからの武蔵の航路予定はどうなっていますか？」

人気のない通路。被弾しているために節電モードになっている艦内では、そういう道は薄く照らされているだけであった。

誰もいないそこから、硬いものを殴る音が聞こえてきた。

「……………」

角から覗き込んでみると、手から血が出るほどの勢いで壁に拳を叩きつける来島の姿があった。

「……………好き勝手言ってるんじゃないっての！」

「何をしているの？」

「っ!?？」

驚いた顔を見せた直後、来島はすぐに視線を落とす。

「相当怒ってるんだね」

「これは……………違います……………」

迫ってくる柑奈から避けるように後ずさる。

「手、見せてみて」

「……………別に、何もありません」

「ウソつかないの」

背中が隔壁につく。

後ろに隠した手は柑奈に掴まれ、擦りむけてかすかに血が滲む指が挙げられた。

「なんでもないですから……ほつといってください」

「それはできないかなあ」

身動きの取れない彼女に笑いかけると、柑奈は優しく手をとる。

「こんなになってるのに、放っておくなんてできるわけないでしょう？」

「だから、ほつといってくださいってば……」

「でも逃げない」

「それは……逃げたところで、居場所無いですし……」

「何かあったんだよね。よかったら聞かせてくれる？」

その表情にほだされ、諦めたように嘆息した来島は静かに彼女の手を握り返した。

「……わかりました。でも、大したことはないですよ？」

今まで彼女がしなかった柔らかい笑みに思わず表情が緩む。

2205年4月

「……………これでよし」

「理沙、ご飯できたわよ？ 下りてらっしゃい」

「わかった、お母さん」

扉の外から聞こえた母の声に答え、階段を降りる。

父は政府省庁で、母は医者として働いている彼女にとって、今日は久しぶりの家族団欒。

ガトランティス戦役以降は父の仕事も増えていたが、それがようやく落ち着いたのだ
そう。

「明日からは長くなりそうだ」

父の言葉に目を向けると、母は「そう」と答える。

「じゃあしばらくは2人だけかしら」

「……私も、明日から任務」

目をそらしながら小さく答えると、心なしか視線が険しくなった。

「あなた、軍はやめなさいって——」

「あーそう。でも決めたの！」

少し苛立った口ぶりで返した彼女は、少し気持ちを落ち着けて続ける。

「私、もう決めたから」

「次は長いのか」

口を開いた父に目を配るが、父は彼女を見てはいない。

「2年の予定。マゼランのもつと奥を、武蔵だけで」

「そんな任務、行かなくていいんじゃない？ あなたはもつと」

「安全な場所なんてない。地球にいたって生きにくいだけ」

「でもね理沙、あなたには色々声もかかっているでしょう？」

「全部蹴った。居場所を決める権利くらいあるでしょ」

「あなたには少しでも安全な場所にしてほしいの。だから地球で……」

「私を掌握できる場所に置いておきたいだけ。それは私の為なんかじゃないことくらい分かっている。私もバカじゃないんだから、いつまでも騙せると思わないで」

席を立ち足早に階段を上る彼女は、部屋の扉を閉めると机の上の写真に目をやる。

2199年、冥王星。

彼女の兄は、希望の名を知る事なく命を散らした。

イスカンダルからの使者も、人類の希望を背負って旅立ったヤマトの名も知らず。

今の地球を、今の彼女を彼が見ればなんと言っただろう。

「ごめん、お兄ちゃん。私じゃダメなのかな」

写真に語りかけて深いため息をつく。

兄と共に地球のために戦いたかった。けれどそれは叶わず、今度は兄の代わりに家族

を守ろうとした。

しかし、それもまたその家族に拒絶されてしまった。

「……じゃあ、何しろって言うの……」

——翌朝、彼女は何も言わないまま家を出た。

「だから、居場所はここしかない、って言ってました」

有賀の部屋でこの顛末を話した柑奈は、腰掛けたベッドに指を沈めて肩の力を抜く。

「それで、そちらはどうだったんですか？」

「ああ、またしばらく糾弾されたよ」

「頑なですね……」

ため息をついた後、有賀は続ける。

「でも情報も貰った。俺たちを襲ったのは銀河系で覇権を広げているボラー連邦だ」

「銀河系？ どうして銀河系で覇権を広げてる国がこんな天の川とマゼランの狭間で

……」

「多分、地球が邪魔なんだよ。地球を侵略するためには同盟国のガミラスも邪魔だ。だからその戦力を削ぐために待ち伏せを」

「回りくどい事しますね……」

そうだな、と相槌を打ちながら立ち上がった有賀は慣れた手つきでコーヒーを淹れて柑奈に手渡した。

「ありがとうございます……ん、なんか今日は私好みの味……」

「やつと柑奈の好みに行き着けたか。長かったな」

「それは……えつと……」

「いつも部屋に来てくれるからな。柑奈が好きな味のものを出したいだろ」

「はあ……その……」

きよとんとした顔で小首を傾げる彼女に、有賀は笑いながら返す。

「大切な人の好みには合わせたいかなって思ってたな」

「……は、はい……えつ!?」

ビクツと体を震わせる柑奈。

「そんなにびつくりするような事は言っていないと思うけど……これからもずっとこんな感じでいられたらって思う」

「えつと、あの……その……それは……」

「この前の、返事のつもり……なんだけど」

ちらりと彼女を見ると、顔を赤くしたまま固まっていた。

次の瞬間、バツと立ち上がり居住まいを正して大きく息を吐いた彼女は、少しだけ落ち着いた表情で彼を見つめ返した。

「……どうか、よろしくお願いします」

カツプを置いて有賀に近づいた柑奈は、彼の髪を撫でながら微笑む。

「さっきの返答だと、プロポーズみたいですよ?」

「柑奈がいいなら、俺は構わないけどな」

同刻／艦長室

帽子を取った近藤とテーブル越しに向かい合った一ノ瀬の視線は厳しかった。

「なぜ言わなかったんですか」

「アカギのクルーも口にしなかったことをこちらから言うこともあるまい」

極めて落ち着いた口調の近藤に対して、一ノ瀬は苛立ちを隠せないようである。

「本艦に送られてきた通達の内容は、5分以内に本艦から応答のない場合は撃沈されたものとみなし波動砲をもって10分後に該当宙域の敵および障害物を掃討するというものでした」

「彼らなら撃つと確信していたよ。ただの脅しではないとね」

「アカギのクルーと、この武蔵のクルー双方を騙すような……」

「敵を欺くならまず味方からって言う言葉を聞いたことはないか？」

「ええ、それは聞いたことありますが……」

「ではそういうことだ。 balan までではアカギと同行しつつ修理にあたり、その後は赤い石に従って旅を続ける方針は変わらないし、この件をわざわざクルーに開示する必要もない。まあ、箝口令とは言わないがな」

快活に笑う彼の姿に言葉をなくした一ノ瀬は、前に出されたカップに口をつけた。

先程のような鋭い視線は消え去り、落ち着いた雰囲気になった一ノ瀬の名を呼ぶ。

「すまないな一ノ瀬。負担をかける」

「いえ。……艦長や戦術長ほどじゃありません」

はにかむ彼に笑いかけ、近藤は外を映すモニターに目を移す。

そこには純白の艦の姿が鮮明に見えていた。

アカギ艦橋

「手負いの艦と共に balan までなんてよく受けたものですね」

脚を組んで振り向いた蔵中の声は相変わらず若干の怒りを孕んでいた。

「ボラー連邦の追撃は考慮には——」

「もちろん入れたよ。でも彼らの追撃は無いと考えた。理由は銀河系にできた新たな国

家の存在だ。その国家は地球の勢力圏を避けるように、しかしボラー連邦を遮るように覇権を広げている。ならば目下の敵は地球でもガミラスでもなくその国家だからな」

モニターを点灯させた冴島は帽子をかぶり窓の外に映る星を見つめた。

「さあ行くこうか。武蔵と共に」

アカギと武蔵のメインエンジンが点火し、速度を上げる。

バラン星へと方向を変えた2隻はゆっくりと星の海を進む。身体の傷を癒しながら、救った命を故郷に帰すために。

暗くなった武蔵のドームでは、赤い石の表面を文字列が流れていくのであった。

——第16話「選択」——

第17話 「弔いの花」

基地の光を背に、アカギとガミラス艦に別れを告げた武蔵は修理したての艦体ですぐに数光年を飛び越える。

「エンジンの調子は良好だな」

「誰かさんの指揮のせいでエンジン丸ごとレストアしなきゃいけなくなつたおかげだ」
「それは謝ればいいのか……喜べばいいのか……」

泰平の言葉に微妙な顔を浮かべる有賀。

その視線の端に、艦橋を後にする柵橋の姿が見えた。

「……最近、彼女は暗い顔で艦橋を出る事が多い。」

「なんかあつたのかな」

「さあ？」

首を傾げた泰平ではなく、柵橋が出て行つた扉を見続ける有賀であつた。

展望室

「……はあ……はあ……はあ……」

手すりを掴んだままうずくまる柵橋の呼吸は荒く、頭皮に爪を立てて身体を強張らせていた。

「なんで……なんで今更、こんな……ことを……」

「柵橋さん、大丈夫ですか？」

背後から聞こえた声に振り向くと、柵橋の身体から力が抜けた。

「どうしたんですか？」

「いえ……なんでもありません、佐伯さん」

「なんでもないとって事はないんじゃないですか？」

「大丈夫です。ちよつと昔の事を思い出しただけですから」

引き止めようとする柑奈にそんな間も許さず、柵橋は足早に去っていった。

ずつと、頭の中を覗かれているようだ。

——気味が悪い。

西暦2193年／火星宙域

砲火の飛び交う中を、赤と黄の派手な塗装の駆逐艦が掻い潜る。

肉薄した緑の艦の横腹を魚雷で貫いたそれは急上昇をかけてその場を後続の赤い戦

艦に明け渡す。

遙か遠くに輝く青い星を守るために集まった勇姿は徐々にその数を減らし、様々な国

の言語で聞こえていた通信もいつしか英語と日本語が増えていった。

戦況は押されている。それでも一方的に蹂躪されているわけではない。

——まだ戦えている。

その想いだけが彼らの士気を支える。

残骸と岩石が漂う戦場を駆ける艦は徐々にガミラスの防衛線を押し上げていた。

「よし、離脱して後続に託すぞ。今度は下だ！」

威勢のいい声とともに急激に軌道を変えた磯風型は大きな楕円を描くように再び離脱していく。

次いで上昇機動をかけた時に見えたのは、艦首から陽電子砲を放つ主力艦隊の姿。

「実弾か陽電子砲じゃないと敵の装甲を貫けないなんて……」

「人間は所詮太陽系から出たことのない井の中の蛙だったって事だ」

棚橋に答えた艦長は、それでも冷静に指示を出してガミラス艦隊へと突入していく。

弾幕を縫って、艦尾の翼が消し飛ばうと駆逐艦はさながら戦闘機のように一撃離脱を繰り返す。

「あの図体ならこの速度には追いつけないみたいだな」

「わざわざ追いかける必要がない、と見られてる可能性もありますけど」

そんな会話とともに急旋回をかけた艦は本隊を見下ろした後でガミラス艦隊の背後

からさらなる戦果を狙う。

「ヤツらのケツに火つけてやろうぜ！」

「若い女の子の前でそんな事言わないでくださいよ艦長」

軽口を言いながらも的確にエンジンを狙う。

バレルロールで迎撃を回避した駆逐艦は、立ちこめる黒煙を煙幕の代わりにして即座にそこを離脱する。

——が。

「背後に高速艇……クリピテラ級！」

「まずいな……振り切れるか？」

「結論だけ言います。無理です」

上部の光線砲が消し飛び、艦橋に火花が散る。

「そうか」

妙に冷静な艦長は柵橋の手を掴むと、強引に艦橋から出した。

「か、艦長……？」

「いいか、どんな事をしても生き残れ。それだけだ」

「艦長！」

扉が閉じた刹那、強い慣性で壁に身体が叩きつけられる。

次に目が覚めた時には、闇と静寂が待っていた。

「いったた……」

片腕を押さえながらも、彼女は冷静であった。

——電気が消えてる……酸素も多分多くない。つて事は……船外服が必要……。

あたりを見回して船外服を見つけた彼女は手早くそれを着ると、非常電源を入れる。

いくつかの点滅を経て赤く照らされた通路。

艦橋へと続く扉を開けると、背後の紙や破片、血痕の一切が外に向かつて放り出される。

「……………なに……………これ……………」

そこにあつたのは、全損した窓から広がる無限の闇。

人一人の姿なく、弱々しく光るモニターだけが見える。

窓には溶けた跡、しかし機材に傷はなく……。

「みんな……………どこに……………」

そんな、分かりきつた疑問だけが浮かぶ。

頭を振つてその問いを振りほどくと、彼女はすぐに航海士席へと向かった。

「エンジン……………正常。通信機はダメ……………スラスターは下の一つしか動かない。でも下の

一つなら大丈夫。あとは……………ん？」

パネルの隙間から覗く白いもの。

思わず手に取ると、それはこのフネに乗るときに撮った集合写真であった。

「……」

何気なく裏返す。

——何があっても、生きる。

「……命令違反は、重罪ですから」

エンジンを噴かした駆逐艦は残り少ないスラスタ―を使って向きを変えると、海を持つ火星に向かって加速した。

武蔵／観測ドーム

「……ん？」

にわかに輝きを増す赤い石。

振り返った水月は、その向こうにある画面へと視線を向ける。

「外部アクセス……？ 一体どこから……」

パネルを操作してアクセス元を探すが、何度やっても結果は同じであった。

武蔵を中心に表される空間が示される。その光点は——

「……艦内から、外部アクセス……何かのエラー？」

下士官部屋

疲れ切った様子で戻ってきた奈波の姿を見た美佳は2段ベッド上段から降りる。

「お疲れ」

「うん……ありがと」

「最近忙しそうだね」

「またカウンセリングが増えててね。入れ替わり立ち替わりいろんな人が……」

「そっか」

頷きながら袋を開けたチョコレートを差し出す。

「食べる？」

「食べる」

力の抜けた声で答えた彼女にそれを渡すと、美佳はその隣に座った。

「今度はなんでだろう。リラクゼーションルームはちゃんと……」

「なんか、昔の事を思い出すんだって。一回来た人は同じ症状で来ないから、多分入れ替わりで。みんな、頭の中を覗き込まれてるみたいで気持ち悪いって……」

「頭の中……」

「気象長の棚橋さんも来たし、一応艦長には報告したけど……美佳ちゃんも何かあった

ら教えてね。戦術長の事でも、技師長の事でも」

「……うん、分かった。約束するよ」

奈波に笑顔で答えた美佳は、まるで小動物のように板チョコを頬張る彼女を尻目に自分のベッドに戻った。

「おやすみ、奈波」

「うん。おやすみなさい」

士官部屋

「外部からハッキング?」

「そうみたいなんです」

マグカップを手に、有賀と柑奈はいつものように彼の部屋にいた。

水月から聞いた事を伝えると、彼は考え事をするように視線を落とす。

「ハッキングか……」

「けれど、アクセスされたのは異星文明との接触用に入っている歴史ブロックみたいで」

「……それってどういう……」

「セキュリティの一番弱いところなんです。記録は現在の戦力がバレないようにガミラス戦役の直前までですが……スキャンングされているのは1940年代、なんですよね」

……」

「なんでそんな300年近く前の……武蔵のデータは？」

「全く手付かずで……」

——何が目的なんだ……？

有賀は更に頭を捻らせる。

武蔵への侵略だとするのなら、ヤマトの航海で古代進と森雪が記録したように艦そのものを狙うはず。

しかし今のところ武蔵のシステムにエラーはなく、狙われたのはあくまで地球の歴史に関する部分だけ。

——と、彼はふと思いつく。

「そういえば、艦内で増えている昔の事がフラッシュバックする症状についての原因は分かったのか？」

「それもまだですね……先生はきつとストレスだろうって。ここ最近はずっと星に停泊してませんし……というか銀河間空間で星ありませんし」

「次の星まで一週間……何か対策を考えないと……」

「そうですね……」

有賀に頷いた柑奈は、ふとカレンダーを見て何かを思い出したように「あつ」と声を

あげた。

「義弥さん、私、ちよつとやる事があるので今はこれで失礼しますね」

「わかった。また後で」

武蔵／展望室

窓から宇宙を見つめていた彼女は、窓に映る自分の顔から目をそらす。

一体、どうして生きているのか。

何度めか知らないそんな問いを投げかけながら、写真を見つめた。

何故そんなことを思い出したのかは分からないが、彼女にとって彼らが大切な存在だったのは言うまでもない。

「柵橋さん」

その声に振り向くと、船務科を示す艦内服に身を包んだ少女がいた。

「有賀さん……」

「浮かない顔してますね」

「そんな事は……多分、ないわ」

咄嗟に手で隠した写真を僅かに視界の端に捉え、美佳は彼女の隣に並ぶ。

「今日が、命日でしたか」

「……………」

「聞きました、奈波から」

短くそれだけを言う美佳に「そう」とだけ返した柵橋は、諦めたように口を開いた。

「これまで一度も思い出したことなんてないのに、どうしてかしら」

「大切な人だったからじゃないですか？　言い逃れのしようがないくらい、柵橋さんの

中で深く残るほどに」

「……………確かに」

微かに笑顔を浮かべた直後、真空に浮かぶそれを見つけて彼女は目を見開く。

「柵橋さん？　何か……………あつ」

それにつられて窓の外を見ると、窓のすぐそばを花束が浮いていた。

「吊いの花、ですかね」

「……………あの戦いで誰かをなくしたのは、みんなそうなもの」

微笑んで踵を返した柵橋は、小さな花瓶に植えられた花を撫でる。

「その分、私達は生きていかないと。その人たちのためにも」

「……………はい」

柵橋が出て行った扉を見つめていた美佳は、しばらく経ってから再び窓の外に目を移

す。

「……………見ててくれるかな。＼お兄ちゃん＼」

船外服を着たまま艦首で祈りを捧げていた柑奈は、ゆっくり目を開けてフェアリーダーの穴から宇宙を見ていた。

「私、このフネで大事な人に出会ったよ。だから……………安心してね」

背中を押し、そして帰ってこなかった親友を思つて彼女はわずかに肩を震わせる。

「……………私がここで泣いてちや安心できないか」

ほんのり涙で滲む星空に背を向けて、武蔵を見つめた。

そして深呼吸とともに、胸元で拳を握る。

「……………大丈夫。私、このフネでなら……………」

艦橋に向かつて歩き出したその背中へ、心なしか強く見えていた。

——今は造花だけど、来年は地球で、本物の花を……………。

あかりの落とされたドームからは、まばらに付けられたパネルの光だけが浮き上がる。
る。

——無人の観測ドーム最上階でにわかには輝きを増す赤い石。その表面に流れる文字列には、誰も気づかぬまま。

— 第17話 「吊いの花」 —

第18話 「過去の痛み」

西暦2203年、夏。

放課後の教室でぼんやりと宇宙へ行く艦を見つめている少女がいた。

仲のいい人同士でグループとなつて語らう女子生徒の中でただ一人誰とも話さず、ただ青空に不釣り合いな黒い艦を。

「この近くに新しくカフェできたんだって！」

「えーじゃあ行つてみる？」

「いいね、行つてみよう！」

——今は一応、戦時なんだけど。

そんなことを思いながらも口には出さない。

3年前までは皆辛い生活を強いられていたのだ。せめて戦争が遠く感じられる時は、そんな事を考える事もない。

「あたし、軍人つて嫌いなんだよね。だつてただの人殺しでしょ？」

不意に聞こえた声に一瞬だけ目を向ける。

しかし、それもすぐにやめて再び空に目を移した。

中にはああいう人もいるだろう。理解はできないが、納得はできる。そういう人がいてもいいとは思う。ただ――。

「おい」

――自分に絡んでこなければ、の話だけれど。

「……なに？」

机を軽く蹴った張本人を見上げる。

一応彼女のクラスメイトであり、はじめからずっと軍人嫌いを主張していた。

その風貌は軽くギャルを思わせるが、彼女の金髪は地毛だという。肌はほどよく日焼けして健康そのもの。

気づけば教室には彼女と2人だけが残されていた。

「さっきまで話してた友達はどうしたの？」

「アンタと話したかったから帰したの。何か？」

「いいや。それで？」

「用事ってほどじゃないの。ただ聞きたくて」

彼女が指差したのは、地底から宇宙へ上がっていく宇宙戦艦。

「アレは、なんなの」

「戦艦でしょ？ 今は戦時なの。分かるよね」

「アンタ、家族軍人なんでしょう」

「そう。あなた軍人嫌いなんだよね。なら話しかけない方がいいと思うよ、お互いのために」

鞆に手をかけた刹那、それは蹴り飛ばされて背後へと滑る。

「アンタのそういう態度、ずっと嫌いだった」

「……………だから？」

「人殺しして稼いだ金で飯食ってるヤツって、アンタみたいのばっかなの」

「さあね。私以外は知らない。わざわざ喧嘩売りにきただけなら、私は帰るよ」

「まだ話は終わってないっつの」

胸倉を掴まれても少女はあくまで冷静だった。

「もう話すことはないよ。あなたとは合わないからこれ以上話さない方がお互いのため」

「……………そ。じゃあ……………これだけっ！」

不意に飛んできた平手の勢いそのままに倒れこむ少女を、ただ蔑むように見つめる。

「そのなんでも他人事みたいな態度が大嫌い。……………軍人だっというアンタの兄さんも程度が知れるわね」

「……………っ！」

言い放ち立ち去ろうとする彼女だったが、次の瞬間には床に倒されていた。
「つた……」

ヒリヒリと痛む頬を押さえて頭をあげると、先程まで冷めた目で見ていた少女の瞳にははつきりと怒りの色が浮かんでいるのが見えた。

「私の事は好きに言つて構わない。だけど、お兄の事だけは許さない」

「……人殺しのためにそんな必死になつて……」

「うるさい！ あなたに何が分かるの!?」

馬乗りになろうとする彼女と組み合い、互いに睨み合う。

「わかんないけど、アンタにだつてあたしの気持ちは！」

「わかるかそんなん！」

夕日に照らされた教室で、彼女たちは下校中の他の生徒に止められるまでひたすらに殴り合い、白い制服には微かに血が滲んでいた。

その数日後、喧嘩をふっかけてきた生徒はガミラス戦役時に父親が、満足な食事が家族へ渡されない事に端を発したクーデターに参加し、当時その鎮圧にあつていた騎兵隊に射殺された事を知る。

同じ頃、相手の生徒にも少女は遊星爆弾で両親を亡くした上に長男をもガミラスの攻撃で亡くした事が伝えられた。

何度も彼女は少女と話す機会を探っていたようだったが、兄を侮辱された事を許す気にはならずその後は一度も口をきいていない。

何より、これが兄に知れば彼が心配するだろうと考えた少女は、教師にこの事を内密にしてほしいと頭を下げて回り、結果的に両者1週間の停学が定められたという。

西暦2206年／武蔵艦内

「——まあ、こんな事があつて……」

「そつか……美佳ちゃんつて、喧嘩っ早いタイプ？」

「いや、違う、違うよ!!? あの時、こう、カッとなつて……」

下士官部屋で奈波にこの顛末を語った美佳は、「そういえば」と付け加えた。

「あの子のお父さんが殺された時、殺した部隊の隊長さんが一度だけ来たらしいんだけど」

「そうだったんだ……会つたのかな」

「会つたんだつて。ひたすら謝つてたとか聞いたよ、先生に。でもその隊長もガトランティスとの戦いで戦死したつて」

「戦死……」

「まあ知らないけどさ。でもなんか思い出しちゃつて」

人に頭の中を覗かれる感覚、そう言われればそうなのかもしれない。そう形容できるのかは彼女自身も分からない。

「軍に入ろうと思つた理由はそれで、まあ一種の復讐みたいな。お兄には、お兄が心配だからなーんて言つたけどさ」

「復讐って……」

苦笑いした奈波はすぐに視線を落とす。

「やっぱり順番なのかな」

「そう言う奈波はどうなの？」

「……なんにも。わたしは何も失くしてないからかな……」

「どうだろう。それなら私、こんなじゃなくてお父さんとかお母さんとか、お兄ちゃん
の記憶が良かったなあ」

そう言つてベッドに倒れこむ美佳を、奈波は怪訝そうな顔で見る。

「お兄ちゃん？ 戦術長じゃなくて？」

「お兄とは違うよ。お兄より頼れて——」

「——俺よりも、優しかった」

その言葉を聞いた柑奈は、薄暗い部屋の中で彼に顔を近づけて笑いかける。

「義哉さんも、十分優しいと思いますけどね」

「ただ優しいんじゃないかって、堂々としてたんだ。憧れだった」

天井を仰ぐ彼の顔は、これまでに見たことのないような、寂しさを感じる表情をしていた。

「義哉さんは、お兄さんの記憶を……」

「ああ。気味は悪いけど、思い出せるなら悪い気はしないよ」

「それは良かったです。私は……」

「……辛いなら、言わなくても」

「いえ……義哉さんには、言わないと……ずっと、思ってたんです」

立ち上がり、壁のショーケースの中に入れられた武蔵の模型を見つめる。

「前にも言いましたね、武蔵には元々波動砲があっただって」

「ああ。事故で……」

「はい。あの事故で、25名が亡くなりました」

壁にもたれかかった柑奈は、俯いて口をつぐむ。

ショーケースの灯りに照らされたその横顔は少し、痛々しく見えた。

「……私の、せいで……」

5年前

地球、ヤマトが安置された海底でリバース・シンドロームが発覚した頃の事である。太陽系、火星と木星の狭間には惑星一つを形成できる密度の小惑星のかたまりが浮いている。

「間もなく実験ポイントに到着します」

ガミラス戦役後、はじめて宇宙へ飛び立ったのはヤマトと同じ艦体を備えたフネ。冥王星基地を叩き、ヘリオポーズを超えたヤマトの旅程は誰も知らなかった。

そのため地球ではもしもヤマトが帰還しなかった時のために同型艦の設計が進められていた。それは資材不足によって実現しなかったが、復興後にこうしてその成果は結実する事になる。

「破碎対象に軸線乗せ、波動砲発射用意」

まだヤマトの戦線復帰が決まる前であったが、武蔵はあらかじめヤマトの改装計画と同じ艦体形状で建造された。

漆黒の宇宙に瞬いた光の筋は数キロの小惑星とその一帯の小惑星を消し飛ばす。

「波動砲、予定通り目標を破碎。木星でのヤマトの記録通り、影響範囲はかなり広がっています」

「わかった。明日は発展型波動砲の試験を行う。今日は各員休息すること、以上だ」

艦橋から出る試験長の背中を見つめた柑奈は、続々と出て行くメンバーに混ざらずにモニターに向かった。

「出ないの？」

「まだやることがあるから」

背後から話しかけた同い年ほどの少女を見ずに答えると、彼女はひたすらに計算式を組み立てる。

「……そう……」

そんな柑奈を少し冷ややかな目で見下ろした少女——水月は、すぐにその場を後にした。

彼女達が言葉を交わしたのはこの時が初めてであった。

「……何をそんな必死になって……」

翌日。

「試験長、発展型波動砲はあまりに危険です。余剰エネルギーの放出先のない本艦では、2発の波動砲を連射するのは間違いなく自殺行為です」

試験開始2時間前。

席に着いた試験長に食ってかかる柑奈は印刷した紙を机上に叩きつける。

「この、射線上に波動砲を拡散させる発展型波動砲の射出方法は乱雑すぎます。スプリッターで流れを割るか、二門の砲口で同時に撃つか……スパーチャージャーで間違いないく逆流しないようストッパーをかけて連射するか。どれかをしないと、現時点では……」

「それは仮説だ」

「……っ！」

「その仮説が本当なのか、証明するのが我々の使命だ」

「それで、この艦が消え去ってもですか。何人が死ぬと思つて……！」

「試験は予定通り行う。……その資料は君が持つていてくれ」

——その後のこと。

歯をくいしばる柑奈を横目に、水月達は試験の用意を続けていた。

「波動砲、エネルギー充填率規定値へ。充填率、速射可能最低ラインとなる170%です」

「発射まで十秒、対ショック、対閃光防衛」

カウンタダウンと同時に引き金が引かれ、突出ボルトが波動エネルギーを撃ち出させる。即座に撃発位置に戻った突出ボルトは再び前にせり出て2発目の波動砲を放った。

さながら二頭の龍のように絡まり合うそれが触れた刹那、眩い光から放射状に無数の光線が小惑星帯へと突き刺さる。

「波動砲、予定ポイントで炸裂。拡散成功です」

直後、警報とともに艦体が揺れた。

「なんだ!?」

「これは……薬室内で圧力が規定限界点を超えます！ このままだと……」

「だから言わんこつちやない……!」

「あつ、佐伯さん!?」

席を立った柑奈に呼びかけた水月の言葉を無視して主幹エレベーターに飛び乗った彼女は、即座に水月を指差す。

「濱内さん、逆流があつたらすぐに薬室を隔離して！ 絶対に!」

エレベーターを降りた柑奈は扉が開ききるのを待たずに走り出す。

薬室の入り口につくと、そこは灼熱と化していた。

暴発したエネルギーは高熱となって薬室に満ち、排気管やエネルギー伝導ケーブルを伝ってエンジンに悪影響を及ぼすのは時間の問題。

「私の計算した通り……ちゃんと止められていれば……」

無力さに打ちひしがれている暇はない。

薬室内にはまだ何人も残っている、それを助けなければ。

「大丈夫ですか？」

中からの応答はない。

薬室の外でもスプリンクラーが作動し始め、その水ですら床につく前に蒸発して視界を覆う。

「くっ……あいて！」

乱暴にパネルを叩いても、システムダウンしていて開く気配はない。

閉じられた隔壁に阻まれて扉は見えない。

「すぐにも助けないと……ここは……」

天井から聞こえた音は、彼女には聞こえたのだろうか。

隔壁の温度も高いが、ついた手の痛みは感じなかった。

「佐伯さん」

腕を掴まれた柑奈の視界に水月が見える。

「もうここは危ない。早く逃げよう？」

「でも……中の人たちを助けないと……」

「それで佐伯さんまでいなくなっちゃダメ。私たちは、これじゃあいけないって、地球に帰って伝えなくちゃ」

外郭装甲を貫いたエネルギーは次第にその数を増やし、そして一際大きな爆発が艦首を包む。

煙から顔を出した武蔵の波動砲口は大きくえぐれ、大小の穴が空いていた。

閉じられた隔壁に背中を預けて崩れ落ちた柑奈の目からは涙が溢れる。

「また……何も、できなかつた……」

「……でも、助けようとはした」

「できなきや……同じだよ」

次第に大きくなるすすり泣きを見ていられなくなった水月は、静かに彼女を抱きしめた。

「同じじゃない。佐伯さんは、強いよ」

現在

「——と、言うことがありました」

「なるほど。ところで、君はいつから入ってきたんだ」

いつのまにか部屋にいた水月を見ると、彼女は「いやあ」と頭を掻く。

「柑奈に話があつたんですけど、なんか記憶にある事話してたし……ちようどその事を思い出してたし……で、なんとなく」

「そうか。じゃあ俺は出ようか、邪魔しちや悪い」

「いえ、いてください。何かあった時の協力者は多い方がいいです」

立ち上がるうとした有賀の肩を掴んで座らせると、水月は静かに口を開く。

「ワープまであと30分」

艦橋の席に着いた有賀、柑奈、美佳の姿を見た泰平がそう言う。

「わざわざ教えてくれたのか？」

「知らないと不便だろ」

「確かに」

軽く笑う2人は眼前に広がる宇宙へと目を移す。

「ワープの準備は進んでいるか」

艦橋へと入った艦長の言葉に「もちろん」と答えた泰平は、舵を握り直す。

——刹那。

突如として眼下に見えるドームが眩い赤に輝き、機器の起動音が鳴り響く。

『有賀さん、柑奈、聞こえてる？』

耳につけたインカムから聞こえた声に耳を傾けると同時に振り返ると、ひとりでに球状の羅針盤が浮き上がりホログラムで武蔵の姿が映し出された。

『今、ドームから武蔵の航行システムにアクセスがあると思うんだけど』

『うん、ドーム第三階層、でもコードは外部からのアクセスだけど……』

『そりやそうだよ。今アクセスしてるのは、後天的に武蔵に積みこまれたものだから』

『……そうか、あの石か！』

柑奈と目を合わせ、2人はエレベーターへと駆け出した。

「あつ、おい義哉どこに！」

「お兄!!? 柑奈さん!!?」

そんな声が聞こえたのかは本人しか知らない。

「私はドームに行きます。義哉さんは」

「自動航法室だな」

「はい。お願いします」

観測ドーム第三階層

パネルを操作して打開策を見出したい水月であったが、果たしてどうなっているのか皆目見当もつかない。

「水月！」

「柑奈、早かったね」

「黙って見ていられないって。それより、これ……」

「そこらの照明より遙かに明るいよ」

全周に輝く赤い石に背を向けてパネルに向いた直後、インカムから有賀の声が聞こえる。

『自動航法室に着いた。当初のワープ座標はどこになつてた?』

「確かここからワープで飛べる限界をまつすぐだったはずです」

『そうか。じゃあねじ曲がつてるんだな……』

「どういう事ですか?」

『ワープ開け座標が上書きされてる。ここからだ書き換えられない』

「座標の上書き……もしかしたら」

通信機を手にとった柑奈は、それをそのまま第一艦橋へと繋ぐ。

「こちら観測ドーム、航海長と気象長にお願いがあります。適当でいいので、2分に一回ワープ開け座標を更新してください。確かめたいことがあります」

『2分に一回……空間座標の確認ができないが、そこにワープするわけじゃないんだな?』

「はい、そこにはワープしません。あくまで確認のために」

『わかった。棚橋さん、お願いします』

通信機を置くと、次はインカムで有賀に語りかける。

「義哉さん、すぐにワープ座標を手動で書き換えます。ログを確認したら私に報告してください」

『了解』

数秒後、第一艦橋で座標が書き換えられる。

——と。

「これ……」

「やっぱり、ワープ座標と針路に関して反応してる……」

「柑奈、また座標が戻された。しかも今度はそこに固定されてるぞ」

「ありがとうございます。2分後にもう一度試行します、それも確認をお願いします」

彼女の予測通り、2分後に行われた書き換えもまた上書きされた。

「こちら観測ドームより艦橋。どうやらワープ座標を書き換えているのはドームに置かれてる赤い石のようです」

『石?』

「はい。それが本艦のシステムに入り込み、武蔵をどこかに誘おうとしているようです」

『石がハッキングをしている、と?』

「そうです。恐らくこれは小型のコンピューターのようなものなのでしょう。浅い階層

への度重なるハッキングで航法装置への入り方を確立させたのかと」
『そうか……では誘いに乗ろう。技師長と戦術長は艦橋に戻ってくれ』
彼らが艦橋へ戻り、艦は漆黒の宇宙へ消えた。
次に通常空間に戻った彼らが見たものは、果たして。

——第18話 「過去の痛み」——

第六章 真誠編

第19話 「青い星、戦禍の中へ」

「これって……」

思わず席から立ち上がって窓の外を見る有賀。

眼前に広がっていたのは、青と緑の惑星であつた。

「組成調査終了……この星は、間違いなく地球です」

「地球……?」

「そんなバカな……だってあの位置から地球にワープできる推力は武蔵にはないぞ」
「ワープのログは?」

柑奈を見た近藤だったが、彼女はモニターを見て眉をひそめる。

「武蔵は通常通りワープしています。ワープ中にエラーもありません」

「艦長、周囲に太陽系の惑星がありません。月も、何も」

彼女に続いた柵橋の言葉に、有賀は思わず外を見る。

見慣れた青い星。美しい星が、そこにはあつた。

「恒星の配置から座標は分かるか?」

「太陽系から遠く離れているのは確かです。でも、この星、この地形は地球そのもの」
艦長に答えた柑奈は、観測装置が出した結果を見つめる。

——小惑星もなければ、主星の光も満足に届かないこの場所で……こんな星……」
「じゃあ武蔵は、一体どこに來たっていうんだ……」

泰平の言葉の直後、武蔵の舵がまたひとりでに動く。

今度は地球に向けて降下を始めていた。

大気圏を越え、雲を抜けた武蔵には青い海と緑の大地、そして白波が見える。

「このまま降下した場合の目標地点は……パラワン島付近です」

「そこ……どこだ？」

棚橋の言葉に首を傾げた有賀に、嘆息した柑奈が答える。

「フィリピンにある島の一つです。確か、細長い島だったと思いますけど」

「なるほど……なんだってそんなところに」

前を向き直った有賀の視線には、青空と青い海が見えていた。

「棚橋、地球の環境から大体の時期と年代は分かるか？」

「やってみます、艦長」

近藤に頷いてモニターに向き直る彼女を横目に、舵を握ったままの泰平はオートパイロットが切れたことを確認して武蔵を着水させた。

——直後。

「レーダーに感、周囲に艦艇あり。識別不明、光学映像をモニターに出します」
丹生のアナウンスで全員がモニターを見上げる。
そこに映っていたのは、まるで城壁のような影。

「……艦か？」

「艦影照合……過去の記録に一致する艦艇がありました。所属は大日本帝国海軍」
解析された画面が大きなモニターに映し出される。

大小の反応と共に、スキヤニングされた艦型が並ぶ。
4キロ圏内にいる艦艇は6隻。その中には。

「戦艦……大和……？」

「長門もいる……戦艦が2隻とは、結構な大艦隊だな」

「艦隊は現在、定速で北上中。部隊は二つに分かれていて、本艦は先頭部隊と行動を共にしています」

状況を説明した丹生のレーダーには、前後二つの輪形陣を組んだ艦隊のアイコンが光っていた。

レーダーにはJPB—YAMATOという表記がなされ、宇宙戦艦ヤマトのBBY—01とは区別されている。

「艦長。現在の時刻は午前7時、大気組成、気圧配置、気温などから、1944年の10月後半という結果が出ました」

「……時刻は艦内標準時と同じか……」

棚橋の報告から2分後、レーダーが複数の反応を捉える。

それは艦隊から放たれた偵察機の反応であった。

「数は」

「合計で7機です」

ちらりと時計を見る。

——7時2分。史実通りなら……。

「全艦に達する。1時間後より、対空警戒を実施する」

「1時間後、ですか？」

振り返った有賀に頷くと、近藤はモニターに映る巨艦を指さす。

「あれは間違いなく、日本海軍最後の艦隊として沖縄へ向かい、歴史の変遷に負けた戦艦だ。あの艦には、2隻の同型艦がいる。一つは完成せずに沈んだ空母、信濃。もう一つは、戦艦武蔵」

「武蔵……大和の、同型艦……」

「そうだ。この日、この時間、この場所、この位置にいる本艦は、戦艦武蔵としての役割

を与えられている」

その言葉に、来島は思わず反論した。

「しかし、1944年の艦隊と2200年建造の本艦では基本性能も異なりますし、戦艦大和と宇宙戦艦ヤマトが違うように、戦艦武蔵と本艦では大きく違う……」

「それに本艦は戦艦ではなく実験艦です。今この場にいる大和や長門、羽黒の乗組員から見れば……」

「いや、戦艦と思うな。武蔵とは思わなくても」

柑奈の言葉を遮ったのは、意外にも泰平だった。

彼はまっすぐに窓の外を見つめながら続ける。

「戦艦の定義は、大型の船体に大口径砲を持つこと。そして、自艦の砲撃に耐えうる装甲を持つこと。実験艦である武蔵も、この定義は守られている」

「この艦の48センチ三連装砲は、この時代最大と言われる大和の46センチを超える。でも、わざわざ正直に戦う必要は無いんじゃないか？」

窓から砲塔を見下ろしていた有賀はまた振り返り、副長を見た。

「武蔵は飛べる。この状況を脱するなら、地球を出るのが一番だ」

「……残念ながら、それは無理だな。着水してからは波動エンジンがびくともしない。補助エンジンも、飛べるだけの推力を出せないんだよ」

予想外の答えに立ち上がるが、言葉が出てくるわけではない。

「原因は……」

「多分、意図的にロックされてるんだと思います……あの石に……」

柑奈の言葉で、艦橋に重たい空気が流れる。

しかしその刹那、開いた扉からはそれと正反対な空気が入り込んできた。

「これってすつごく面白い事象じゃない!?」

「……カレンさん……?」

窓の方へ駆けてきた彼女を目で追う。

「ええ、これは面白いわ! まさか」本当に「こんな事になるなんて!」

外の景色、煙突から煙を上げる大小の艦艇を前に彼女の目は輝いていた。

「本当に、とはどういう事ですか?」

柵橋の問いに指を鳴らすと、手に持った端末からパネルに画像を転送する。

「あの石は、拾った者をアケーリアスに導くものじゃない。それが、解読の結果よ」

「じゃあ、ここまでの旅は徒労だった事か?」

「それは違うわ、有賀。赤い石は、あたし達を色々な場所へと連れて行った。そして全てを「見ていた」の。あの石を収容したミラストルから、ジルバへ、そしてサルガツソーを超えて、ここへ。その旅を、この決断を、ずっと記録していた」

これまでに行ってきた星や場所の画像が次々と表示され、それらは中心に据えられた赤い石の画像へと吸い込まれる。

「まだ最後の方は分からないけど、石板によればアレは記憶装置で、自己判断能力をもった小さなコンピュータの役割を果たす。武蔵をハッキングしたのも、秘めた記憶を読まれたのも、全部が試練だった」

「古代文明の遺産……大きいものばかりかと思ってたけど」

「そうね。有賀の言う通り、地球はこれまで惑星バランのワープゲート、星巡る方舟、滅びの方舟、シュトラパーゼ、謎の天体と大きな遺跡にしか遭遇しなかった。あの石も同じよ、大きいものの一部」

パネルには、一年ほど前に立ち寄った鉾山の星が現れた。

「この星、ミラストルがああ石の本体。あの時の揺れは、この星が起動したことを意味するの。立ち去るときに通り過ぎた、星の周りに浮かぶ天体は全部がアンテナの役割を果たすもの。あの石から発信されたものを、受け取るための」

にわかに輝く天体。

大きな本星の周りに浮かぶ縦に長い天体の鉾物が自ら光を帯びているのである。

彼女曰く、これがこの星の起動状態。赤い石から放たれた信号を受け取るための姿だというのだ。

「信じられないな」

「ええ。でも、細かく調べていけばいくほど、これ以外にはあり得ないのよ」
それよりも、とカレンは時計を一瞥する。

「もうそろそろ時間でしよう?」

時刻はそろそろ8時を回る。対空警戒を始める時刻であった。

「本艦はこれより、一時的に戦艦大和、長門らと行動を共にする」

史実では、戦艦武蔵は大和、長門と共に第一遊撃部隊の第一戦隊として編成されている。

近藤の指示は、それを理解してのものである。

10月24日の時点で、ブルネイを出港した日本海軍は重巡愛宕、摩耶を失っており、高雄が損傷している。特に愛宕は旗艦であったために損害は大きい。

そして、8時10分。

「レーダーに感、不明機接近」

「映像より機影照合。アメリカ軍の偵察機です」

丹生と柑奈の言葉に頷いた近藤は、頭の中でこの後の展開を思い出す。

——これで部隊の位置が露呈する。それは大和も把握済みのはずだ。ならば、次は。

「一ノ瀬、戦艦大和と通信の波長を合わせろ。もうすぐ打電が来るはずだ」

「分かりました」

手早くチャンネルを合わせた直後、モールス信号の音と共にパネルに文字列が現れる。

「大和より入電。『武蔵は妨害電波を発し、米攻撃部隊の攪乱を行われたし』」

「ああ、史実通りか。妨害電波は波長に穴を作っておけ。完璧にやると歴史が変わる、少しでも穴を作れば、アメリカ軍は的確にそこを狙う」

指示を出した近藤はすぐにモニターに映る大和の背を見る。

栗田中将、その名は栗田艦隊として歴史に刻まれている。

——そんな人の戦いを間近で見られる機会もそうそう無いからな。

「全艦、対空警戒。有賀、頼むぞ」

「了解」

この時の日本海軍の旗艦は大和や長門ではなく、重巡妙高となっていた。

2日前に旗艦愛宕が雷撃で撃沈された事による措置であり、出撃前に「大和型戦艦を旗艦に」と具申があつたが結局重巡に任された、との記録がある。

大きく、戦力として狙われやすい大和型に爆撃が集まって指揮ができなくなるよりは、狙いが分散する重巡にした方が安全との判断なのかは不明だが、この判断が間違いだったと考える者もいるという。

——10時半からが魔の時間だ。

近藤は、ただ静かに時計を見つめていた。

これから起こる戦いと、記録で見た惨劇に想いを馳せて、艦は海をゆく。

——我々に、沈めというのか……。

——第19話 「青い星、戦禍の中へ」——

第20話 「戦争という現実」

1944年10月24日、午前9時30分

「レーダーに感あり。光学映像、技師長に回します」

「確認、照合……アメリカ軍B—24爆撃機と機影が一致」

武蔵がそれを察知してすぐに、通信席に再びモールス信号が流れる。

「大和より、『我、敵爆撃機を観測せり。全艦警戒されたし』」

大和のマストに掲げられる旗は変わり、戦闘を示すものになった。

「長門、大和ほか全艦で対空戦闘の用意を始めました」

「艦長、我々はどうしますか？」

振り向いた有賀に、近藤は答えない。

「……艦長？」

「ああすまない。少し悩んでいてな。大丈夫だ」

深呼吸をした近藤は、窓から見える艦隊を見据えて立ち上がる。

「対空戦闘用意。敵はアメリカ軍になる。カレンさんには……」

「大丈夫よ。祖国の人たちではあるけれど、顔を知っているわけじゃない。戦争って、そ

ういう顔も知らない人を敵にしてやるものでしょう?」

「……確かに、そうか」

静かに微笑む。

戦場で笑う彼の姿は不気味にすら見えるだろう。

時計の針は、既に十時を回ろうとしていた。

「レーダーに感あり、9時方向から大編隊接近中。距離はおよそ100キロ」

「さて、史実にはないことをしようか」

丹生の報告を受けた近藤は、有賀を見る。

「了解。主砲一番、二番、三式弾装填。対空戦闘!」

「対空戦闘、照準固定」

砲身を持ち上げながら左を向いた二基の砲塔の動きが止まる。

「敵編隊、距離70キロ」

「まだだ」

砲身を向けたままゆつくりと海をゆく武蔵。

大和、長門らはまだ敵機を今か今かと待ち構えている。

そして、10時20分。

「撃て!」

突如火を噴いた武蔵の主砲から放たれた6発の弾頭は、敵編隊のただ中で炸裂した。炎に包まれながら落ちていく戦闘機の姿を見た有賀達は、また主砲へと弾を装填する。

「総数44機、急降下しつつ艦隊に向かってきます！」

「水面下ソナーに反応、本艦へと向かう魚雷感知。軌道を航海長へ」

「回避行動！」

白波を立てて回避行動をとる武蔵の隣では、空に色とりどりの煙を立てながら艦隊の対空戦闘が始まっていた。

弾幕をくぐり抜けて放たれた爆弾は海面に水柱を立て、水面に航跡を残して迫る魚雷は装甲を砕いて巨大な爆発を起こす。

一番砲塔に当たって跳ね返った爆弾を見送った武蔵は、次いで迫る魚雷を避けていく。

「妙高、艦尾に被弾確認！」

「本艦に魚雷接近！」

「この距離は回避できないぞ……」

歯を食いしばりながら舵を傾けた泰平だったが、その言葉の通り魚雷は武蔵の喫水下の装甲を貫通した。

「隔壁閉鎖、極力浸水は少なく抑えるんだ。非戦闘員は艦中央に退避せよ」
冷静に指示を出す近藤だったが、内心では若干の焦りを感じている。

——波動防壁は……まだ使えないのか……。

祈るように機関長の背を見るが、彼は静かに俯いて「停止」と表示されたモニターを見続けていた。

そうしている間にも空襲は続き、妙高は速度を落として艦隊から落伍していく。

爆発音の中で入電を受け取った一ノ瀬は、振り返って口を開いた。

「旗艦妙高より、旗艦を重巡羽黒へ変更。高雄の護衛任務より駆逐艦長波を解任し、離脱する妙高の護衛を命ずる、とのこと」

「そうか……」

腹を抱えた爆弾と魚雷を使い果たした戦闘機は、踵を返してイントレピッドとカボットへと帰投する姿が見える。

——第一次空爆は終了したか……。

「損傷報告、対空警戒は続行せよ」

史実通りならば、空襲はあと4度ある。

「副長、波動エンジンを再起動させる事はできないか。波動防壁がなければ、この後の戦闘は……」

「やってみますが……厳しいところはあります」

「……そうか。できる限りで構わない。頼む」

海を見る近藤の視界には、来島や泰平へと指示を出す有賀の横顔が映る。

「今は波動防壁は使えない。敵戦闘機にとりつかれたら終わりだ」

「ですが戦術長、本艦の対空装備では……」

「なんとかするしかない。使えるものを使って」

その瞳は強い決意とともに、不安に潰されそうになりながら必死に耐えようとする彼の心を表すように。

奇しくもあの日の戦艦と同じ、艦体色に塗られた甲板を見つめて、群青の空へと目を移す。

大和たちは幾度も轉身、回避行動をとっていたが、それが流木を潜水艦と誤って判断した故の行動であるとわかっていた武蔵のクルーは大きな動きを見せることなく被害の確認や排水作業などに勤しんでいた。

「輪形陣外側の駆逐艦、海面へ爆雷を投射しました」

「だから無意味だって」

そんな呟きは当然聞こえるはずもない。

そのうちに重巡羽黒にボートが接舷し、駆逐艦と共に妙高は後退していった。

それから静寂な時が流れていたが、それはレーダーに映る機影によってかき消される。

「敵編隊接近、接敵は約10分後」

「1ノ瀬、大和へ打電しろ。増速用意」

近藤の予想通り、大和の栗田中将は24ノットへの増速を全艦に指示、艦隊は白波を大きくして高角砲を上へと向けた。

11時56分。

空を切って降下してきた総勢33機の機体は2隻の巨艦——即ち大和と武蔵へと攻撃を集める。

降下する戦闘機に対して砲撃を開始した長門は敵の数を減らすに至らず、大和と武蔵の周囲には艦橋より高い位置にまで登る水柱が立つ。

「ドームに弾幕を集めろ、あそこには当てさせるな！」

開け放たれた両舷のミサイル発射管から白煙と共に飛び出した弾頭は殻を破ると、数多の小さな弾頭を蒼空へと撃ち上げる。

それは翼を砕き、投下された雷撃と爆弾を貫き、コクピットに血を満たし、水面に機体を叩き落とした。

海面スレスレを飛行して魚雷を切り離した後の雷撃機はパルスレーザーによって機

首から貫かれ、爆炎とともに沈む。

「有賀くん、直上から爆撃機が！」

半ば悲鳴のように告げる丹生の声と共に、雲の中から数機の爆撃機が急降下を仕掛けてきていた。

「くそっ、泰平任せた！」

「お前、なんて無茶を……！」

海中で姿勢制御スラスターを動作させてその場で急旋回をかけたが、投下された爆弾は的確に艦首と艦尾に命中した。

次いで爆弾を失った機体は機銃を撃ちながら降下し、艦のギリギリで姿勢を戻して再び上昇をかける。

機銃の弾はドームに浅い傷を入れるも致命傷には至らず、長門や大和のように甲板に血が溢れることもない。

遠くに見える大和の対空砲座は血で汚れ、身体をなくした手だけが残る場所もある。

「これが戦争……」

積まれた土のうが吹き飛び、乗組員は海へと投げ出され、血で汚れた甲板は波に洗われる。

その様子をモニタリングしていた柑奈は息を呑み、それでもパネルを操作する。

——地球に、帰るために。

赤く表示されたエンジンから艦体各部へと伸びる波動コイルへの道を見ながら、彼女
なりの戦いは続く。

艦尾に突き刺さった魚雷が装甲を砕き、流れ込んだ海水は隔壁でせき止められた。

「艦体、僅かに左舷に傾斜。浸水拡大につき速度22ノットへ」

「敵編隊、後退していきます」

「左舷補助エンジンに軽微な損傷を認める。速度低下はこれによる出力の不安定さから
来るものかと」

それぞれの部署からの報告に、艦長の顔は曇る。

「このままじゃ戦艦武蔵の二の舞だ……一体どうすれば……」

「戦艦……武蔵……」

彼の言葉から、それはこの戦いで沈んだ船の名であることは想像に難くない。

席の片隅に収納していた端末を開き、戦艦武蔵に関するデータを立ち上げた有賀は目
の前にいる巨艦と瓜二つな艦影の姿を見つめていた。

「怪我人の数を集計、報告せよ。機関科は補助エンジンのダメージについて報告を求め
る」

「艦長、艦首の爆弾で浸水が拡大しています。艦首の沈下が……」

泰平の報告を聞き、リーダーを見つめる丹生も声を上げる。

「艦隊から落伍していきます。このままだと孤立します」

冷静にそれを聞いていた有賀は、宇宙戦艦ヤマトのある戦闘詳報に目を落とし、別のウインドウに出した戦艦武蔵の詳報と見比べる。

「別に、浮いてる必要は無いよな」

「なんだって？」

独り言に反応された有賀は少しの間をおいて続けた。

「いや、別に浮いてる必要はないよなって思っただけ」

「それはこの艦が無傷ならな。今は全体に大小のキズがあるんだ、浸水して2度と浮上できない可能性もあるんだぞ。今は波動エンジンが使えないんだから」

「……そっか……んー何はともあれエンジンだよなあ……」

せつかく思いついた案を潰されて頭をかく有賀。

「でも、一時的に逃げるなら不可能ではないかもしれない」

口を開いた柑奈は、ドームブロックが緑に変わったモニターを背に立ち上がる。

「二応、一時間くらいなら傷をカバーしつつ水圧に耐えられる防壁を張れます。ただ空襲で落とされる爆弾には耐えられないので……50ポンドなんて以ての外なので防御用には使わないでください」

極めて冷静に言いながら有賀に歩み寄る彼女は、僅かに笑みを浮かべる。

「義哉さんなら、きつと大丈夫です。まだ波動防護弾も残ってますし、私は誰よりも義哉さんを信じてますから」

「……ありがとう、柑奈」

笑顔で答えた有賀は彼女の手を握り、頷く。

「史実では、5度目の空襲で武蔵は傾斜復元ができなくなり沈む。使うならここしかない」

「有賀と同意見だ。だが、その後は」

近藤の言葉に、クルーは首を傾げる。

「メ2号作戦のヤマトに做ったとして、我々にはその後がない」

「エンジンが使えないから星を出られない……あとできる事といえば……」

「……戦闘への介入」

来島の呟きに、艦橋に沈黙が流れる。

「介入してどうするんだ」

鋭い視線を向ける有賀。それに答えたのは席を立った近藤であった。

「大日本帝国を降伏させて、米軍と講和を結ばせる。広島と長崎への原爆投下は……」

「お言葉ですが、それを可能とする戦力は本艦にはありません。何より、我々は地球に帰

らないと」

咄嗟に返した有賀の頭に手を置いた近藤は、子供を見るような目で見つめる。

「お前の言う通り、武蔵の任務はアケリーアスを観測して地球へ帰ることだ。その為には生き延びなければな」

席へ戻る近藤の背中から紺碧の海へと視線を移した有賀は、波に洗われた甲板を見つめる。

遙か遠くに陣取る空母では爆装された機体が甲板を蹴り上げ、大空へと飛び立つ。

時計の針は午後1時を回り、島風からの敵編隊発見の報は大和を通じて全艦へと伝えられた。

その大和から敵機発見の報を受けた時、武蔵のレーダーは敵編隊をはっきりと捉えていた。

——第20話 「戦争という現実」——

第21話 「幻想からの脱出」

砕け、燃える。

焰と海水に責められる海の上で、かの艦を守るものはいない。

「大和で火災発生を確認！」

「右舷と艦尾に直撃弾！ 加えて至近弾の爆風で装甲剥離！ エンジン上部垂直翼大破！」

「メイソノズルに異常発生、表層剥離！」

喧騒に満ちる艦橋にさえも轟く轟音、足元を掬う揺れは魚雷の直撃を示す。

それでも残された兵装は稼働し、迫る機体のうち5機を撃墜した。

追尾しながら撃ち続けるパルスレーザー砲の砲身にも爆弾が直撃し、折れた砲身に溜まったエネルギーが暴発を起こす。

「ソナーに感、魚雷多数！」

「この速度で避けられると思って、くうっ……い！」

一瞬だけ艦体を水柱が持ち上げるが、直後になだれ込む海水で右舷へと傾いた。

艦体に降りかかる海水の雨はにわかに炎を弱めるものの、同時に機器をショートさせ

パルスレーザー砲身が下へ垂れる。

「右舷パルスレーザー、一基が動力に異常発生、沈黙！」

『こちら戦術科、只今より停止したパルスレーザー砲は人力で撃ちます！ エネルギー

供給は止めないでください！』

それに頷いた有賀は丹生から視線を移して肘掛けを強く握りしめた。

「右舷カタパルト大破、同第一格納庫シャッター破損！ 開閉不可！」

「艦底部浸水率上昇、注水増量します！」

「艦首魚雷管、全て海中に入りました！」

「ドーム部亀裂増加！」

続々と報告される損傷報告が徐々に遠くなる。

「一番主砲、雷撃により沈黙！」

力なくこうべを垂れる砲身、水平線が視界の中で高くなり、絶え間ない揺れと時折起こる火花が身体に傷を作る。

「敵編隊、撤退を開始します」

丹生の報告に肩の力を抜く有賀。

しかし。

「油断するな、すぐに来るぞ！」

彼の頭を叩き起こしたのは、近藤からの一喝であった。

「速度低下、止められない。大和にすら付いていけないぞ……」

「艦自体が前に傾いてる……これだと速度は出せないし、補助エンジンも安定してない……」

「メインノズルの損傷は大した事ないが、エンジンはだんまりだ。まだ武蔵は飛べない」
泰平、柑奈、そして谷村の言葉に沈黙が漂う。

「……安定翼を開け。少しは浮力を稼げるはずだ。どの道追いつけないなら速度は捨てて耐えるしかない」

鋭い眼光で前を見つめる有賀へと視線が集まる。

「作戦通りだ。武蔵が早く沈む訳にはいかない。それに、次は……」

「あつ、リーダーに感。攻撃隊は大和、長門の方へと向かっていきます」

モニターに投影された主力艦隊の様子は凄惨だった。

対空砲火は虚しく空で炸裂するだけ、すり抜けた攻撃機は2隻の戦艦へと容易く爆弾や魚雷を命中させる。

大和は甲板から出火、長門は足を止めると中腹から黒煙を上げて数人が吹き飛ばされ肉片が海へと撒き散らされる。

静観していた武蔵にも魔の手は迫り、艦首への直撃弾、そして魚雷によって艦底の翼

がへし折れるという被害を出した。

空襲はすぐに終わりを迎え、直後に大和から電文が届く。

「武蔵はコロンへ転身せよ。なお、駆逐艦清霜は同艦の護衛を命ずる。大和からの電文は以上です」

「従おう」

近藤の決断で、武蔵は再び速度を上げた。

「あーもうキリがない!」

血とアルコールの匂いが満ちる医務室で、嘆きながら手を動かす少女がいる。

「痛くても我慢してよね、生きてる証拠!」

顔をしかめる戦術科員にそんな言葉をかけながら、深く抉れた傷口を消毒する。

少し目をそらせば、傷だらけで微動だにしない身体が横たわり、中には一部がないものや一部しかないものもある。

——吐き気がする。

生きている中で、死体に囲まれて治療をする状況など無いだろう。

声を出していなければ気が狂いそうだ。

「美佳ちゃん、大丈夫? 休んでいいんだよ?」

「ううん、大丈夫。きっと、この船を沈めないためにお兄も頑張ってるから……休んでな
んていられない」

立ち上がったてまた別のけが人の元へ赴く美佳の背中から視線を落とせば、誰かの血で
汚れた自分の服が見える。

——私、誰かが死ぬ姿を見たくなくてこの艦を選んだのにな……。

胸が締め付けられる。

そんなはずじゃなかった、こうしたくなかった。そんな想いが満ちる。

「でも、やらなきゃ」

——誰かが死ぬのを、私は見たくない。

立ち上がった奈波は胸の前で小さく拳を握ると遠目に見えるトリアージの色を確認
して走り出した。

「もう大丈夫ですよ」

そんな声をかけながら、肩にかけたカバンから消毒液を出して作業に取り掛かる。

——どうして。

敵編隊が近づく警報音が響く中、静かに目を開けた有賀は視界の隅で空を見上げ始め
た砲身を見つめた。

——どうして、俺たちが犠牲にならなきゃいけないんだ。

戦争を始めたわけじゃない。戦争がしたかったわけじゃない。戦争をしたくなかったから、この艦に乗ったのだと心で反芻する。

——誰かを殺すために、戦いたくなんてなかった。

そんな想いも虚しく、黒煙と共に放たれた三式弾は近づく敵編隊の数機を撃墜した。

「敵機接近、総数75!」

「な、75……!?」

パルスレーザーが作り出す弾幕の中で降下してきた機体が炎をあげる。

——刹那。

突如として、天が落ちた。

落下した天板は宇宙儀を割り、艦長席のパネルに突き刺さる。

「艦長!」

「怯むな! 構わず前を見ろ!」

その声に振り向くのをやめた有賀の背に頷いた近藤は、小さく嘆息した。

——命一つに比べれば、軽いものか。

軽くなった左肩から落ちるものを見て、彼は苦笑いを浮かべる。

天板が落ちた箇所は外郭装甲が内側にひしゃげていたものの貫通されてはならず、気

密性も対水圧性能も十分に見て取れた。

「艦長、負傷者について……っ!?」

開いた扉からその様子を見た美佳は息を呑んだ。

「……左腕が……」

「大したことじゃない。止血を頼めるか」

「止血って……すぐに降りてください。私だけだと、応急処置にしかありません」

「応急処置で十分だ。頼む」

一瞬の思考の後、艦長席に上がり肩にかけた用具入れの中身をぶちまけた美佳はその大きな傷口を前にした。

「君に頼むのは酷だったかな」

「……いえ。この傷で、ピンピンしてる方が不思議です。普通なら、気が狂ってもおかしくないのに」

「まだクルーの命を背負う肩と指示を出す頭がある。それなのに、こんな事で気をおかしくしてはいられないな」

「片腕をなくして言う事じゃありませんよ」

「真剣な眼差しで、表情を出さないようにつとめながら包帯を巻きつける。

「すぐに先生を呼んでできます。今はここまでしかできません」

「ありがとう。わたしより、他のクルーの治療を優先してほしい。本来の報告を聞こう」
そんな会話を背中に受けながらも、武蔵への爆撃を防ぐ戦いは続いていた。

魚雷の直撃で右舷補助エンジンは停止し、爆弾の直撃で開いていた安定翼にも穴が空き始めていた。

爆撃と雷撃による電気系統へのダメージで電力が滞り、遂に一切の艦載機の発進が不可能となる。

撃墜し損ねた敵攻撃機の突撃で左舷のミサイル管が半分ほど消失、魚雷は両舷の展望室を貫き、波動砲口にまで海面が迫ってきていた。

「速度低下！ 回頭が遅い！」

「艦損害率70%、稼働率は20%を下回ります！」

黒煙をあげる武蔵の姿を背に、装備を使い果たした攻撃隊は引き返していく。

「艦隊が回頭してきます」

満身創痍の大和、長門をはじめとした艦隊は、停止する武蔵へと近づく。

艦隊からは駆逐艦島風だけが武蔵の側へと残り、大和は背を向けて海の向こうへと去っていった。

「……頃合いか」

有賀へと頷いた近藤の指示を受けて、有賀は泰平に目を向ける。

「……わかった」

安定翼を閉じた武蔵は徐々に傾斜を増し、ほぼ史実に沿う19時35分。海面を抉るほどの爆発が、闇夜に浮かび上がった。

浮遊物の周囲を航跡を残して進んでいく浜風と清霜は、再び回頭しレイテに向かう大和らを見送り一路コロロンへと舵を取った。

損傷していた浜風と交代した島風、戦線復帰を懇願した利根は大和と共に戦場へと赴いたのである。

海上には先程まで巨艦が浮いていた痕跡などなく、月明かりだけが輝いている。

『嗚呼、我半身を失へり！ 誠に申訳無き次第とす。さり乍ら其の斃れたるや大和の身代わりとなるものなり。今日は武蔵の悲運あるも明日は大和の番なり』

レイテに向かう道すがら、大和の宇垣中将は後世に残る一文を記して戦藻録を閉じた。

その後の日本軍の動きは史実に違わず、通信機の不調により作戦は失敗、空母瑞鶴を含めた主戦力を失い大敗を喫する事となる。

だが、まだそれを予期する者はいない。

——いるならば。

「有賀、副長。すまないが後を頼めるか」

ようやく艦長の姿を見たクルーは戦慄した。

「艦長……」

「お前たちが無事で何より。すぐに戻る」

近藤と共にエレベーターへと向かう美佳だったが、直後に振り返り柑奈と兄を呼んだ。

彼女の服は血で染まり、先程まで艦長の傷を診ていたため頬にも微かに血が付いている。

「すまない、美佳」

「……なんで謝ってんの？　そういう言葉を聞きたかったわけじゃないんだけど」

はあ、とため息をついた美佳は、自らの頬に手を伸ばした兄の手を握る。

「死んだ人を見て辛いとか、そんな思いをさせてごめんだとか、弱音吐いたら許さない。これは私の意思だもん。だから、お兄も柑奈さんもできることを。それでどうなつたって恨んだりしないよ」

「ああ……わかった」

美佳と拳を合わせると顔が自然とほころぶ。

「頑張ったね、美佳ちゃん」

彼女を抱きしめる柑奈を抱きしめ返そうとしたが、それはしなかった。

「……血、つきますよ」

「それは美佳ちゃんが頑張って戦ってた証拠だから……」

「全部終わったら、いっぱい話しましょうね。……お姉ちゃん」

「うん」

艦長と共にエレベーターを降りていく彼女を見届けて、有賀は拳を握りしめた。

「くっそー！」

そのまま壁を殴りつけた彼は大きく息を吐き出す。

「お前は最善を尽くした。お前一人の責任じゃない」

軽く背中を叩いた泰平は席に戻り、それにつられて各々席に戻り始めた。

「むしろあれだけの戦闘で、死者が30人以下だった事が奇跡です。戦術長は責務を果

たしたと胸を張ってください」

機材を操作しながら、来島が口を開く。

「敵機を落とせなかったのは、砲雷長である私の技量不足です」

冷静に言葉を続ける彼女の言葉の端々は震えていた。

横目で来島を見た一ノ瀬は彼女が目には涙を浮かべているのを知ったが、あえて何も言

わずに向き直る。

——数じゃない。何人死んだかじゃない、死者が出たか否か、それが重要なんだ。命は、数じゃない。

心配そうに見つめる柑奈の視線を背に、有賀も席に戻る。

「……あの爆撃、雷撃、不自然じゃありませんでしたか」

突然口を開いた棚橋の方を向く。

「この時代の爆弾の威力は細かく分かりませんが、至近弾の爆風だけでこの艦の外殻装甲が剥離したのはあまりにも威力が高すぎると思うんです」

「それは、つまり」

「形はデータベースから持ってきた完全なコピーですが、威力は我々が知るものだったのかもしれない」

「俺たちが、知るもの……地球の戦艦や、ガミラス、ガトランティス……」

「それに、ジルバやラーゴラス、ボラー連邦とも遭遇しています」

有賀と柑奈の言葉に頷いた棚橋の言葉を引き継いだのは、それまで口をつぐんでいたカレンだった。

「この惑星はそもそも地球を完全にコピーしたわけじゃない。この惑星そのものが特異点……つていう……」

「恐らく」

「なら、時間断層やヤマトが入った円筒状天体みたいには出口や結節点があるはずですよ
ね」

モニターに向き直った柑奈から視線を戻した有賀は、そういえばと柵橋に問う。

「今、水深はどれくらいだ？」

「水深？　今は、海面から計算して、大体900から1千メートルの間ですが……」

「……なら、そろそろ海底のはずだ。だが見えない。水圧も……」

「言われてみれば……義哉さんの言う通りです。今は波動防壁を使っていないのに、外部からの圧力がほとんどありません」

柑奈の声の直後、背後から何かが再起動する音が聞こえた。

「波動エンジンが、起動をはじめた……」

『こちら機関室、フライホイールが回り始めました！』

その報告に騒然とする艦橋に続いて柵橋の声が響く。

「水深、1000メートルを突破！」

「水圧消失、エアポケット……いえ、真空です」

それまで重力に従って降下していた艦体が止まり、代わりに沈黙していたエンジンが火を噴く。

「波動エンジン点火。ノズルへのダメージが少しあるが、ワープはできるかもしれない」

「波動防壁のためにキープしていたエネルギーを使えばワープ準備時間も短縮できると
思います」

逡巡の末、有賀は来島へと目を配る。

「砲雷長。今から指定する場所にショックカノンを撃つ。その後、エンジンを全開にし
て海底から飛び出し、ワープするぞ」

「でも、またエンジンが止まるかも……」

「止まったら浮上できないだけだ。またこの状況になるだけ、マイナスにはならない」

その言葉を受けて、武蔵は艦体を左へと傾ける。

使えなくなった一番砲を除いた二基の砲塔が右を向き、照準を合わせる。

迫り来る艦載機へと噴進砲を放つが、それは遥か低空で火花を咲かせるだけ。

虎の子の艦隊に送った電文は届かず、幸運艦と呼ばれた空母はまさに沈もうとしてい
た。

——航空母艦、瑞鶴。

この戦いで沈む運命を与えられた艦。

その艦のすぐ近くで、海が光り始めた。

それは徐々に大きくなり、遂には海面を蒸発させながら天高く登っていく。

天に昇る龍のような二条の光が消えた海面には渦ができ、空気を震わすけたたましい音が響き渡る。

渦の中心を突き破って空に向かうその艦は、傷だらけのまま、ノズルから青い光を放って雲に開けられた青空へと消えた。

艦が消えた空間から入った亀裂は空を覆い、崩れ去る。

その様子は惑星軌道にワープアウトした武蔵からもはつきりと確認できた。

「ヤマトの記録に似てますね」

「だが、これはジレルの人達の力じゃない。彼らは心に入り込むが、直接攻撃はできなかった」

艦橋の窓からそれを見つめる柑奈と有賀の言葉に頷いたカレンは、微かな笑みを浮かべて席を立つ。

その直後。

『第二艦橋から第一艦橋へ』

響き渡るは水月の声。

駆け足で席に戻りマイクを取った柑奈の後をカレンが追う。

「水月、どうしたの？」

『よかった、柑奈は無事なんだね。実はたった今アケーリアスの文字で、あの星からメッ

セージが直接武蔵のメインホストへ打ち込まれたの。今送るよ」

画面に表示された文字を見たカレンが感嘆の声をあげる。

「これ……座標指定じゃないかしら」

『流石カレンさん。あたしもそう踏んでいます。ここに行けば、何かがある』

その時エレベーターの扉が開き、ジャケットを肩にかけて近藤が入ってきた。

「もう迷う事はないな。本艦は修復作業をしつつ、この座標へ向かう。転舵反転」

「転舵反転！」

指示を復唱した泰平が、地球の姿を失っていく星から艦首を回してエンジンを点火させる。

地球の姿を失いにわかに輝きを放つ空洞惑星がその背を見送る中、武蔵は次なる目的地へと旅立ったのである。

人のいなくなった武蔵のドームに残された赤い石の輝きは、次第に強くなっていった。

——第21話 「幻想からの脱出」——

第22話 「神秘への道」

戦場を脱した武蔵は、傷ついた艦体を修理する為に道中いくつかの星に立ち寄りながらも、一路示された座標へと向かっていった。

「艦体修復率80%……上々ですね」

「そうだな」

モニターを見つめる柑奈の背後に立つ有賀が頷く。

艦橋の修復は完了し、落下した天板や割れた宇宙儀、破損した艦長席も今は元どおりになっている。

天板の撤去作業中に数名が吐き気を催して医務室へ行くほどの凄惨な傷跡があった艦長席を見返し、有賀は顔を曇らせた。

「まだ気にしてるんですか？」

「まだって……あれからまだ1週間だ。艦長は……」

医務室

「鎮痛剤、もう切れたんですか？」

当直を担当していた奈波が聞くと、近藤は苦笑いを浮かべる。

「すまないな……まだ、痛むんだ」

「美佳ちゃんから聞きましたよ。相当無理してたつて。……その様子だと傷口が痛むわけじゃなさそうですね」

近藤をちらりと見た彼女は笑顔で言うと、踵を返して棚を開けた。

「無くなつた左腕が痛むんですよ。脳が無いと認識するまではまだ時間がかかりますし」

「……君は将来、いい医者になるな」

「私は医師じゃなくて看護師志望です。えーつと確か先生からのメモは……」

手にしたメモと瓶を交互に見返して、駆け足で戻ってくる。

「これですね。一回で多く飲んだらダメですよ？」

「あはは、わかつてるよ」

ピンを持った右手を振りながら出て行く艦長の背中を見つめ、彼女は椅子に座り込む。

「……無理してる……よね」

「やっぱりそうだよね」

不意に聞こえた声に顔を上げると、手に袋を持った美佳がそこに立っていた。

「どうしたの、美佳ちゃん」

「ん？ 暇だから差し入れ。何食べる？ 色々あるけど」

袋を開けて中身を見せる。

「……………ねえ、美佳ちゃん」

「何？」

「見える限り、この時間に食べるものじゃないと思うんだけど。ほら、カロリーの的に」
「気にしたら負けだよ？ じっくりも食べてるし」

その言葉に、改めて美佳の身体をまじまじと見つめてため息をつく。

「いいなあ、太らない体質……………」

「何言ってるんの奈波の方が細いよ」

言いながらフライドポテトをつまむと、そのまま奈波の口へとねじ込む。

「んぐつ……………」

「最近ちゃんと食べてないの、知ってるんだからね」

「そうかな……………」

「そうだよ。ほらほら、もつと食べよ？」

食べやすいように袋から出した彼女は、笑顔でポテトを口に運ぶ。

「美佳ちゃん、いつも通りですごいね」

「……うん。こうしてないとき、どうにかなつちやいそうだから」

「どうにか？」

「うん……艦長の傷だつて、ちゃんとできていれば……」

俯いた美佳の髪を撫でて、奈波は穏やかな顔を見せた。

「あの時、美佳ちゃんは最善策をとった。だから艦長は壊死もなくああやっていられるんだよ？ 兄妹だよ、本当」

「……どういふこと？」

「お兄さんもずっと自分の事責めてるつて、技師長たちが話してた。そうやって自分のせいだつて……本当、兄妹つて似るんだね」

「それはなんか癪に障る……」

「えーなんで？」

「なんでも！」

ややくそとばかりに雑にポテトを口に入れ、むすつとした顔で咀嚼する彼女を見ながら奈波もまた一本を口に運ぶ。

「そうしてると、ハムスターみたいでかわいいよ」

膨らんだ頬をつつきながら微笑む彼女から、美佳はふいと顔をそらした。

観測ドーム

機器の再起動のために薄暗いドームへと足を踏み入れた水月は、ほんのりと光を放つ赤い石の前に立ち止まる。

「……………これのせい……………」

「憎い?」

背後から聞こえた声に見向きもせず、水月はケースに手をかざす。

「それはわかりません。でも一つだけ言えるのは、コレがなんなのか明かさないと武蔵は前へ進めない。だから、前に進むために」

「流石、冷静に物事を見る力があるわ」

彼女に並んだカレンは、その紅い瞳で石を見つめる。

「それはどういう意味ですか?」

「あら、単純な褒め言葉のつもりよ。そう受け取ってもらえる?」

「……………分かりました」

再起動した機器がドームへと明かりを灯す。

「本日より観測ドームの利用を再開します。担当員はタイムテーブルに従って部署についてください。繰り返しします——」

全艦に向けて放送をかけた彼女は、小さく息を吐くと星空を見上げた。

「……………でも、星は綺麗」

士官部屋群廊下

「ちよつと待ってくれ」

背後から呼び止められた来島が振り返ると、こちらへと駆けてくる泰平の姿が見えた。

「なんですか」

「いや、最近のアイツの様子を知りたくて」

「……………それなら私じゃなくて技師長か妹さんに聞いてください」

「でも部下からの視点で見られるのは君だけだろ？」

歩き去ろうとした彼女の足が止まる。

「……………」。私は、近くで見えてはいませんか」

肩越しに泰平を見て、来島は足早に去っていった。

「理沙ちゃん、やっぱり相当心にきてるのかな」

「見てたのか」

振り向きもせず口を開いた泰平の肩に、丹生が手を乗せる。

「あなたが気にしてるのは有賀くんじゃないんでしょう？」

「なんだ分かってたのか」

「あんだけちよつかい出してたら分かるって」

彼の視界に入った丹生は、来島が走り去った通路を見つめて柔らかく拳を握る。

「わたしはさ、リーダー見て報告するだけだから……でもやっぱり、有賀くんと理沙ちゃんはそのういかないんだよね」

「二人して真面目すぎるんだよ。あの規模の戦い、沈んでてもおかしくなかったんだ」

言ってから頭をかきむしった泰平は、わざと足音を立てながら部屋へと歩き出した。

「まったく、素直じゃないんだから……」

微笑んだ丹生は踵を返し、元来た道に戻る。

——それから2週間。

「わかったってどういうこと、水月？」

「そう、わかった。これの目的が」

輝きを残す赤い石を艦長以下9名が囲む。

「本当か？」

柑奈に合わせて疑問を口にした有賀へと頷くと、水月は石版の画像を映し出す。

「この石版に書かれていたのは、後世これを目にした人類への挑戦。その力を、その決意

を、そして過去を乗り越える強さを試していた」

「試していた……俺たちを」

「そうよ」

有賀の呟きに答えたカレンが前に出る。

「これはそのためのデバイス。ヤマトがイスカンダルへ向かった時に同乗させていたユリーシャのような役割を果たす装置なの。だからこんなに小さかった」

「……その推理に、石のサイズは関係あるのか？」

「大アリよ泰平。これまで人類が遭遇したアケーリアスの遺産はどれも惑星規模、こんな手に持てるものは無かった。そして、この石から放たれる経過を受信するのが、これを回収した惑星ミラストール」

「それは前も聞いた。その口ぶりでは、これはハナから持ち去られることを想定されたものという事だな」

「その通り、艦長。そして武蔵は試された。惑星ジルバの人々を救い、サルガツソーで危険を顧みず仲間を救い、そして過去の戦争で、『戦艦武蔵が死して終わる』という道を壊してみせた」

我が物顔で語る彼女の言葉に眉をひそめた来島が口を開く。

「でもそれをするためには、遙か未来を予期する必要があります。テレサじやあるまい

し、無限にある未来の中からそれを探すことは……」

「ええ。でも、この武蔵に乗せられたその時からデータベースを読み取って地球の歴史を知り、敵味方の識別を読み込めばできないことはない。あのミラストルという星は宇宙に散らばった端末から情報を集めるデータステーションなのよ」

「じゃあ、ミラストル以降の武蔵の旅は全て仕組まれたものって事ですか?」

「私はそう思っているわ、柑奈。でも武蔵がサルガツソーの付近を通ったのは紛れもない偶然。本来の段取りとは違うけれどその役割を果たしたということね」

泰平と目を合わせて首を傾げた有賀は、それで、と割り込む。

「結局のところ、俺たちに試練を与えて何がしたかったんだこれは」

「アケリーアス文明の最大の遺産へと案内するに足るか否かを判断するため、だと私は思うわ。根拠は簡単、武蔵がああ地球を脱した直後に座標が表示されたからよ」

「……それだけのために、か」

目を伏せて、床のモニターに映る地球を見つめる。

——ただ、そのためにだけに武蔵はあれだけの犠牲を払ったのか。

「最後の試練は、自分のために戦えるかを試したんじゃないかしら」

そんな彼の顔を見て、カレンは口を開く。

「武蔵はずっと、他の誰かのために戦っていた。でもあの時これは武蔵に、自分の身を守

「ための戦いを強いた」

「どうしてそんなことを……」

「大義のない戦いで、自分のエゴを押し通せるかを試したかった……とか」

有賀の顔つきが険しくなるのを横目で見た柑奈は、少し慌てて「でも」と入る。

「これで武蔵は全部の試練を抜けて、アケリーアスを観測できるって事ですよね」

「そういう事ね。でも石版には気になる記述があつて、『種まく方舟をこの宇宙へと引き出す』つてあるのよ」

「つまり、アケリーアスはこの宇宙に無いと……」

彼女の言葉に頷くと、カレンはモニターの表示を変えた。

「ええ。指定されたこの宙域は銀河間空間で惑星はおろか小惑星すら無いわ」

「行きや分かるなら行った方が早い」

笑顔の泰平に頷いたカレンは艦長へと視線を移す。

「なら行こう。長かったこの旅の、最後の場所へ」

エンジンに火が灯る。

ほとんどの傷を治した武蔵は、ワームホールへと突入した。

向かうは銀河系外縁部。そんな彼らを見つめ続ける艦隊が一つ――。

— 第22話 「神秘への道」 —

第七章 踏査編

第23話 「アケーリアスの遺産」

「ワープ終了。目標座標です」

纏う氷を砕き、武蔵は漆黒の中佇む。

「周囲の時空が安定してない……示されたルートで確実にワープしないと次元断層に捕まっていたところですよ」

柑奈の言葉を背に前へと向き直る有賀は、そのまま観測ドームを見下ろした。

カレンは水月と共にドームへと降り、紅い石の推移を観測している。

『柑奈、そっちに異常はない?』

「今のところは。水月の方は?」

『こつちも大きな動きは。常に何かを受信してるっぽいんだけど……』

「わかった。モニターと記録を続けて」

『了解』

画面の向こうで敬礼をする水月。

そんな彼女が映る画面を最小化すると、ドーム付近を注視した。

——何か集まってる……。

その違和感に気づいた刹那、ドームが閃光に包まれた。

光は徐々に薄れていき、代わりに宇宙にまで飛び出す強い光の線が形成される。

「あの光……もしかして」

モニターへ向き直った柑奈は光の向かう先を表示し、次元断層の観測情報と重ねた。

「あの光、いやあのエネルギー体は次元断層に向かって照射されています！」

「何……!?」

正面に向き直った近藤の目には、露わになる次元断層の狭間と稲妻。

「三原、退避用意。次元震が来る……総員衝撃に備え！」

艦を襲う揺れに細かく姿勢制御ロケットを噴射して姿勢保持を行う武蔵。その眼前

では次元断層がその口を開き——。

——もう一つの宇宙が顔を出した。

「あれは……銀河系……!?」

見開いた有賀の瞳には、直後波打つように現れる青い惑星が映る。

二本の帯の交点から光を放ち、雲と青い海が見えるその星は、記録にあるテレザートよりも美しい。

その口を閉じた断層が消えた後、青い星は初めからそこにあつたように浮かんでい

た。

「あれが……アケーリアス」

『こちら観測ドーム。モニターに文面が表示されました。即席訳……これこそ我らが神祕。全ての宇宙において唯一の種まく方舟である。これは不可侵の星、お前たちはこれを見せるに足る文明の者。我らの後継となり得る者達である。以上です』

「水月、その訳は確かなの？」

『確かよ。私が保証する、彼女は間違った意味や順番では言っていない』

「……ありがとうございます、カレンさん」

通信を終えた柑奈はモニターに断層内の静止画を出し、顎に手を当てて考えにふけっていた。

多次元宇宙論

それは異なる次元に、この宇宙との連続性を持たない全く別の宇宙があると考えられる理論である。

「——で、柑奈はつまり、アケーリアスはそこから出てきたと思うわけ？」

「そう。あの星はこの多次元宇宙を一定の周期で行き来して周回する唯一無二の星。そしてそれを呼び出した石は、その周期を整えるためのものじゃないかって」

それに対して、水月は懐疑的な態度をとる。

「いや確かに多次元宇宙を一定の周期で行き来できるなら大規模な装置も必要だろうけど……その周期によっても変わるでしょう？　もしかしたらアケリーアスみたいな星はこの宇宙にもあるかもしれないし」

「多次元宇宙自体、証明のしようがないからね……外に出たわけじゃあるまいし。でもさ」

不意に顔を近づける彼女を避けるように仰け反る。

顔をひきつらせる水月だが、柑奈はそんなことを気にしていないようだった。

「もしテレザートの人たちが、多次元宇宙にある違う歴史を歩んだ地球の姿を見ていたとしたら？」

「……………はあ？」

「高次元世界から帰ってきた古代さんの記録だと、あらゆる未来を見てきたって言うた。なら、そのあらゆる選択は既に多次元宇宙の、それぞれ違う地球でそれぞれのヤマトが、古代さんが選んだ選択肢かもしれない」

「高次元世界にいるテレザートの人たち……つまりテレサは、多次元宇宙を同時に観測できるって？」

「そう。こっちは高次元世界を観測できなくても、高次元世界から低い次元のこっち側

は見られるはず。だから時間の流れも可視化されて、古代さんはあらゆる次元のヤマトの旅路を見られた」

「その考え自体は否定しないけど……飛躍しすぎじゃない？ 無限に並行世界があるなら、それこそ無限に宇宙がある事になる。2199年のヤマト発進を分岐点にしたとしても、その後の旅路はまた無限に選択肢があつたはず。次元空間にそれだけのキャパシティがある？」

「それが無いから、枝葉は切られるのかも。例えばヤマトが帰つてこなかつた世界だったり、ガミラスが襲つてこない世界、白色彗星帝国からヤマトが帰つてこない世界まで色々ある。その可能性には未来がないから……」

「テレサは古代さんを帰した……ヤマトを使って迎えに来させた……分からなくはないけど、やっぱり妄想の域を出ないよ」

はにかみながら指摘する彼女の姿に首を傾げ、柑奈は「んー」と呻る。

「やっぱり科学者が言う事じゃないよね」

「たまにはそんな思考学習はしてもいいんじゃない？」

観測装置のパネルを操作して笑いかけた水月に笑顔を返し、柑奈はまた作業に戻る。

彼女達が見つめるモニターには、あの星の組成が映し出されていた。

大気成分に危険性が無いことを確認した武蔵は遂にアケリアスへの着陸を決めた。水色に輝くリングを通り過ぎ、艦体を上げて断熱圧縮の熱を耐える。

「やっぱりあのリング、人工太陽……」

「惑星内に進入。安定翼展開、姿勢制御」

艦体の角度を合わせ、艦は大地の隙間を縫っていく。

「艦首正面200キロに浮遊大陸。海面との相対高度は1万2千」

「浮遊大陸を回避します。ヨーソロー」

窓の外では、宙に浮く大陸がストレスで通り過ぎていくのが見えた。

「着水用意」

高度が下がると同時に安定翼を閉じ、速度を落としながらエンジンの風で海水を巻き上げる。

そのままの勢いで艦底部から水の中へと沈め、喫水線から上を海上に露出した状態で静止した。

「無人探査機発艦。回収班は海水サンプルを採取してください」

柑奈の声でカタパルトから飛び出した黒い機体は一路、浮遊大陸を目指す。

艦のハッチから出たクルー達はそれぞれに海水についての調査を始めた。

「……艦長、ごく僅かですが、本艦のいる座標の海水面は他の地点より高いようです」

「それはどういう事だ、気象長」

「本艦の慣性重力に過敏に反応しているのかもしれない。数値は誤差の範囲ではありませんが……」

「柵橋さん、その数値をこちらに回していただけますか？」

静聴していた柑奈へとデータを回し、柵橋は再び観測作業に入る。

一方で柑奈は、アケーリアスと武蔵、そして地球のアイコンと数値を見てパネルを操作していた。

「この調子だと戦術科は今回は暇そうだな。なあ、来島」

「ええ、そうですね」

「……………いや、そうでもないかも」

低い声色で告げた丹生を振り向くと、彼女はレーダーを凝視したまま続ける。

「惑星軌道上に反応多数。熱源あり、艦艇とされます」

「ゼロ、発艦せよ。惑星上空の艦艇を視認し報告を求めろ」

淡々とした有賀の指示に従い、カタパルトから青い空へと銀色の機体が飛び上がる。

彗星エンジンから伸びる炎を見送り、艦内に警報音が鳴り響いた。

「総員第一種戦闘配置。繰り返し返す、総員第一種戦闘配置」

「コスモゼロ、成層圏へと到達。光学カメラ視認域に入りました。モニターに出します」

漆黒の空に、光る輪を背にして佇むそれは、総数20隻は下らないかという大艦隊であつた。

「どことなく、似てる気がするな」

その姿を見た有賀は思わず眩く。

戦艦4隻を筆頭に見えるその艦影の陣形や艦容は、僅かにはあるが地球のそれに似ているように感じられた。

「壁画にあるみたいだな単純な陣形だな……」

「ああ。なんでだろうな、ガミラスや他の星の艦と比べて、アレは地球に似すぎている」
リボルバーのような形をとる砲身、旧来の兵器を思わせる装甲の構造や艦体形状はガミラス、ガトランティスをはじめとした異星文明の艦艇のどれよりも地球のそれに酷似していた。

「そもそもあの艦隊、ここにいたのは偶然なのか？」

そんな有賀の問いは、入電というかたちで解決する。

「解説、第二艦橋へ回します」

『了解。……これ、地球のヒエログリフと文字の配列パターンがまるつきり一緒だから解説にはそんなに時間かからないと思う』

水月に頷いた柑奈だが、直後に小さく首をかしげる。

——確かにガミラス語も英語と似ていたけど、違う星の文明の文字列が地球の古代文明と全く同じなんてことありえるの……？

その間にも艦隊は海の星へと迫ってきていた。

『解読終了、モニターに全文出します！』

水月の声の直後、柑奈のモニターにその内容が表示される。

『我々はディングル。母なる星を追われ、生き長らえたものたちの末裔である』

——第23話 「アケーリアスの遺産」——

第24話 「青き星の子供たち」

「……母なる星を追われた……?」

電文を読んだ有賀は、小さく呟いて顎に手を当てた。

『この文は解読が恐ろしく簡単で、地球の超古代文明の文法とほとんど同じだったんです』

「そりや広い宇宙の中だし、そういうこともあるんじゃないの?」

『そうだけど……もしかしたら、元々地球にいたのかもしれないって』

「それってどういう確率なの……?」

柑奈の視線に俯く水月。

有賀は窓の外に見える青い海を見つめて天を仰ぐ。

「ヤツらの目的はなんだ?」

「この星を手に入れることじゃないんですか?」

「ああ。でもたかが20隻程度の艦隊で星一つ手に入れようなんてマトモじゃない」

「ヤマトと最初に遭遇したガトランティスも少数の艦隊で星一つ奪おうとしてましたし、自艦隊に自信があればそれも一つの戦略では?」

「……その割には、降下してこないよな」

艦隊は、この星に攻撃するのを迷っているかのようにそこにとどまっていた。

「本艦を狙ってはいるみたいですが……なぜ攻撃してこないんでしょう……」

その疑問は、採取された海水のサンプルによって明らかとなる。

「柑奈、この星の海水には微量のトリチウムがある。多分地下にはもつと高純度のトリチウムが……」

「下手に攻撃したら、トリチウムが爆発して星ごと無くなるってこと」

『そういうこと。この星を盾にして逃げれば武蔵は敵の攻撃に晒されずに——』

「それはできない。敵の目的が分からない以上、この星を盾にして逃げる事はしない」

言いながら振り向いた有賀は、モニターに映るディングル艦隊を見ながら一ノ瀬へと目を配る。

「一ノ瀬、返答を」

彼の指示に艦長を仰いだ一ノ瀬は、その顔を見て返答を打ち込む。

『我々は地球連邦防衛軍所属。今しがたこの星を残した文明より、彼らの後継足り得るものとして命を受けたものである。その命に従い、貴国の目的を問う』以上だ」

「そんなこと言うと、これから狙われちゃいますよ?」

「目的を聞き出すなら、こちらから狙わせることは出しておくべきだろう」

「それはそうですけど……」

その直後、返答を示すアラートが鳴り響き文面はすぐに水月へと渡された。

『返答。「同郷のものよ。かの星は我らのもの、返してもらおう」』

「軌道上の敵艦、降下してきますー！」

「トリチウムに引火したら星ごと消えるんだぞ……アイツら何考えてやがる……泰平！」

「分かってる、緊急発進ー！」

エンジンの爆風で水を巻き上げた武蔵は、纏う海水を振り払って空へと飛び立つ。

同じ頃、浮遊大陸を飛び立ったブラックバードと敵を観測していたコスモゼロも行動を開始、大気圏を離脱して敵艦隊を狙う。

「航空隊、全機発艦。敵艦の殲滅を主目的として攻撃に当たれ。敵艦の攻撃は本艦の波動防護弾を用いて守り切る」

艦底のカタパルトを蹴ったファルコンとタイガーの編隊は、武蔵から離れて惑星を離脱する。

しかし攻撃命令はなく、機体は艦隊に肉薄して飛び去った。

「先制攻撃をかけるわけにはいかない。両舷、波動防護弾を装填して待機」

惑星の外を走るリングを背にした敵艦隊を睨み、有賀は拳を握る。

——今度は守りきる。必ず。

艦橋に鳴り響く警報音と共に艦隊から放たれたミサイルとビームに対して武蔵は両舷のミサイル発射管から16発の弾頭を放ち正面に防壁を展開、敵の攻撃は全てそこに吸い込まれた。

「泰平、軌道修正下げ角20度！」

「おうよ！」

「航空隊、敵艦隊を攻撃せよ。波動防護弾次弾装填！ 一発も惑星に通すなよ」

「分かってます。二度とハマはしません」

防壁の下から抜け出した武蔵は、航空隊のミサイルとタイミングを合わせて主砲を放つ。

上下から攻撃を受けた艦隊は黒煙を上げる艦を後方に下げて無傷の艦が第2波攻撃を撃ち込んできた。

それを2発の防護弾で防いだ武蔵は、爆炎に隠れて急旋回をかける。

一方、散開した航空隊は武蔵とアケリアスに攻撃が及ばぬように後方から対空砲火を避けて着実に艦橋と武装を無力化していく。

「……なんだ、壊れた艦は後ろに……」

宗方は、その動きに違和感を覚えていた。

カレル163宙域に展開してヤマトを撃沈寸前まで追い込んだドメル艦隊もまた、損傷した艦を後方に下げて後衛と交代させていた。

だが、それは100隻を超える大艦隊あつての戦術だ。今回のデインギル艦隊はたかだか20隻。それで損傷した艦を退げるのは、単純に戦力を削ぐことに繋がる。

「……………武蔵、有賀戦術長。気になることがある」

航空隊が戦闘を繰り広げる閃光を尻目に、武蔵は敵の射線を惑星からそらすべく最大速度で進んでいた。

そのどちらからも離れた位置に静止していた漆黒の機体のモニターに光が灯る。

『ミッション受領、行動開始』

エンジンに火を灯した機体は、艦隊の遥か上を抜けて後退する艦を追う。

「ブラックバードから信号受信、映像出します」

柑奈の声の後、モニターにはカメラに収まらないほどの巨大な艦の姿が見えた。

黒煙を上げて撤退した艦は巨艦へと姿を消し、代わりに無傷の駆逐艦が飛び出している。

「艦を乗せられる……………空母？」

「こんなサイズの艦を……………どんな技術だこれ……………」

泰平と有賀の声の直後、ブラックバードの映像が急旋回して途切れる。

「ブラックバード、緊急離脱信号を残して急旋回しました。……これは……何かが機体を追跡している……?」

柑奈はパネルから、コクピットに内蔵されたサブカメラを起動して様子を確認した。

機体は旋回を重ねながらもバルカンを撃ち、自らを追うミサイルを迎撃している。が、その弾は貫通せず弾かれ、やがて機体の中腹に突き刺さった。

不発かと思われたそれはスイッチを入れるように全長を縮めると、機体は融解し内部から爆散したのである。

「ブラックバード、シグナルロスト!」

『戦術長、逃げた敵を追ったタイガー2機が敵の要塞に近づいてる!』

「何……すぐに喚び戻せ! 航空隊全機に通達、敵巨大要塞に接近したブラックバードが先程撃墜された。各機、離脱する敵艦の追撃は避け現有戦力の掃討に努めよ!」

席に座りなおした有賀は、席の下から端末を出して要塞に近づくコスモタイガーの座標を確認した。

——近づきすぎだ……!

彼の予感の的中し、敵要塞が2機に先程と同じミサイルを放つ。

ベテランパイロットである2人は撃墜が不可能と判断すると、すぐに速度を上げて敵

要塞に接近するコースを取った。

自ら放ったミサイルで自滅させる魂胆であるのは明確。

——しかし。

『隊長、敵要塞が何か防護幕みたいなもんを……ぐああああああ——』

そんな通信が第一艦橋に鳴り響く。

拳を握った有賀はすぐに振り向き、棚橋へと口を開いた。

「棚橋さん、最大望遠で敵要塞を映してください」

「了解」

モニターに映された要塞は、先程の映像とは異なる様相を示していた。

その両端から、円盤状にピンク色のビーム幕が展開されていたのである。

ビーム幕を避けたコスモタイガーは漆黒のミサイルの餌食となり、宇宙に消える。

「あれもしかして……ニユートリノ……？」

ビーム幕の様子を凝視した柑奈が呟いた直後、それは消え去った。

「ニユートリノ？」

「はい。多分、透過しないように何らかの処理を施しているんだと思いますが」

「透過……？」

的を得ないと聞き返した有賀に頷くと、柑奈は手振りを交えて説明を始める。

「ニュートリノは相互作用が弱い物質で、普通にしていけば超高濃度でもあらゆる物質を透過して敵機を破壊するなんてことはできません。それでも彼らは、ニュートリノを陽電子砲のように可視化して、破壊力を付与した……そうできるだけの技術が、彼らにはあるんだと思います」

「でも、わざわざニュートリノを破壊光線に変えてまで使う理由はあるのか？」

「それは分かりません……なぜ、そんな回りくどいことをしているのか……」

俯く彼女に視線を向け、近藤は有賀へと目を移し立ち上がる。

「考えるのはあとだ。今はこの状況を切り抜ける」

「了解。……しかし艦長、あの空母がいる限り、現状本艦に勝ち目は……」

「……俺たちの今の戦闘目的は、惑星アケーリアスをディングルの手から守ることだ。敵を退けられないなら、星を動かせないか？」

「……はい？」

有賀の頓狂な声が響く。

「いくらなんでもそれは……」

「……できるかも……」

「——はあ!?？」

柑奈の眩きに反応した彼を無視して、彼女はパネルを操作し続ける。

「やっぱり。本艦進路上に、まだ閉じきつてない次元の切れ目があります。これを惑星レベルまで広げることができれば、あるいは」

「具体的には？」

「……本艦の全火力をこの切れ目に叩き込み、次元震を誘発させます。ただ……火力不足で失敗する可能性も十分にありえますが……」

「でも」

顔を上げた柑奈の視線は、来島とアイコンタクトをとる有賀に向けられていた。

「やってみなきや分からないだろ」

ニヤリと笑う彼に、これまでのことを思い出して他のクルーにも笑顔が見える。

「じゃあやるか。最大船速、ヨーソロー！」

泰平の号令で武蔵は加速し、次元の狭間が記録された地点へと向かった。

「こちら武蔵、航空隊へ」

『本艦はただいまより、惑星アケリアス送還のため行動を開始する。航空隊は敵艦隊を現状位置で足止めせよ』

「おーおー、中々無茶言いやがる」

コスモファルコンのコクピットでそう呟き、宗方は笑う。

第25話 「遙か遠き起源の惑星」

何も無いはずの宇宙空間に、爆発が生まれる。

口を開ける時空の壁に叩きつけられた実弾が、振動を生む。

「次元振動率3%、まだ足りません！」

「ありつたけ撃ち込め！」

波状に行われていた攻撃はいつしか隙間なく行われ、振動率を合わせられた弾頭はわずかながらもこの宇宙に微振動を与えていた。

「弾頭、既に搭載数のうち58%を消費しました。このままでは、1時間経たずに使い切ります」

「次元振動率15%……何が足りないの……できることは全部……」

攻撃は着実に命中している。足りないのは……。

——時空の扉をこじ開ける破壊力か。

まっすぐ前を見つめた有賀は、ふと一つのことばに思い当たり振り返った。

「柑奈」

「はい、なんですか？」

「波動防護弾は、重力子スプレッドをもとに作ったと言っていたな」

「確かにそう言いましたけど……」

「じゃあ、攻撃を圧縮して撃ち出す目的で使うことはできるか」

「……………はい？」

一瞬キョトンとして固まった彼女は、すぐにその意味に思い当たり思考を始める。

「……………できると思います。今のままではなく、エネルギーの放出方法を変えればあるいは。ただし、実弾でないのが絶対条件です」

「分かってるよ」

笑顔で答えた有賀は、そのまま機関長へと呼びかける。

「機関長、波動エンジンのエネルギーを主砲に回してください。主砲の薬室が限界値になるくらいまで」

「暴発しても知らないぞ」

「大丈夫です。来島、主砲のタイミングを俺に渡してくれ。その代わりに、来島には任せた
い事がある」

「なんですか？」

ニヤリと笑うと、彼はすぐにキーを打ち内容を来島へと渡した。

「お前以外には任せられない。精密さを求められる作業だ」

その会話を背に、近藤は一ノ瀬を一瞥して頷き、彼は直ぐにどこかに打電を行う。
「分かりました」

強く頷く彼女から柑奈へ視線を戻し、問いを投げ――。

「4発です」

「……ありがとう」

そんなの必要無いと言うように、彼女はまつすぐ有賀を見てそう答えた。

「来島、波動防護弾は4発。増幅率が最大になる位置に配置してくれ」

「言われなくても、分かっています」

時空の裂け目に対して正確に横腹を向けた武蔵の主砲が一斉に右を向く。

右舷の8連装ミサイル管が一つ飛びで4門開放され、武蔵はエンジンを止め完全に静止した。

「主砲へのエネルギー、現在全砲塔99%」

「……まだ足りない」

「100%、まだ行くのか」

「まだです」

機関長の問いに答え、有賀はアラート表示が出始めたモニターを見つめる。

「エネルギー、110%！」

「エネルギー現状数値で維持、エンジンは最大出力噴射用意！ 来島、任せた」
「了解……発射！」

白煙と共に飛び出した弾頭は直線を描くように並ぶと、そのままそれぞれの距離で起爆してきながら重力子スプレッドのように雲状に広がる。

「ここに撃てば、理論的には4段階の増幅が可能なはずです。増幅率が最大になるのは10秒後」

「わかった。発射10秒前、重力アンカーで船体を現宙域に固定する」

「敵艦隊、航空隊の弾幕を抜け始めました！」

丹生からの報告に一瞬振り向きかけたが、前を向いたままで目を開く。

「構わない。主砲、誤差修正。一ノ瀬、航空隊に、敵艦隊の追撃を中断しアケリアスの裏側に退避するよう打電してくれ」

「了解」

レーダーには編隊のまま方向を変える航空隊の姿が映る。

「航空隊、全機退避軌道に入りました！」

「よし……主砲、発射！」

号令に合わせて青く輝いた砲口から解放された陽電子は、砲口を裂きつつも太く強く進み、一つ、また一つと幕を潜るたびに圧縮され、最後の幕を越えるとそれは波動砲に

も等しい威力となり、次元の裂け目へと突入した。

放射を終えた主砲は全ての砲身から爆破、砲塔は割れ、砲身は砕けとても砲撃が出来る状態ではなかった。

刹那、武蔵の観測装置が何かを感知する。それは。

「次元振動を感知、裂け目が開きます！」

「緊急発進、この場を離脱する！」

近藤の声に加速をかけるものの、武蔵の加速はワープには遥かに届かない。

目を見開くように急速に開き、稲妻と共にもう一つの宇宙を露わにした次元の裂け目はアケリーリアスを含むこの場の全てを飲み込まんとしていた。

「武蔵の相対位置が進んでない……引き込まれています！」

「くそつ、エンジンは!?？」

「出力が足りない……補助エンジンまで使っているが逃げられないぞ」

武蔵の主砲から昇る黒煙も、アケリーリアスも、離脱を図るディンギル艦隊ですらも吸い込まれていく。

アケリーリアスの陰に隠れて離脱する航空隊は巨大な惑星の存在によりほとんどその影響を受けておらず、それぞれ機体のリーダーで武蔵を観測できるギリギリの範囲まで退避に成功していた。

「おいおい、星が吸い込まれてるぞ……」

『隊長、フネは大丈夫ですかね』

「聞いてる暇あったら神でも仏でも祈っとけ」

『はい！……ん、なんですかね、あれ』

通信の声に顔を上げると、視界の端に光るものがあつた。

「なんだ……あれ」

「艦前方に重力場の歪み……ワープアウト反応です！」

「当該座標から急速に近づく物体あり。識別は……」

『お久しぶりです、武蔵の皆さん。近藤艦長からの要請により、貴艦離脱の後押しをいたします』

彼らの前に現れた純白の艦は急旋回をかけて武蔵にエンジンを向けると、その船体に牽引ビームとロケットアンカーを撃ち込み全てのエンジンを噴射した。

「アカギか……」

有賀の呟きにニヤリと笑うと、近藤は機関長へと呼びかける。

「エンジン、現在可能な最大出力へ。アカギの補助があれば逃げられる」

「了解、この後エンジンが壊れても構わん。やれ航海長」

「……はい！」

エンジンを噴かした武蔵はアカギと歩調を合わせて背後を通過するアケリーアスに別れを告げ、航空隊の待つ宙域へと前進する。

あの時、ヤマトを救ったアンドロメダのように。

救われたヤマトのクルーは、今の武蔵のクルーと同じ心情だったのだろうか。そんなことを思いながら。

リーダーには開いた口に飲み込まれるデインギル艦隊の姿が映されていた。

アケリーアスを飲み込んだ口は閉じ、後に残ったのは何も無い静かな宇宙。

アカギの艦橋で肩の力を抜いた蔵中と金浦は、数秒経って通信を開く。

「アカギより武蔵へ。無事ですか？」

『こちら武蔵。こちらに異常はありません。助かりました、蔵中さん』

「よかった……ロケットアンカーを解除します」

武蔵の船体から離れたロケットアンカーを格納し、帰投する武蔵の艦載機を見送る。

「二人とも、武蔵に行こうか」

それを見届けた冴島は立ち上がり言うと、エレベーターへと歩き出す。

3人に乗せたコスモシーガルが飛行甲板から飛び立ち、武蔵からの誘導に従って第三

格納庫へと向かった。

途中、不自然にそこだけ大きく破損した主砲を横目に修復跡の残る船体を舐めて着艦する。

『着艦確認。所定の位置へ移動します』

オペレーターの声に従って艦内に引き込まれ、機密シヤッターが下りきった格納庫には近藤艦長以下、主要士官が立っていた。

「ご協力感謝いたします」

「武蔵が任務を果たしたと聞けば、我々も放置してはいられません。武蔵が無事に帰還しなければアケリーリアスの情報は地球にもたらされないのですから」

差し出された近藤の手を取った冴島は、最後にあつた時よりたくましくなったクルー達を見回す。

「いい艦になりましたね、近藤艦長」

「はい。わたしはこの通りですが」

「っ……」

羽織っていた上着を開いて無くなった左腕を見せると、アカギの3人は言葉を呑んだ。

「なに、大したことはありません。ではこちらへ、情報共有といきましょう」

「——では、そのミラストルという惑星で入手したこの石が、武蔵をここまで導いたと観測ドームで輝きを失った石を囲み、冴島は近藤の言葉を反芻した。」

「こんなものが観測装置の一部ですか……」

「それと私見ですが、アケーリアスは多次元宇宙を歩き来しているものと思います」

蔵中の呟きに続いた冴島の一言に、冴島は考え込む。

「確かにアケーリアスが戻る時、既知の次元断層と違って向こう側にも宇宙が見えた。」

その推理は間違っていないのかもしれない」

「でもだとすると、その石で出さないと行き来できないんじゃない……」

「そうとも言えないわ」

いつの間にドームに入っていたのか、カレンの声に全員が振り返る。

「アレは石の干渉が無くても周期的に出現するの。この石は、その周期を直すためのもの」

「それは石版から？」

「ええ。それにガミラスやゼムリア、地球、それからラーゴラスの古代神話からもそれは明らかよ」

「待って、それだと……今回武蔵がアケーリアスを戻したことでその周期は狂ったまま

なんじゃ……」

蔵中の一言でその場の全員が息を呑む。

「もしかしたら、バタフライエフェクトみたいにもっと大きな歪みになるかもしれない」
「柑奈、バタフライエフェクトってというのは……?」

有賀の問いにため息をついた柑奈は「いいですか?」と一言入れて続ける。

「1匹の蝶が飛ばたい風が、巡り巡って地球の反対側で大きな竜巻を起こす事の例えです。小さな事がいずれ大きな事になるって事ですよ」

「なるほどな。そうなる今回と今回は惑星一つだったけど、次は別の宇宙から銀河一つ出てくるかもしれないってことか」

「それも有り得ますね……」

場に重苦しい空気が流れる。

直後に口を開いたのは近藤であった。

「今考えても仕方ない。その時の地球は今より進化してるし、俺たちはその時の最善策を取った。ただそれだけの事だ」

それに領いた冴島は、ドームの外を見つめて続ける。

「武蔵は強い艦になりました。ヤマトの意志を継ぐ程の、強い艦に」

振り返って、有賀の目を見る。

「我々も努力しなくてはなりませんね」

「光荣です」

頭を下げる有賀から目を逸らし、彼は近藤へと向き直る。

「武蔵は地球へ？」

「はい。アカギは戻らないのですか」

「本艦は武蔵の任務完遂を確認したので、手負いの貴艦をバラン星へと送り届けた後別の任務へと赴きます」

「そうですか。では、また会うこともあるでしょうな」

「ええ。そうですね」

敬礼をした3人に返礼し、彼らは観測ドームを後にした。

武蔵から発艦したシーガルがアカギへと戻ったのを確認して、両艦はエンジンに火を灯す。

後部デッキの窓からアケリーリアスが消えた方角を見つめていた有賀の元に柑奈が近づいてくる。

「どうした？」

「一緒にいたくなっただけです」

2人の距離は以前より近く、その顔は満たされていた。

「遠い星でしたね、アケリーアスは」

「ああ。結局、神秘の星に人類は手が届かないんだ」

そして手すりを持った有賀は、大きく息を吐くと柑奈の目を見つめる。

「なあ」

「なんですか？」

「……ずっと、近くにいてくれるか」

「ふふつ……最初からそのつもりですよ。私、義哉さんと一緒にいたいです」

「……ありがとう、柑奈」

優しい笑顔と共に指を絡ませた二人は、星の海原へと心を解かす。

—— やつと安心できたよ、お兄。

壁に背を預けていた美佳は、一人歩き出した。

「お兄のバカ……一体何年かかったんだか」

エレベーターの中で天井を仰ぎ、大きく息を吐く。

気づけば目からこぼれていた涙の理由も分からぬまま、彼女は肩の力を抜いた。

「奈波とごはん、食べようかな」

端末を取り出した美佳は、親友へといつも通り簡単なメッセージを送ってエレベーターを出たのであった。

艦長室

「ようやく肩の荷が下りましたかな」

「ああ。本当に」

谷村と酒を酌み交わした近藤は、背もたれに身体を預けて宇宙の映るモニターを見る。

「そろそろ、潮時だな」

「あとは彼に任せるのですか」

「そのつもりだが……君はどう思う」

その問いに谷村は笑顔で答える。

「彼以外にはないでしょう」

「では、あとは彼に任せるか」

どこか満足げな顔で椅子にもたれた近藤に、グラスを置いた谷村は問いを投げる。

「そういえば、有賀と佐伯はどうなったのでしょうか」

「はははっ、君も気になっていたのか」

「それはそうでしょう。あの子たちが気にしていましたからね」

「まあ、彼らが結婚式を挙げるとしたら是非とも呼んでもらいたいな」

そして2人笑い出す。

平和なひととき、今この時を嘯みしめるように2人はグラスに口をつけるのである。宇宙行く艦は母なる星を目指す。

傷を癒し、旅の記憶を思い返しながら。

様々な思いを乗せて。

2隻の巨艦は青い航跡を残して漆黒へと消えていく。

これが2年にわたる長き旅の終わり。

そして新たな未来への幕開けなのである。

青く美しい星へ帰還を果たした武蔵は、次なる旅を待つ。

そしてクルー達は、それぞれ帰りを待つ者達の元へと戻っていく。

——第25話 「遙か遠き起源の惑星」——

第26話 「帰還。そして新たな——」

風いだ海に白波を立てて巨艦が着水する。

ドックに入りタラップを下ろした武蔵に別れを告げたクルー達はそれぞれ帰路につく。

——その日から、1ヶ月。

「だいぶ遅くなっちゃった」

「うん。でも良かった」

「本当だよお兄」

夕焼けに染められた海岸沿いの道を歩く3人の話し声が聞こえる。

有賀と柑奈の足を遮るように前へ出た美佳は、2人に笑いかける。

「あんなにガツチガチなの見たこと無かった」

「ふふっ、ホントにね」

「正座してさ、あんな……くふふっ……『お嬢さんを僕にください』だって……くっ、くっ……」

「おい、何がおかしい」

腹を抱えて肩を震わせる妹を睨む。

彼女はそんな兄を見上げ、大袈裟な手振りと共に演説する。

「いやいやお兄、普通に考えなよ。5年もだよ？ 5年も柑奈さんと一緒にいるんだよ

？ 当然柑奈さんからお兄のこと聞いてないわけじゃないじゃん」

「……？」

「つまり、そんなお兄があんなにガチガチになるまでもなく、ご両親は結婚を認めてたつて事だよ。そうでもないの見知らぬ男のところに通わせたりしないって。ねっ？」

「ねー」

女性2人、目を合わせて笑い合う。

——なんだよ2人して。

むくれた顔で顔を逸らした有賀の目には、夕陽に飛び立つ駆逐艦が映った。

衝突防止灯を輝かせた影から海へと視線を落とした彼に、柑奈と美佳の会話が届く。

「そういえば、柑奈さんの事なんて呼べばいいんだろ……」

「美佳ちゃんの好きないように呼んでいいよ？」

「んーじゃあ……やつぱりお姉ちゃんかな。優しいお姉さんって感じ」

「そっか。私、美佳ちゃんのお姉さんなんだ」

「そうそう。これからよろしくね、お姉ちゃん」

2人並んで歩き出す彼女達の背中を見て自然と笑みが溢れる。

「お兄、置いてくよー?」

「ああ、今行く」

その2人と歩みを合わせた有賀は、新しく家族になる彼女の横顔を見つめていた。

「そういえば、引越していつ?」

食卓に並んだ料理に箸を伸ばしながら美佳が口を開く。

「色々あるし、来週くらいかなって。義哉さん、お部屋って……」

「部屋なら余ってるよ。好きなどこ使ってくれ」

「えっ? お兄と一緒にの部屋じゃないの?」

「いや、それは柑奈が嫌だろ」

「でも多分、義哉さんのお部屋にいる時間が長いかもですよ?」

「それならそれでいいけど」

「ふうん……」

含みのある笑顔で2人を見つめた美佳は、「じゃあ」と一つ提案する。

「結局部屋一緒にしても変わんくない?」

「そういう問題じゃなくないか」

「違うの?」

「違う」

言い聞かせるように言い切った有賀。

それにむくれる美佳の頭を撫でて、柑奈は微笑みながら口を開く。

「でも、挨拶が遅れたのも分かってくれたし良かった……」

「それは……すまない。俺のわがままで」

「いいえ。わがままではなく、責務でした。亡くなったクルーのご家族への報告……義

哉さんがやりたいと思った事ですから」

彼の横に立ち手を重ねた柑奈は、見上げる彼に笑いかける。

「義哉さんの思いは、私の思いでもあります」

「……ありがとう」

「今日から私、義哉さんの妻ですから」

少し恥じらいを込めて放たれた言葉で、部屋には少し暖かい風が吹いた気がした。

翌日。

武蔵のドームから外された赤い石について確認したいことがあると連絡が入り、柑奈、有賀、美佳は科学研究棟へと向かった。

「水月」

一室に入ると、水月が彼らの方を向く。

側にはカレンの姿もあり、彼女は何かを考えているようだった。

「どうしたの？」

「それが……これだよ」

指差した方を見ると、赤い石が粉々に砕け散っていた。

「……どうしたの、これ」

「分かんないけど……今日来てみたらこの通り」

「ひとりでに？」

「うん、そう」

破片の一つを手にとると、柑奈は眉をひそめて次の瞬間コンピューターの方へと駆け出した。

キーボードを叩くと不明なログがあり、それを展開する。

「やっぱり……!」

古代アケリアスの文字で表示されたその文は、なんらかの警告文であるようだった。

「警告ね」

「はい。解読すればもしかしたら……」

「このくらいならできるとも……ちよつと時間くれるかしら」

「お願いします、カレンさん」

彼女の隣から歩いて水月の元へ来た柑奈は、石のかけらを見つめる。

「あの星にとつて武蔵の役目が終わったから、こうなったのかな」

「どうだろう。でもこれで、私達はまた自由に飛べる」

横目に見る親友の顔は、水月にはとても輝いて見えた。

「そうだね」

微笑んだ刹那、カレンが2人を呼ぶ。

「分かったわ！ あの石が割れたのはお役御免だったからじゃない。この宇宙にアケ

リアスを呼ぶ必要がなくなったから割れたのよ」

「どういう事です?」

「つまり、未来10年から20年以内にアケリアスはまた現れるということね」

「また、現れる……」

人差し指を立てて解説するカレンとは対照的に、柑奈の視線は下を向いていた。

「それなら話が早い」

そんな彼女の肩を叩き、有賀は笑顔を見せる。

「近いうちに現れるなら、また調査でもなんでもできるし歪みも大きなものにはならな

「いはずだ」

「気にしてたんだ、お兄」

「まあ一応な」

妹の横槍にはにかむ。

「けれど、わざわざ地球の武蔵に向かっての警告って事は……」

「その時はその時だ。なに、なんとでもなるさ」

彼の言葉に笑顔になった柑奈はそのまま頷く。

「はい、そうですね」

肩に乗せられた彼の手に手を重ね、彼女は微笑んだ。

——それから2週間。

「……退役、ですか？」

武蔵の眼前にあるドックの栈橋から艦を見ていた近藤はそこから視線を移す。

軍装に身を包んだ武蔵のクルーの前で、近藤は有賀に答えた。

「ああ、そうだ。俺は軍を降りる」

「それはどうして……」

「そろそろ潮時かと思ってな。次の世代に後を託そうかと思ったただけだ」

という訳で、と近藤は有賀に近づく。

「次はお前に任せる」

「……………はいっ!?」

「明日には正式に辞令が来るはずだ」

「辞令……………」

「ああ。武蔵の全指揮権をお前に任せるようにと」

「いや、そんな……………自分はそんな資格ありませんので」

一緒固まった近藤は次の瞬間笑い出した。

「お前、この事気にしてるのか？」

左肩を指差して、彼は有賀の肩に手を置く。

「こんなもんかすり傷だ。それと、前回の任務で戦死したクルーの家族に会いに行った

そうだな。俺はそういうお前の真面目さを信頼している」

「それでも、自分の指揮で艦長は傷を負って、クルーを……………」

「2年旅して35人の戦死は破格の少なさだ。それにお前が挨拶に行つた人たちの中で

お前を責めた人はいいたか？」

「……………いえ」

「そうだろう。誰もお前を責めたりしない。まあ、お前は真面目すぎて自分を責める傾

向にあるのは事実だ。でも、お前はもう一人じゃない」

ちらりと柑奈を見て、近藤はうなづく。

「大丈夫だ。上手くやろうとしなくていい。俺がそうだったようにみんなが助けてくれるさ」

「……しかし」

「義哉さん」

反論しようとした彼を遮ったのは柑奈だった。

「みんなで乗り切りましょう。私達ずっと、そうしてきたじゃないですか」

彼女を先頭にクルー達はまっすぐに彼を見つめていた。

「分かりました」

「おう、後は任せた」

有賀の肩を叩くと、近藤は踵を返しひらひらと手を振りながら去っていった。

そんな彼の背中を敬礼で見送り、彼らは大きくそびえる武蔵の艦首を見上げる。

下半分を海水に沈め、主砲を損傷した主砲が持ち上げられているその艦は、前よりも圧力を感じた。

「不安ですか？」

有賀の隣に立った柑奈の問いに、彼は首を振る。

「いや。さつきより不安は無い」

「よかったです」

「……これから、柑奈には負担をかけるかもしれない」

「今更ですよ。大丈夫です、私はずっとそばにいますから」

そんな2人の背中を見ていた丹生と美佳は目を配ると、クルーに退出を促していた。

「アイツ、やつと気が楽になったんじゃないか」

「なんですか航海長、それはあたしが負担だったと?」

ぐいっと迫る美佳に「いやいや」と苦笑いで返すと、泰平はエレベーターの天井を見上げて続けた。

「これまではああやって、弱みを見せて頼れる人つていなかっただろ。だから」

「今回の旅はだいたい強がってましたよね」

「妹にカツコ悪いとこ見せられないもんね」

「それはやつぱりあたしのせいじゃないです……!?」

口々に言う来島と丹生の言葉に肩を落とす。

「でも美佳ちゃんがいなかったら素直にならなかつたんじゃないかな……戦術長も、柑奈も」

微笑んで壁へと視線を落としていた水月の言葉に全員がうなづく。

「あーあ、わたしにもいい人いないかなー」

エレベーターが到着すると同時にそんなことを言いながら丹生は歩き出した。

「そういえば三原さん、この後何か？」

「ん、ああ暇ならどっか行かねえかって思ったんだけど」

「ええ、私は暇ですけど……どこに行くんですか？」

そんな会話と共に泰平と来島が離れ、その姿に丹生は頬を膨らませる。

「私だけ相手いないじゃん……」

「大丈夫です、わたしもですから」

「悲しいですよ2人とも」

丹生と水月を冷ややかな目で見て、美佳は端末へと目をやる。

「じゃ、あたしも用があるのでこれで」

「彼氏でも？」

「まさか。奈波と出かける約束してるんです」

それだけを言い残し、敬礼をして彼女は走り去った。

——この2年でだいぶ変わりましたね。

そんなことを思い、一ノ瀬もまた家路につく。

夕刻、ドックから出た有賀と柑奈は潮風と共に飛び立つ駆逐艦の光を見つめていた。

「次の任務はもしかしたら、これまでより過酷になるかもしれないな」

「それでもきつと大丈夫ですよ。武蔵なら」

笑いかけて彼と手を握る。

「きつと、私達なら……」

「ああ、そうだな」

ポケットに入れられた有賀の端末には、司令部からの辞令が届いていた。

彼らの旅路はこれからも続くだろう。

たとえこの地球がなくなつたとしても、人々が探究をやめない限り。

武蔵はまた宇宙を征くだろう。

新たな謎を追い求めて——。

——第26話 「帰還。そして新たな——」——

波動実験艦武蔵く遙か遠き起源の惑星く

——完——

設定

設定公開

??天体??

惑星ビースリー

大マゼラン雲内部、サレザーから7万光年の位置にあるシルズ恒星系に位置する惑星。ビーメラ4のような環境の星であるが、闊歩しているのは虫ではなく魚の形質をもった大型爬虫類。マングローブのような植物が海を包み、これらが折り重なりそれらが酸素により急速に酸化、石化することで地面のような硬さを実現している。この植物の地面は一部踏み固められていない場所や穴などが複数空いており、地球とは違い水の中でほとんどを過ごす両生類が住み着いている。魚類は海中で主に枯れたマングローブの根を食べたり巣にしたりして暮らしている。海底は浅くても水深34kmに達している。外から見れば緑の陸地がある星だが、実際は陸地に見えるところ全てがマングローブであり、元々陸地は存在しない。人が食べても大丈夫な動植物が多数存在する。

惑星ミラストル

この星ならではの鉱石が多数産出する。火山活動が活発のため一部危険な地域はあるが、基本は岩石と鉄からなる地球型惑星である。この星に生命はいない。CO₂濃度が高い。周囲に同様の鉱石でできた小惑星が周回している。

実はこの星そのものがアケリアス文明が残した装置の一つであり、訪れた者に試練を与えアケリアス召喚の鍵とする役割がある。

惑星ジルバ

銀河系から16万2700光年先に位置する恒星系の地球型惑星。この恒星は太陽系とほぼ同じ惑星構成でできており、これは地球の位置にある。数千年の間に衛星が接近しすぎのため分解して輪ができている。地球との環境近似率は89.5%と高い数値を示している。この星に住む人々は争いを好まず、来訪者を歓迎する。自衛用に内惑星用艦艇を持っているが武装は貧弱で、主に来訪者を迎え入れるための装備。国民は銃を携帯しており、停泊した来訪者の艦艇は監視されるため、警戒を全くしないわけではない。なお監視されているのは王政に仇なす革命が起きようとしているため。革命の背景には激しい差別と貧富の差がある。この星の国民には救いを求め、シャルバート教に入信している民が多い。

シャルバート教出典：宇宙戦艦ヤマト1

幻想惑星コウストリウ

近づいた者は幻想の世界へ迷い込むとされる星。ジレル人と似たような技術を用いており、接近した人々やモノによつて記憶を辿り別の世界を作り出す。ここから抜け出す手段は二つ。この世界で命を落とすか、この世界が幻想だと悟り元の世界に戻りたいと強く願うか。星そのものは格子状で、その内側に雲の層、更に内側に陸地が存在する。雲の層が幻惑層である。例外的に幻想の中でより深層に入り込んだ場合も抜けることができる。第一観測で地球人には地球に見える。今作では深層へ入り込んだ武蔵が海底から陽電子砲を空母瑞鶴の付近へと放ち歴史を変えた事で幻想が崩壊、呪縛から解放された武蔵は惑星内からのワープに成功した。

回遊惑星アケーリアス（旧作名：アクエリアス）

古代アケーリアス文明を育んだ水の星。分厚い大気の層に包まれており、また惑星周囲に浮かぶ二本の交差するリングの交点が人工太陽のように輝き熱を放つことで惑星に昼と夜を作り出している。かつてはある恒星に属していたが、古代アケーリアス文明がその技術で星の軌道を変え、他の惑星に水とともに命の種を蒔く方舟として運用していた。アケーリアス文明の滅亡後もこの星は動き続けている。海水面はアケーリアス以外の物質の重力に過敏に反応し、武蔵が接近した際にはほんの僅かな誤差程度海水面に変動が見られた。（物質の全てには僅かながら重力が存在するため、武蔵が放つ僅かな重力に海水面が反応してしまった）

リングには自力で異次元断層を作り出す機能があり度々姿を消すが故に伝説の惑星とされている。赤い石が導く先々には様々なアケリアスの遺産があるが、導くままに進む事でアケリアスが姿を現わす。

出典：宇宙戦艦ヤマト完結編

??武装??

波動防護弾

柑奈が重力子スプレッドから着想を得て艦内で開発、製造された防護ミサイル。撃ち出されてしばらくして起爆、そこを中心に円盤状に波動エネルギーが広がり防護壁を生成する。遠隔地に波動防壁を展開するような装備であり、自艦から離れた目標や自艦を盾にさらに大きな物を防衛する際にも使用可能。また出力方向を逆転させる事により増幅装置として使用することも可能。しかし生成のためには稼働状態の波動エンジンから波動エネルギーを取り出し高純度圧縮したまま弾頭へ詰め込む工程が必要となり、必然的に航行中の艦内工場でしか生産できない。また波動砲を装備していた場合は波動エンジンからエネルギーを取り出すのが難しくなる。この問題を解決するのは大出力スーパーチャージャーにより連続ワープとランジッション波動砲が開発されるまで待たれることとなる。

出典：宇宙戦艦ヤマト復活篇

ブラックバード制式採用型

武蔵に一機搭載された機体。外観や機能は銀河に搭載されたものと同じである。武蔵艦内で独自に作られた追加装備であるブースターやレドームアンテナを装備する事により、より広い任務に対応可能。偵察任務設定中に敵に発見された場合、自動で母艦との通信を遮断し離脱のための機動へと入るようプログラムされている。

長距離航行用探査機

大破していた波動砲システムを取り除きできた空間に新たに入れられた装置。

武蔵艦首から数光秒の範囲ではあるが、ほぼ完璧に惑星の分布と熱源を策定できる。これを利用し索敵も可能ではあるが、敵味方問わず検出してしまったため識別に時間がかかるのが難点。

??敵国家??

ボラー連邦（宇宙戦艦ヤマト1号）

天の川銀河の中で銀河中心を挟んで反対側で勢力を強める星間国家。地球をも勢力下に置こうと虎視眈々と狙っていたものの、そのためには地球の軍事力とガミラスの存在が邪魔であった。

そこで、銀河系から遠征し小惑星帯に身を潜め近づくガミラス艦隊を攻撃、これによつて地球、ガミラス艦隊をおびき出し背後から地球を狙う戦法を取る。しかし、武蔵単艦による突撃とアカギの波動砲、そして天の川銀河で強大な新たな国家が台頭し始めたことによりそれは失敗に終わる。

デインギル（宇宙戦艦ヤマト完結編）

かつて地球に住んでいた人々である。前回のアケーリアス（アクエリアス）最接近時に地球は水に沈むがその際地球に近づいた異星人により彼らの一部は救われ、新たな惑星で国家を建てた。

しかし、デインギルの王であるルガルは地球への凱旋を目指しアケーリアスを再び地球へけしかける計画を立てる。そのためにはアケーリアスの存在を知る事が重要と考え宇宙の至る所へと艦隊を派遣していた。その一団が偶然武蔵と遭遇、ちやうど現れていたアケーリアス略奪を狙い攻撃を仕掛けてきた。この一団は本星へアケーリアス発見の報を打たずに攻撃を開始し全滅したため、デインギル本星では武蔵（地球艦艇の姿）を知る事もアケーリアスの所在を知る事もない。

??現象??

時空断層

アケーリアスが出現する際に形成されるゲート。次元断層と現象そのものは似て
いるが

、それは別の宇宙へと繋がっており飲み込まれれば別の宇宙へと放り出され戻つては
来られない。

武蔵はアケーリアス出現後の閉じきつていない入り口を攻撃によりこじ開け、その際
に発生した引き込みを利用してディングル艦隊もろともアケーリアスを元の宇宙へと
戻した。しかしそれが歪みとしてこの宇宙に残り、近い未来銀河系に波乱を巻き起こす
こととなる。